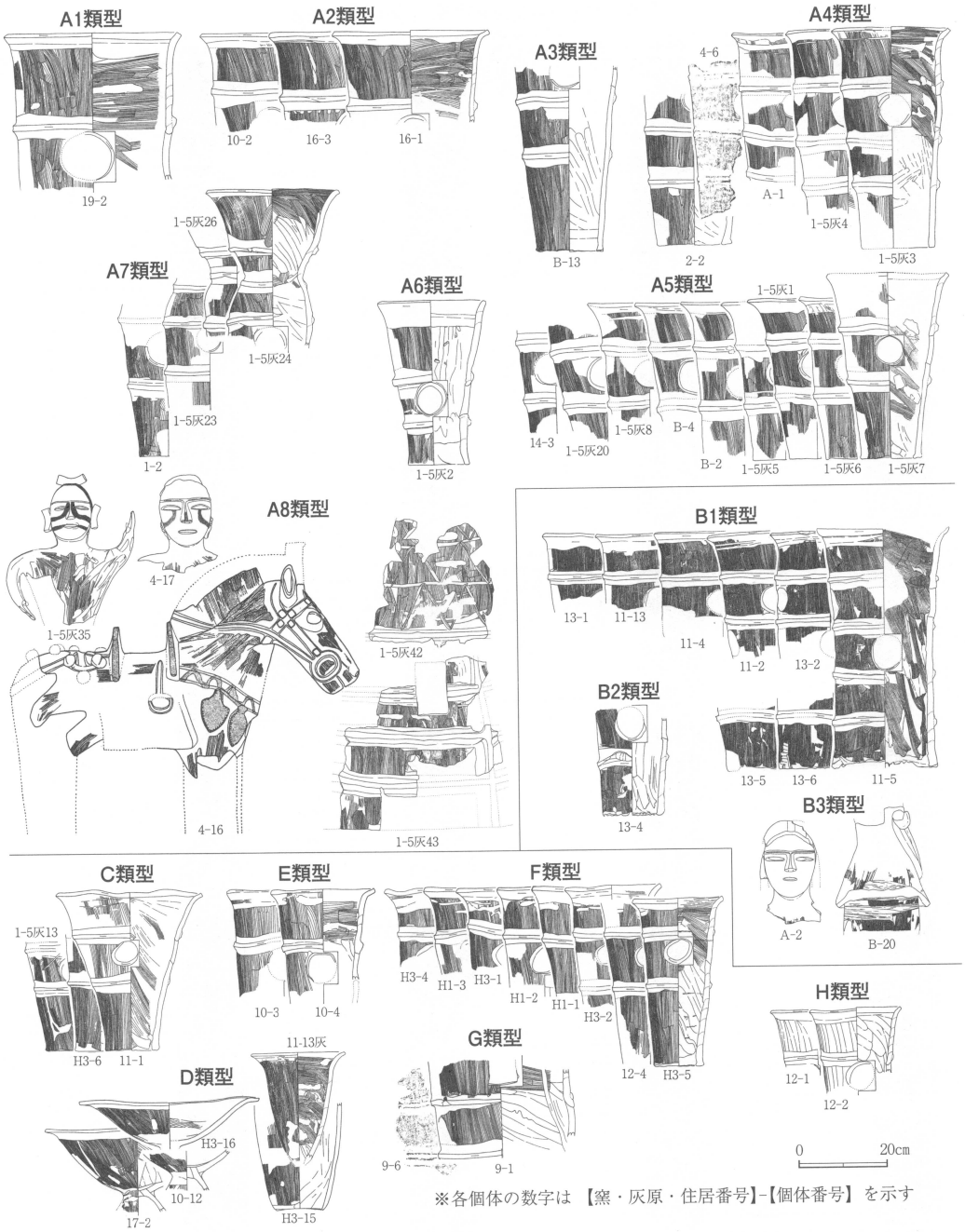


図20　桜山遺跡出土埴輪の諸類型

口縁部付近の幅広いヨコナデなどの手法が一致する。Ａ６類はかなり粗雑な作りの小型円筒埴輪で、第３段が著しく長く、１個体だけイレギュラーな存在である。四角く大きい突帯や刷毛目を伴わない内面調整、寸胴に立ち上がる口縁部などＡ５類型とは明らかに異なる。Ａ８類型

は形象埴輪である。特に、人物埴輪は横に細長い半円形の眼、幅広い口、Ｌ字形の赤彩など顔面表現が酷似する。

【Ｂ類型】Ｂ１類型は４条５段の大型円筒埴輪で、寸胴なプロポーション・強い受け口状を呈する口縁部など形態が酷似する。さらに、突出度の低い突帯、雑な内面調整を上に向かってタテハケからナナメハケに施す手法も一致する。Ｂ２類型も寸胴な２条３段の小型円筒埴輪で、貧弱な突帯、雑な内面調整などはＢ１類型とよく似ている。Ｂ３類型は人物埴輪だが、半円形ではなく横長楕円形の目などやはりＡ８類型の人物埴輪とは若干顔つきが異なっている。

【Ｃ類型】口縁部が大きく開く２条３段の小型円筒埴輪である。低平な突帯、ストロークの長い内面ナナメハケなどの手法が一致する。

【Ｄ類型】刷毛目で調整され、埴輪と同時焼成された土器である。形態は多様だがいずれも１つの刷毛目で調整される。

【Ｅ類型】２条３段の小型円筒埴輪である。内面口縁部付近のヨコハケが特徴的である。

【Ｆ類型】Ｈ１・Ｈ３号住居で出土した２条３段の円筒埴輪である。桜山遺跡において最も新しい様相を示す類型とされ、窯では同様の特徴をもつ個体が確認できないと報告されている。しかし、刷毛目を見ると12号窯で１個体だけ同じ類型を確認できる。細身で第１段が長い形態で、明らかに新しい様相を示す。下稜が不明瞭な突帯、内面雑なナデの後に口縁部付近のみをナナメハケするなど手法が一致する。

【Ｇ類型】５条６段の大型円筒埴輪と考えられる。方形透孔を穿孔する特徴的な個体である。９号窯に２個体だけ存在しており、焼台として利用された可能性が高い。この個体については後で詳しく言及する。

【Ｈ類型】ナデ調整による２条３段の小型円筒埴輪である。内外面をすべてナデ調整し、低平な突帯、内面口縁部の強いヨコナデなどの手法が一致する。

以上、桜山埴輪窯においても刷毛目共通類型はいずれも形態や諸特徴が一致する事実を確認した。設定類型は限られた工人が近接した時間に製作したものと結論付けられよう。

４－４　遺構からみた諸類型の前後関係

次に設定した類型の前後関係を、遺構の状況から位置付ける。桜山の埴輪窯は八手状の切り合いをもつ構造で、各窯の前後関係を確認できる。それによると、７・９号窯などの単独窯を除けば、いずれも斜面から平坦面に向かって窯が伸びていく点が確認されている。ここでは須恵器窯の６・８号窯を除き、埴輪窯の群構成を確認しておく。今、報告書に倣って６号窯を境に西をＡ群、東をＢ群と呼称する。また、１・２・３・４・５号（Ａ１）、７号（Ａ２）、14・15号（Ｂ１）、10・11・12・13・16・17・18・19号（Ｂ２）、９号（Ｂ３）として記述を進める（図21）。

Ａ群では、ＭＴ15型式とされる須恵器窯の８号窯を切って、埴輪窯の築窯が始まる。その順

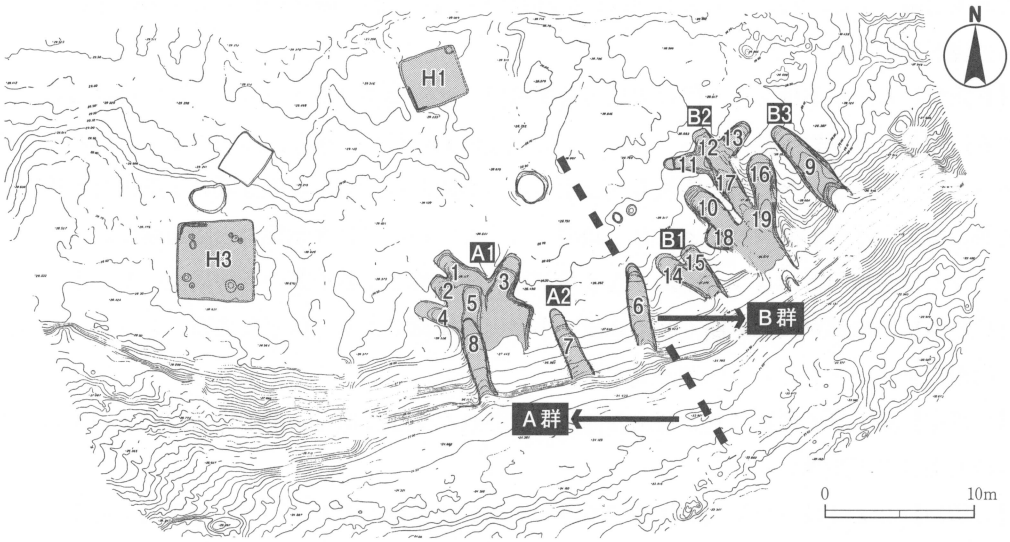


図21　桜山遺跡の埴輪窯

序は切りあい関係から、４号→２号→１号→５号→３号となる。北武蔵の八手状の窯は、複数の窯が灰原を共有する点に特徴がある。このＡ１群は大きく掘りくぼめた灰原を５基の窯が共有する典型的な群構成である。一方、Ａ２の７号窯は単基窯である。

Ｂ群では単基窯の９号窯（Ｂ３）、２基構成の14・15号窯（Ｂ１）を除くＢ２群が大きな単位を構成する。その順序は切りあい関係から、19号→18号→17号→10・16号→12号→13号→11号となる。なお、桜山窯の発掘所見では、各窯の床面状況から２～３回ほどの焼成回数という極めて限られた期間で１つの窯が放棄され、次々と窯が構築された点が確認されている。

以上を踏まえ、諸類型の出土地点を確認する。今、諸類型の出土地点を示したのが表６である。大多数の窯において主体を占めるのがＡ類型である。この現象をどう理解すべきか。

振り返って、刷毛目共通類型を見てみると、Ａ類型は極めてイレギュラーなＡ６類型の一個体を除けば、５条（Ａ１類型）・４条（Ａ２類型）・３条（Ａ３・Ａ４類型）・２条（Ａ５類型）という複数規格が存在するにも拘わらず、突帯・透孔の形状や内外面の調整方法に規格を越えた共通性が認められ、型式的距離が近い点を確認していた。Ａ類型では木目パターンが若干異なる数種が認められるので、兄弟工具が何本か存在していたと思われるが、特徴の近い埴輪で構成される一群であり、近接した時期に製作されたと考える。だとすると、桜山窯においてＡ類型が大半を占める状況は、比較的近接した時間幅の中で、複数の兄弟工具が使われながら、様々な階層への供給プロジェクトが集中的に同時進行していた様相を示すものと結論付けられる。Ａ・Ｂ群が大量の需要に応えるために、フル稼働していたような状況だろう。

さらに、桜山遺跡において少なくとも10基程度の窯でＡ類型が主体を占めるということは、１基の操業を２～３回、１回の窯詰めを30本前後と仮定しても、数百本規模の埴輪が数本の兄

弟工具で製作されたことになる。これは物理的に可能なのか。

実際の埴輪製作実験（早稲田大学会津八一記念博物館2002）や、工具の製作・使用実験（城倉2007c）では、一旦春材部が摩耗して夏材部が突出する木目が出現すると、それ以降の工具の摩耗はほとんど進まず、数十本製作しても全く工具に変化がない点を確認していた。実際の生産地の分析からも工具の耐久度が高い点が示されたものと考える。また、それだけの本数に同じ刷毛目が見出されても、形態・技術的な変異幅が非常に小さい点は、工具が世代を越えて使用されるような状況ではなかった点を示している。

表６　桜山遺跡における各遺構出土埴輪の刷毛目

		刷毛目A類	刷毛目B類	刷毛目C類	刷毛目D類	刷毛目E類	刷毛目F類	刷毛目G類	刷毛目H類
A群	1号窯	10	1	－	－	－	－	－	－
	2号窯	11	－	－	－	－	－	－	－
	3号窯	7	1	－	－	－	－	－	－
	4号窯	16	－	－	－	－	－	－	－
	5号窯	2	－	－	－	－	－	－	－
	1-5灰原	33	－	2	－	－	－	－	－
	7号窯	6	－	－	－	－	－	－	－
	A群窯外	2	1	－	－	－	－	－	－
B群	9号窯	2	－	－	－	－	－	2	－
	10号窯	5	－	－	1	2	－	－	－
	12号窯	1	－	－	－	－	1	－	2
	14号窯	3	－	－	－	－	－	－	－
	15号窯	4	－	－	－	－	－	－	－
	16号窯	9	－	－	－	－	－	－	－
	17号窯	2	－	－	1	－	－	－	－
	19号窯	5	－	－	－	－	－	－	－
	11-13灰原	－	－	－	1	－	－	－	－
	B群南斜面	13	3	－	－	－	－	－	－
	11号窯	1	10	1	－	－	－	－	－
	13号窯	－	7	－	－	－	－	－	－
住居	H1号住居	－	－	－	－	－	14	－	－
	H3号住居	3	－	1	2	－	7	－	－

では、表６に戻って類型の前後関係を確認する。Ａ類型は、多くの窯で主体を占めていたが、東群（Ｂ２群）最終段階の13・11号窯のみはＢ類型が主体を占める。Ｂ１類型の４条５段に特徴的な寸胴で裾広がりの形状は、生出塚窯製品における埼玉鉄砲山古墳段階の埴輪に酷似し、比較的新しい様相を示す（城倉2011a）。つまり、窯の切り合いから把握した前後関係と、刷毛目共通類型の分布は極めて整合的である。また、Ｈ１・Ｈ３号住居では、最も新しいとされる型式のＦ類型が主体を占める。この類型は、窯では１個体しか出土していないので桜山で焼成されたものかは不明だが、胎土や色調が窯出土品と一致し、さらにＡ・Ｂ類型の製作手法を受け継ぎながらもスリム化して第１段が長いなど系譜的な変遷が追える資料である。いずれにしても、Ａ→Ｂ→Ｆという前後関係が把握できる。以上、桜山窯では３時期の生産が想定できる。

５．桜山窯産埴輪の供給先－毛塚古墳群出土埴輪の分析－

桜山窯産埴輪の供給先については、江原昌俊が人物埴輪の顔面表現から推定している（江原2004）。江原は、①東松山市附川古墳群、②行田市大人塚古墳、③吉見町三ノ耕地４号墳、④東松山市高坂弐番町遺跡、⑤坂戸市北峰22号墳の５か所を推定している。埼玉古墳群に近接する渡柳古墳群の大人塚古墳を除けば、推定された供給先はいずれも比企周辺である。これらの資料はどれも断片的、あるいは未報告の資料であるため、その検討は今後の課題とするが、人物埴輪の顔面表現から生産地を推定する方法は首肯できる。

ここでは近年報告書が刊行された東松山市杉ノ木遺跡の毛塚古墳群出土資料に焦点を当てる。

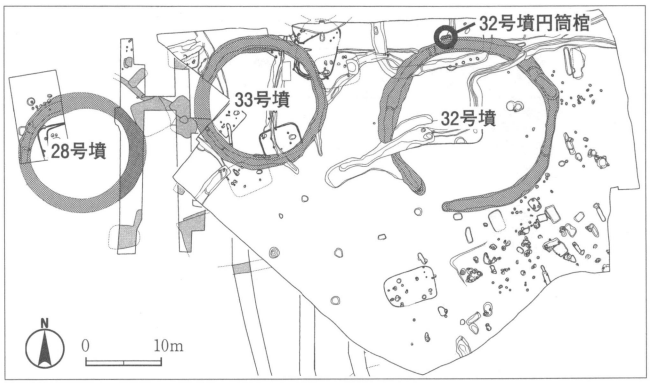


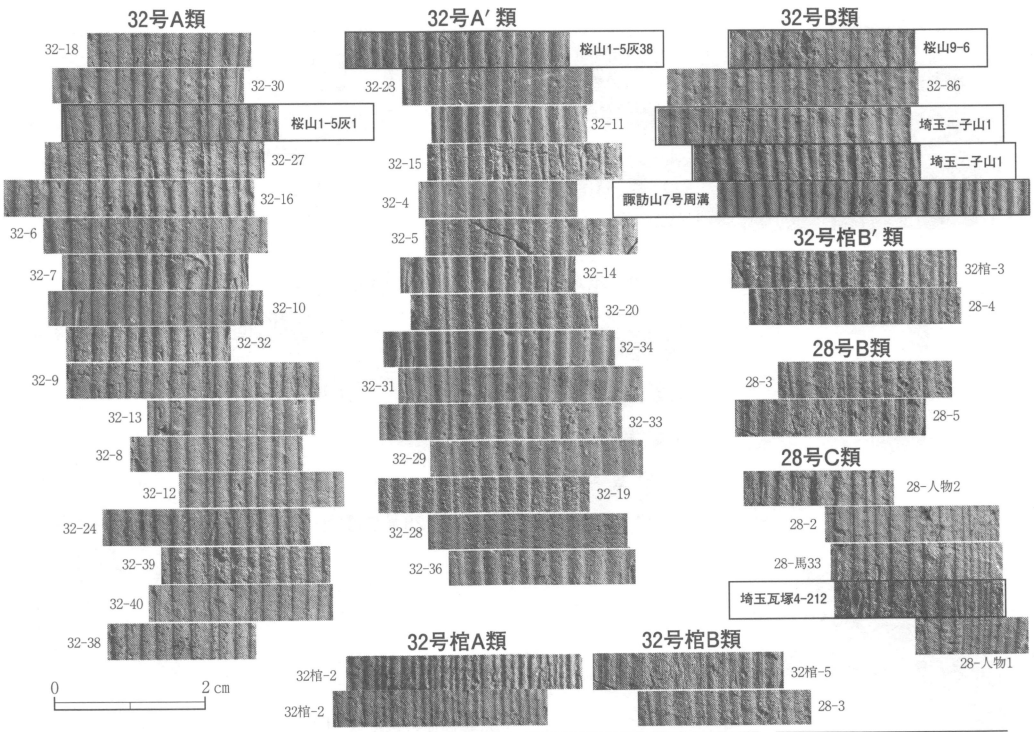
図22　毛塚古墳群の全体図

毛塚古墳群は桜山遺跡の東方700mという至近に位置する（宮島2003・大谷2006）。毛塚古墳群の中で発掘調査され、埴輪が出土しているのは28・32号墳である（図22）。特に、32号墳出土埴輪は大谷徹によって、桜山窯の製品である点が推定されている。

今、毛塚古墳群の32号墳・32号墳円筒棺・28号墳の刷毛目の分析成果を図23に示した。そして刷毛目共通類型を図24に示した。まず、32号Ａ・Ａ′類の刷毛目は桜山窯のＡ・Ａ′類と完全に一致する。形態・製作技術の一致から、桜山Ａ５類型が供給された点は明らかである。

さらに、円筒棺の可能性が高い32号Ｂ類型は５条６段の大型円筒埴輪だが、埼玉二子山古墳・諏訪山７号周溝・桜山Ｇ類型と刷毛目が一致する。桜山Ｇ類型は焼台と判断されるので、桜山開窯期あるいは桜山以前にさかのぼる段階に、桜山の集団によって製作された大型円筒埴輪ということになる。図25の比較で分かるように、毛塚32号墳品のみは円形スカシで最上段・最下段が長い特徴があるものの、段間の規格がすべて共通する点が注目される。つまり、桜山Ｇ類型は埼玉二子山古墳（杉崎1987）まで運ばれた類型で、諏訪山７号周溝・毛塚32号墳など周辺の古墳では円筒棺としてのみ使われたと推察される。これは、生出塚で生産され、埼玉瓦塚古墳に供給された大型円筒埴輪が、新屋敷古墳群で円筒棺として使われていた現象と共通する（城倉2009）。

次に32号墳埴輪棺Ａ類型は３条４段、Ｂ類型は２条３段の円筒埴輪である。32号墳Ｂ類型に関しては28号墳Ｂ類型と一致するため、28号墳の樹立埴輪を転用したものと思われる。さらに28号墳にはＣ１類型の２条３段円筒埴輪、Ｃ２類型の人物埴輪も確認できる。32号墳埴輪棺・28号墳出土品は、桜山窯出土品と形態・技術的に高い共通性が認められ、系譜関係が想定される。これら毛塚古墳群で桜山窯製品と共伴する埴輪群は、桜山の前段階に位置付けられる資料群であり、これらを「プレ桜山」と呼称する。詳しくは別稿で論じるが、プレ桜山は、①扉表現のある家、②波状線刻を有する３条４段の円筒、③人物腕部の木芯中空技法、④弓を貼り付けた板を持つ人物、⑤足にトゲの表現がある力士など、特徴的な一群である点を確認している（城倉2008）。比企を中心に分布しながら、６世紀前半段階に生出塚窯製品に先んじて東京湾まで分布を拡大した埴輪群である。また、プレ桜山の毛塚28号墳Ｃ２類型の人物埴輪は、埼玉瓦塚古墳出土の女子人物埴輪（杉崎1985）と刷毛目が一致し、諸特徴から同工品の可能性が高い（図24右下）。つまり、プレ桜山・桜山の大型品はともに埼玉古墳群に供給されていること



個体番号	刷毛目	器種・条数
32号墳		
4	A′	円（2条）
5	A′	円（2条）
6	A	円（2条）
7	A	円（2条）
8	A	円（2条）
9	A	円（2条）
10	A	円（2条）
11	A′	円（2条）
12	A	円（2条）
13	A	円（2条）
14	A′	円（2条）
15	A′	円（2条）
16	A	円（2条）
17	-	円（2条）

個体番号	刷毛目	器種・条数
18	A	円（2条）
19	A′	円（2条）
20	A′	円（2条）
21	-	円（2条）
22	-	円（2条）
23	A′	円（2条）
24	A	円（2条）
25	A′	円（2条）
26	A′	円（2条）
27	A	円（2条）
28	A′	円（2条）
29	A′	円（2条）
30	A	円（2条）
31	A′	円（2条）
32	A	円（2条）

個体番号	刷毛目	器種・条数
33	A′	円（2条）
34	A′	円（2条）
35	A′	円（2条）
36	A′	円（2条）
37	A′	円（2条）
38	A・A′	円（2条）
39	A	円（2条）
40	A	円（2条）
84	B	円（5条）
85	B	円（5条）
86	B	円（5条）
87	B	円（5条）
32号墳棺		
1	A′	円（3条）
2	A	円（3条）

個体番号	刷毛目	器種・条数
3	B・B′	円（2条）
4	A′	円（3条）
5	B	円（2条）
28号墳		
1	B	円（2条）
2	C	円（2条）
3	B	円（2条）
4	B′	円（2条）
5	A	円（2条）
1	C	人物
2	C	人物
33	C	馬
36	C・C′	馬

凡例

※各写真の番号は、【古墳番号】－【個体番号】を示す。
※枠線内は、桜山窯・埼玉二子山古墳・埼玉瓦塚古墳・諏訪山７号周溝出土品の刷毛目を示す。
※「32号棺」は、32号墳北側周溝部分に検出された円筒棺の刷毛目を示す。
※表の掲載方法は、表４の凡例を参照。
※個体番号は、（大谷2006）に対応する。刷毛目の種類を示すアルファベットは図上の写真に対応する。

図23　毛塚古墳群出土埴輪の刷毛目と対応関係

になる。

以上、毛塚古墳群の分析から桜山窯産製品の供給関係を示した。桜山に活動した集団は、プレ桜山の段階には東京湾まで分布を広げる動きを見せながらも、桜山窯の段階になると毛塚古墳群など周辺に中小型品を供給する地域密着型の生産を行っていた。一方で、埼玉古墳群の大型墳の築造に際してのみ、大型品を供給したと推察される。

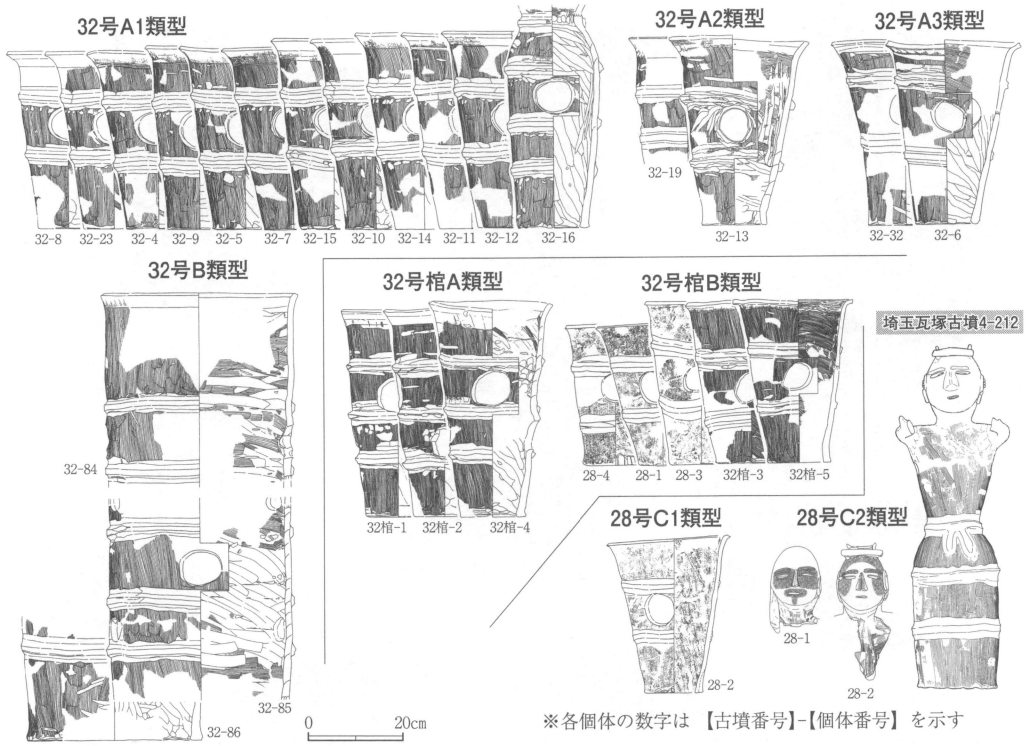


図24　毛塚古墳群出土埴輪の諸類型

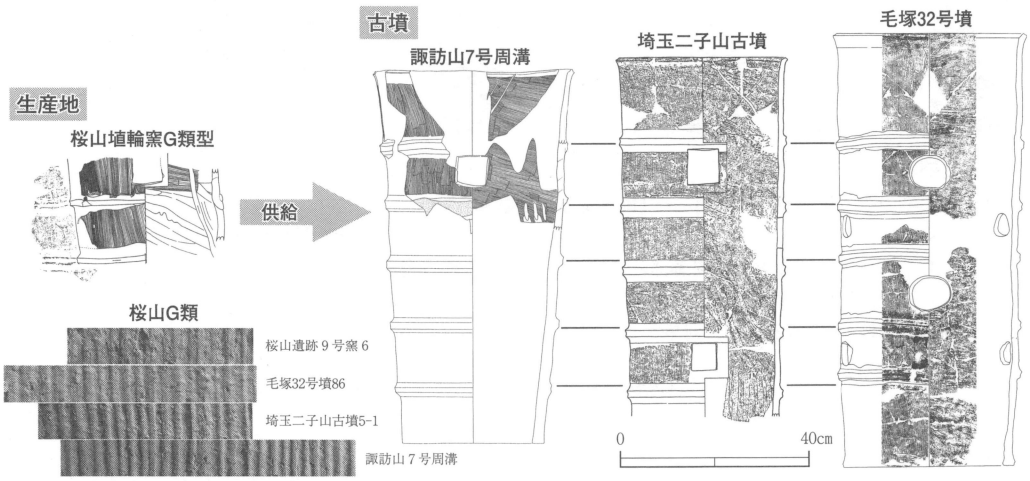


図25　埼玉古墳群に供給された比企産大型円筒埴輪

6．考　　察

本稿では、姥ヶ沢・桜山埴輪窯という生産遺跡の分析事例を示した。最後に、その分析成果を踏まえて、各窯の様相を比較する。その上で、北武蔵という地域社会の文脈の中で埴輪生産を位置付けてみたい。

本稿では「刷毛目が共通する個体群は、近接した時期の限られた工人によって製作された」という仮説を検証した。結果、各窯において設定した刷毛目共通類型が形態・技術的に酷似する個体で構成される点を確認した。刷毛目共通類型は、限られた工人が近接した時間幅の中で製作に関わったのである。また、形態・技術的に距離のある埴輪に同一の刷毛目が存在しない点を考慮すれば、工具は世代を超えて使用されるものではない。もちろん、桜山遺跡Ａ６類型のようなイレギュラーな存在もあるが、それも１個体であって、刷毛目共通類型内の細分はほとんどが器種・規格の違いに基づくものである。その場合でも、突帯・透孔形状や内外面の調整などの特徴が、刷毛目共通類型内で一致することからすれば、これら複数規格の埴輪は同時期に異なる階層への供給を目的として作り分けられていた可能性が高い。すなわち、生産地においては基本的に様々な階層への供給プロジェクトが同時進行していたのである。

実際の分析では、姥ヶ沢窯で12類型・２時期、桜山窯で17類型・３時期を認識したが、主体的な刷毛目共通類型の入れ替わりと、遺構の切りあいによる前後関係の把握は整合的だった。各類型は急激に入れ替わるわけではなく、相互に共伴しあいながら、新相を示す類型の比率が上がっていくというのが実態に近い。また、窯の切り合いという物理的前後関係があっても、刷毛目共通類型は常に連鎖して存在する点からすると、築窯に長時間の隔たりはなく、新しい窯が次々に作られながら、継続的な生産が営まれていたと考えられる（註１）。

このように生産地では、生産活動が常に連鎖している点を確認したが、各窯における群構成の細分と刷毛目共通類型の存在形態の相関関係を見出していくと、その中で最小の単位群を見いだせる事実に気づく。まず、姥ヶ沢窯では上段群・下段群相互が最小の単位群である。４基の単位は立地・窯構造・刷毛目分布において明瞭な差異を持っていた。一方、桜山窯では、図21でＡ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３と細分した単位がそれに対応する。Ｂ２群のみは11・13号窯の刷毛目共通類型の分布状況が異なるなど複数単位の重複と思われるが、他は明瞭な単位を構成する。これらの単位は、①単基窯、②双子窯、③４～５基の窯、の３タイプに分類できる傾向が認められる。これらの単位群は、同時期に「発注」が入っていた生産プロジェクトの規模・量を反映していると考える。これを生産の基礎的な単位と捉え、「生産単位群」と呼称する（註２）。

つまり、同時期においてはプロジェクト規模に応じた生産単位が構成されながらも、継続的な生産によって単位群が次々に拡張され、遺跡が形成されたのである。特に、八手状の窯は、連続的な生産時に灰原を共有することで、スペースと労力の省略を狙ったものと考えられる。

桜山遺跡Ｂ２群のような斜面地から高台に向けて、いくつかの生産単位群が重複しながら伸びていく現象はそれを如実に示している。このように各生産遺跡は、連続した生産活動によって形成されたわけだが、ここで注意しなければならないのは、姥ヶ沢・桜山窯ともに、現在確認されている埴輪窯のすべてが、特定の刷毛目共通類型が存在しうる時間幅、つまり比較的限られた期間に集中して稼働している点である。姥ヶ沢・桜山において現在確認している生産遺跡は、その場所で活動した集団の全体を反映しているのだろうか。

注目すべきは、生出塚遺跡における状況である。生出塚遺跡では窯の群単位が北支台・南支台と呼ばれる広い範囲に分散して存在する。しかし、生出塚窯における分析では、生出塚に活動する集団が、同時期においては近接した場所で製作を行いながら、南支台→北支台→南支台と生産の場所を移動する現象を確認している（城倉2010a）。この現象を「支群シフト」と呼称する。生出塚窯における支群シフトは、いずれも特定地点における窯の構築が飽和状態に達した際に起こると同時に、埼玉古墳群への新たな大型品の供給を画期としている点が注目される。つまり、支群シフトは、ある程度の生産の継続によって窯の構築スペースが少なくなり、粘土や燃料の採集が付近で困難になった際に、新しい大規模プロジェクトに対応するため、生産の拠点を近隣に移動する現象であると考える。その際においても、刷毛目共通類型の連鎖や焼台の移動などが示すように生産そのものは順調に継続している。

振り返って、姥ヶ沢・桜山埴輪窯を見てみる。姥ヶ沢窯は６世紀初頭～前半に位置付けられるが、同じ台地傾斜面の東方300ｍに６世紀後半の権現坂窯が存在し、その系譜関係が想定される（新井・森田1998）。一方、桜山埴輪窯では、毛塚古墳群で桜山産製品と共伴した埴輪群が「プレ桜山」という系譜的に遡る埴輪群であり、桜山遺跡内においてもＦ類型という系譜的に繋がる新しい埴輪が存在していた。つまり、両生産地ともに、その周辺に特定集団が活動した痕跡を見出すことができるのである。同じ状況は、北武蔵の他の生産地でも確認できる。同じ比企の和名窯では、過去の調査で８基の窯が確認された谷（金井塚1983）の裏側斜面で新たに２基の窯が発見され、その系譜関係が指摘されている（弓2003）。さらに、児玉の割山窯でも、広い範囲を支群が移動する現象が確認されている（今泉1981など）。

この状況からすると、姥ヶ沢・桜山窯の様相は、生出塚窯など大規模な生産地の一部分を切り取ったような状況を呈する点に気づく。つまり、現在、発掘調査で確認されている部分が生産の全体像なのではなく、それは各産地を中心として活動した集団の支群シフトに起因する生産の一部分が見えているだけと推察する。このように、各地において特定の伝統を担う集団が継続的に活動し、新たな粘土採掘地・燃料採集地・窯の構築場所などを求めて、エリア内の小規模な移動（支群シフト）を繰り返しながら生産を行っていた点は、北武蔵のすべての産地で共通すると考える。今、各産地を単位として活動した集団の生産した埴輪群を「系統」と呼べば、轟俊二郎が論じた概念の重要性（轟1973）が実感できる。実際に６世紀の北武蔵から出土するほとんどの埴輪は、窯を単位とした幾つかの「系統」に集約されるのである。

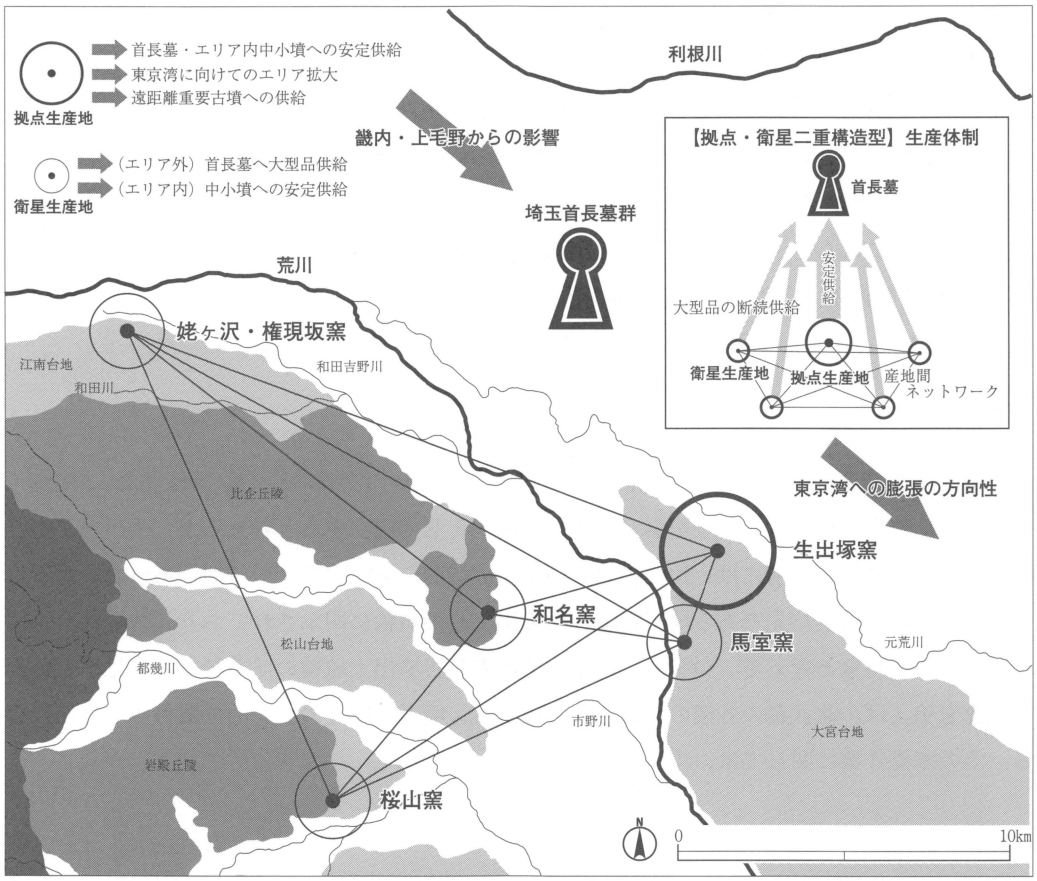


図26　北武蔵の埴輪生産遺跡と生産体制のモデル

以上、北武蔵では特定産地を中心として特定集団が継続的に活動した点を論じた。ここでは、その生産の歴史的な意義を考えてみる。本稿の分析で、姥ヶ沢・桜山窯ともに中小型品は周辺の中小古墳に供給した点が判明した。つまり、これらの窯の恒常的な製品の「供給エリア」はそれほど広くなかった事実が読み取れる。しかし、桜山G類型が埼玉二子山古墳に供給され、プレ桜山の毛塚28号墳Ｃ２類型は同じく埼玉瓦塚古墳に供給されたように、埼玉古墳群の首長墓の造営に際しては、大型品を生産して供給していた。一方、同じ北武蔵でも、生出塚窯の状況は大きく異なる。生出塚窯では小型品よりも中・大型品の出土量が非常に多い。また、刷毛目の同定から埼玉古墳群の天祥寺裏古墳・二子山古墳・瓦塚古墳・奥の山古墳・愛宕山古墳・将軍山古墳・鉄砲山古墳への供給が判明しているように（城倉2007a）、６世紀第２四半期以降、常に埼玉古墳群に供給された埴輪の主体を占める。さらに、６世紀後半になると極度にスリム化・軽量化された小型品が、東京湾まで供給エリアを拡大する（城倉2010a）。

この状況をモデル化したのが図26である。今、埼玉古墳群の首長墓への安定供給、東京湾に向けての供給エリア拡大など、他の窯とは明らかに地域社会における役割が異なる生出塚窯を

「拠点生産地」と呼称する。大宮台地北端という埼玉古墳群至近の場所、そして元荒川・荒川に挟まれた南への水上交通の利便性の高い場所に立地する生出塚は、北武蔵における埴輪生産のまさに中核をなす存在である。一方で、埼玉古墳群からみると荒川を挟んだ西南丘陵部の比企・大里に位置し、恒常的には近隣の中小古墳への供給という地域密着型の生産を行いながら、埼玉首長墓の造営に際し断続的に大型品の供給を行う姥ヶ沢・権現坂・桜山・和名窯などの生産地もある。これらを〈埼玉古墳群－生出塚窯〉の周縁に位置して客体的な役割を担う点を考慮し、「衛星生産地」と呼称する。6世紀後半、北武蔵では埼玉古墳群を頂点とする階層秩序の下で、「拠点・衛星二重構造型」の生産体制が確立していたのである。

おわりに

本稿では生産地分析の成果を、北武蔵における地域社会の文脈の中で位置付けた。「拠点・衛星二重構造型」体制は、6世紀第2四半期を画期として成立すると考えるが、生出塚が拠点生産地として成長する前には、比企のプレ桜山が広域的に影響力を持つ時期があった。両者の交代劇は、共通の供給先である埼玉古墳群から出土した埴輪に明示されており、地域社会再編を示す重要な現象と考える。つまり、埼玉古墳群の各古墳出土埴輪の「系統差」を見出し、その変化を追えば、北武蔵の各窯の相対年代も確定し、埼玉古墳群の歴史的位置付けも可能になる。その基礎作業に関しては、本書Ⅳ章で論じる。

註

（1）刷毛目共通類型の連鎖現象は、その工具を保持する工人の連鎖とその入れ替わりを示しているわけだが、その際に注意すべきが、桜山A類型など圧倒的比率を占める類型が存在する現象である。古墳の分析でも、やはり特定刷毛目が認められる埴輪群が圧倒的多数を占める事例が報告されている。エース工人（小橋2004）や中心的製作者（城倉2004）と呼ばれる類型である。しかし、桜山窯におけるA類型などの存在形態を考慮に入れるならば、これらは複数工人による同一工具の共有や兄弟工具の分有によって生まれた類型、すなわち限られた期間における集中的な生産活動に起因する類型と考えることもできる。実際に形態・技術的情報を共有する複数工人が、工具の共有・分有をした場合、同工品の識別は困難を極めると想定される。私自身、このようなエース工人類型の存在を工人集団の構成の面から積極的に評価してきたが（城倉2004）、今後はこれを中立的な意味で「主体類型」と呼称し、古墳出土埴輪の同工品分析事例と生産地を結びつけながら、その存在の歴史的位置付けを再考すべきと考えている。

（2）実際に、生出塚遺跡におけるW地点32・33号の双子窯は、埼玉古墳群の天祥寺裏古墳への供給プロジェクトと完全に対応関係にある点を確認している（城倉2009）。今後、古墳出土埴輪と生産窯を結びつけることで、生産地において進行していたプロジェクトを具体的に把握する作業が必要になろう。

Ⅳ　埼玉古墳群の埴輪編年

はじめに

稲荷山古墳の後円部礫槨から出土した「辛亥銘鉄剣」、日本書記安閑紀「武蔵国造争乱」の伝承など、埼玉古墳群は考古学と文献史学を結ぶ謎を秘めた古墳群である。後期を通じて同じ場所に大型古墳が営まれる稀有な古墳群であると同時に、遺構・遺物の質・量ともに卓越した内容を誇る埼玉古墳群は、関東の古墳研究史上、常に重要な位置を占めてきた。発掘調査に基づく考古学の緻密な遺構・遺物の分析、文献史学の視野の広いアプローチなど、東国古代史を巡るダイナミックな議論が蓄積されてきた、まさに夢の舞台である。

しかし、考古学の根幹である編年という点に関して言えば、埼玉古墳群の編年はまだ確立したとは言えない。様々な要素をもつ古墳の編年は、多角的に検証されるべきなのは言うまでもないが、墳丘規格・埋葬施設・副葬品・供献土器など、どの要素を取り上げてみても、現状では全ての古墳を通して編年を確立できる要素とはいえない。その点において全古墳の通時的分析が可能な埴輪は、最も編年に有効な要素であるといえる。だが、その埴輪研究においても、未だ体系的な分類を踏まえた編年は確立していないのが現状である。埴輪編年が確立できなかった原因は複数あるが、最大の問題は首長墓では当たり前に見られる現象－複数生産地からの供給、その実態を把握することができなかった点にある。

本稿は、この最大の問題点を克服し、埼玉古墳群の確固たる埴輪編年を確立する。それは、東国古代史のダイナミックな展開を実証的に位置付けるための基礎作業に他ならない。

１．埼玉古墳群における埴輪研究の現状と課題

１－１　埼玉古墳群の編年と埴輪研究

埼玉古墳群の編年研究に関しては、長い歴史がある。しかし、埼玉古墳群の中で埋葬施設が発掘されている古墳は、稲荷山古墳・将軍山古墳に限られ、出土土器もそれほど多くはない。また、墳丘規格・周溝形態・主軸のブレや立地論など様々な角度から編年が試みられているが、単一の要素で通時的に分析が可能なのは埴輪しかない。

それ故に、埴輪の分析が埼玉古墳群の編年の最も重要な要素とされてきた。しかし、各報告書で編年は試みられているものの、埼玉古墳群出土埴輪を通時的・体系的に分析した研究は、岡本健一と若松良一の業績に限られる。必然的に、埼玉古墳群の埴輪編年を確立するためには、両氏の研究が出発点となる。まずは、その成果を概観し、現状の問題点と課題を明確化する。

１－２　若松良一「追加樹立説」の問題点

時間的には逆転するが、最初に若松良一の分析成果について検討する。若松は、埼玉古墳群の最新の発掘成果である稲荷山古墳の報告書の中で、埼玉古墳群出土埴輪全体の編年を論じている（若松2007）。

まず、若松は稲荷山古墳出土埴輪の特徴について、「バラエティに富み、型式学的にみた場合、同一集団が一定の技法に従っていちどきに製作したもの（同一型式）ではない」とする。実際の分析作業では、円筒埴輪を４大分類（Ａ～Ｄ類）し、さらに規格差で12分類（Ａ１・Ａ２・Ａ３・Ａ４・Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３・Ｃ１・Ｃ２・Ｄ１・Ｄ２・Ｄ３）に細分する。そして、「４大分類が工人集団の相違を示している可能性が高いのであるが、型式学的に見て、なお時間差も存在するもの」と結論付ける。しかし、若松自身が「同一時期の所産でないと証明することも容易ではない」と吐露し、「決定的な方法に苦慮した末に、稲荷山古墳と埼玉古墳群の各古墳の埴輪資料のクロスチェックを試み」るとするように、集団差と時間差をどの要素において峻別するのかの戦略がないままに追加樹立を前提とした編年を展開していく。

若松は埼玉古墳群出土埴輪を、１期～６期に編年し、７期として中の山古墳の須恵質埴輪壺を位置付ける。今、若松の編年表に基づいて各期の該当類型を取り上げれば以下のようになる。

【１期】稲荷山Ａ２・Ａ３・Ａ４

【２期】稲荷山Ｂ１・Ｂ２、二子山Ａ１ａ・Ｂ、愛宕山Ｃ

【３期】稲荷山Ｃ１・Ｃ２、二子山Ａ１ａ・Ｃ、丸墓山Ａ２、天祥寺裏

【４期】二子山Ａ１ｂ・瓦塚Ａ１・Ａ３・Ｂ、奥の山Ａ、愛宕山Ａ１

【５期】稲荷山Ｄ１・Ｄ３、二子山Ａ１ａ、瓦塚Ａ２・Ａ４、愛宕山Ｂ、将軍山Ａ・Ｃ１・Ｃ２、鉄砲山Ａ

【６期】将軍山Ｂ・鉄砲山Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３

【７期】中の山

この編年に従えば、Ａ類（利根川右岸の未知の窯）、Ｂ類（生出塚窯）、Ｃ類・Ｄ類（和名窯か周辺の未知の窯）が、埼玉古墳群の各古墳にいずれも追加樹立されたことになる。だとすれば、各期における初出が古墳の造営時期となるので、若松の編年では稲荷山→二子山・愛宕山→丸墓山・天祥寺裏→瓦塚・奥の山→将軍山・鉄砲山→中の山の築造順序となり、およその編年が確立されたことになる。

さて、仮に埼玉古墳群における埴輪の生産体制が以上の通りであったとすれば、若松はかなり複雑な生産体制の様相を明解に読み解いていることになるだろうが、果たして正しい結論に到達しているのだろうか。大分類によって集団差を抽出する点はともかくとして、若松の方法論では時期差をどのようにして導き出しているかについて明確な説明がなされていない。そもそも若松が言う「型式差」とは、共通の特徴を有する埴輪群とその分類単位間の差異を示していると思われるが、その背後にある産地の違い・時間差・集団差・個人差などを重層的に分

析・峻別する作業がないままに、ある特徴は集団差、またある特徴は時間差に置き換えるという主観的な分類に基づく議論だと考える。それ故に、結論として示された「追加樹立編年案」も混乱に満ちたものとなっている。

若松は最後に、「埴輪は古墳築造の一環として、たった一度しか設置されていないと思いこんで埴輪研究に臨んでいる研究者は少なくないと聞く。（－中略－）追加樹立に注目すれば、より詳細な埴輪研究を展開することが可能となろう」と結ぶ。しかし、明確な基準がないままに、持論である「追加樹立説」（若松1982）に基づいて、一古墳出土埴輪の多様性を結果的には安易に「時間差」のみに集約させている点において、若松の議論はかなり危うい土台に立っている。

一方、近年の埴輪研究では、特に大型古墳において複数系統の埴輪が樹立されることは、むしろ一般的である点が認識されるようになり（中井2003、廣瀬2003・2006、古谷2003など）、その背後に埴輪生産の歴史性を読み解こうとする研究が進められている。さらに、集団差を示す系統識別を踏まえた上で、系統毎の変遷を追う作業（轟1973・犬木2005・城倉2009など）が行われている研究状況にあって、系統内分析の視点を欠く若松の分析手続きは甚だ不十分なものである。

以上、最新の研究状況を踏まえても、若松の「追加樹立先ありき」の編年論は、埴輪の編年研究自体の土台を曖昧なものにする危険があると考える。私は、埼玉古墳群に供給された生出塚窯産埴輪を刷毛目データベースの構築によって特定した上で、生出塚遺跡における窯の切り合い関係から編年を確立し、生出塚窯産埴輪に関して言えば追加樹立は存在していなかった事実を既に実証している（城倉2010a）。このような成果からすれば、今必要とされている分析は各古墳における分類成果を踏まえた上で、系統毎の変遷過程を追いかける作業である。若松が提示した「追加樹立を前提とする」編年論は、主観的な前提と誤った分析手順によって導き出されたもので、その分析方法・結論ともに根本的に間違っていると思う。もちろん、若松が長年行ってきた基礎作業は高く評価されるべきだと考えるし、基礎作業に基づいた結論を否定するのは本意ではない。しかし、若松が稲荷山古墳報告書の付図２として作成した「埴輪の複数回樹立を仮定した埼玉古墳群の円筒埴輪編年案」は、著しく客観性に欠けた混乱した編年案で、この編年が埼玉古墳群の埴輪編年として一般化するのは、今後の埼玉古墳群の編年研究において大きな障害となりかねないし、埼玉古墳群の歴史的位置付けを誤った方向に導く可能性もある。

では、若松の議論の問題点はどこにあるのか。それは、①系統分類における基準が曖昧な点、②各系統内における変遷過程を通時的に位置付ける視点と方法論が欠如している点、この２点に集約されると言ってよい。この問題点を克服し、若松の「追加樹立編年案」を完全に覆す必要がある。

1－3　岡本健一「系統分類」の重要性

一方、将軍山古墳出土埴輪の詳細な分類を踏まえて、埼玉古墳群の全体編年を論じた岡本健一の成果は明確な方法論と精度の高い分析が評価される（岡本1997）。岡本は、将軍山古墳出土の円筒埴輪を、形態・製作技術・胎土・色調からA～C類に分類し、各類を「明らかに別の工人集団によって作られたもの」とする。その成果を踏まえた上で、埼玉古墳群における全ての埴輪が、①赤系、②橙系、③黄白色系に分類できることを指摘し（明確な峻別が難しいものもあるとするが）、各系統の埴輪にみられる円筒埴輪の突帯扁平率を調べた。これによって、各系統の円筒埴輪の突帯が扁平化していく方向性を明らかにし、稲荷山・二子山・丸墓山→愛宕山・瓦塚・奥の山→鉄砲山・将軍山の編年案を提示した。

後述するように将軍山古墳における岡本の分類は精度が高く、刷毛目工具の同定や同工品の視点から見ても、かなり的を射た分析だと考える。さらに、将軍山古墳での岡本の分類基準は、そのまま埼玉古墳群の全古墳出土埴輪の分類に適用が可能である。岡本が指摘する黄白色・橙褐色・赤褐色の３分類は、私も生産集団の違いを反映するものと考えており、これらの分類を埼玉古墳群の全ての古墳に適用することで系統差を抽出できると考える。

さらに、系統差を抽出した上で、系統毎にその変遷過程を追う方法論も首肯できる。ただ、各系統の変遷過程を突帯の扁平率のみで導きだそうとした岡本の分析はやはり不十分である。円筒埴輪の形態的特徴や製作技法、あるいは形象埴輪も踏まえた上で、各系統の変遷過程を位置付ける必要がある。そして、その作業によって各古墳の各系統の埴輪がしっかりと縦軸でスムーズに繋がるのであれば、若松の主張する「追加樹立説」を覆すこともできよう。

結論を先に言えば、埼玉古墳群の埴輪は大きく３系統に分類でき、各系統の埴輪はスムーズな型式学的変遷を辿ることが分かっている。つまり、岡本の分析を踏襲し、各古墳の分類と古墳群全体を貫く分類を常にフィードバックしながら、その型式的特徴の変遷過程を位置付けることこそが、今やらなければならない作業だということがわかる。

2．分析視角

2－1　古墳内分析と古墳間分析

上述した研究史の整理で、問題点と課題が浮かび上がってきた。ここでは本稿の分析視角についてまとめる。

まず埼玉古墳群の各古墳には、複数生産地の製品が供給されているという事実が分析の出発点となる。これに関して言えば、埼玉古墳群出土埴輪のうち、生出塚窯産埴輪は全てその生産窯まで特定できているし（城倉2010a）、桜山窯周辺で生産された埴輪も部分的ながら特定している（城倉2010b）。つまり、物理的な証拠から複数生産地の製品が運ばれている事実が確認されているわけである。さらに、埼玉古墳群に埴輪を供給していたと考えられる生産遺跡－生出塚窯・和名窯・桜山窯・姥ヶ沢窯・権現坂窯の発掘成果により、生産地毎の埴輪の特徴が次

第に明らかになりつつある。それら生産地の成果を踏まえれば、埼玉古墳群の各古墳出土埴輪の分析で、生産地の違いを示す分類が可能である。

分析作業では、これら生産地の特徴把握を踏まえた上で、一古墳を単位として分類を行い、その分類単位間の型式的距離を測っていくことになる。実際にはその作業はそれほど困難なものではなく、円筒埴輪・形象埴輪ともに、形態・製作技術・胎土の相関から整合的な分類が可能であるし、その妥当性は生産遺跡との刷毛目の一致からも確認することができる。そして、各古墳の分類を踏まえた上で、古墳群全体を通時的に見れば、埼玉古墳群全体では、やはり岡本が指摘した大きく３系統が認識できる。本稿では、①黄白色系統、②橙褐色系統、③赤褐色系統と呼称する。このように、一古墳出土埴輪の分類（古墳内分析）と、古墳群全体を貫く分類（古墳間分析）をフィードバックすることで、生産集団の差異を把握することができ、各系統の展開過程を考究できる。

２－２　埼玉古墳群出土埴輪の大別と生産地の推定

では、埼玉古墳群に供給された各系統の生産地が問題となる。

まず、③の赤褐色系統については、そのほとんどが刷毛目の同定作業によって、生出塚窯産製品だと判明しており、その生産窯まで特定している。さらに、生出塚遺跡においては、八手状の窯が相互に切り合いを持つことから、窯の物理的前後関係によって埴輪の編年が確立している。すなわち、天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥の山→愛宕山→将軍山→鉄砲山に関しては、既に生産窯の物理的前後関係という動かない編年を組んでいる（城倉2010a）。また、生出塚遺跡の分析では、窯の切り合いで離れた類型が埼玉古墳群の一つの古墳で共伴することはないという事実を把握しており、埼玉古墳群に供給された生出塚窯産埴輪に関しては、追加樹立は全く行われていない点を確認している。このように、生出塚窯産埴輪はかなり様相が明らかになっているが、①②の系統との系譜関係と並行関係を明らかにしていく必要がある。

問題となるのは①黄白色系統、②橙褐色系統の生産地である。

まず、①黄白色系統について言及する。黄白色系統の円筒埴輪は、客体的なＢ種ヨコハケ・半円透孔・小穿孔・突帯板押圧技法・最上段が長い形態など特徴的な埴輪群で、埼玉古墳群以外の出土例も比較的多い。例えば、とやま古墳（塩野1967）、鎧塚古墳（寺社下1981）、新屋敷古墳群（高崎1992、田中1994、金子・大谷1996、昼間・大谷1998）、月輪古墳群（関口・市川2008）、屋田古墳群（横川1984）、下道添遺跡（渡辺1981・坂野1987）、古凍古墳群（横川1984）などいずれも５世紀末～６世紀初頭とされる古墳から出土している。共伴する形象埴輪も古手の様相を呈し、上毛野を含めた北関東地域の広い範囲で共通性の高い埴輪群である。特に、北武蔵地域の黄白色系統は、胎土の共通性が極めて高く、実際に古墳を超えて刷毛目が一致する例も確認できるので、かなり限定された場所で、特定の集団によって生産された可能性が高いと判断している。若松は稲荷山古墳出土埴輪の胎土分析で火山岩類が検出されたことか

ら、「群馬県域の火山地帯と連絡する利根川筋の沼沢地」に候補が求められるとし、利根川右岸の未知の窯を想定する（若松2007）が、いずれ生産地が発見される可能性も期待されるので、現状で結論を急ぐ必要はない。ここで重要なのは、この黄白色系統が5世紀末～6世紀初頭において、広く共通する特徴をもった埴輪群で、特に北武蔵においては生産地がある程度集約されていたという事実である。当然ながら、6世紀前半以降に展開する埴輪群の母体となる系統だったと推察され、その位置付けを考えていく必要がある。

最後に②橙褐色系統について言及する。橙褐色系統に関しては、赤褐色系統や黄白色系統に比べて、特徴が多様で偏差も大きく存在時間幅も長い。当然ながら複数の生産地の埴輪を含んでいることが予想されるが、それらを現状では明確に峻別することはできない。しかし、二子山古墳から出土した方形透孔の大型円筒埴輪（5-22-1）は、桜山埴輪窯で焼台として使用されていた埴輪（桜山9-1・9-6）に見られる桜山G類の刷毛目で調整され、比企地方の諏訪山7号周溝・毛塚32号墳埴輪棺（宮島2003・大谷2006）とも刷毛目が一致するなど桜山窯産、あるいはそれを遡る段階の製品である点が判明している。さらに、瓦塚古墳から出土した人物埴輪（調5-7-8・4-38-212）と動物埴輪（8-53-153）は、やはり桜山窯に至近の毛塚28号墳C類と刷毛目が合致するなど、桜山周辺産であることが分かっている。私が「プレ桜山」と呼称するこの埴輪群（城倉2010b）は、6世紀前半段階に下松5号墳（江原・長井2004）、岩鼻古墳群（宮島1989・江原1993）、新屋敷古墳群、月輪古墳群など比企・北埼玉を中心に分布し、波状ヘラ記号のある円筒・弓を貼りつけた板を持つ人物・扉表現のある家形埴輪など非常に共通性が高い一群である（城倉2008）。さらに、この「プレ桜山」は、6世紀後半における生出塚窯産埴輪の南への製品供給圏拡大の前に、東京湾まで伝播したことが分かっている。例えば、柊塚古墳（野沢1992・照林2001）、東宮下地内出土品（笹森1988）、亀塚古墳（狛江市史編纂委員会1985）、登山1号墳（今津1992・稲村1997）などが明らかに「プレ桜山」の影響を受けた埴輪を出土する古墳である。このように橙褐色系統の中でも、「プレ桜山・桜山」のように生産地がある程度絞り込めている埴輪群が存在する一方で、生産地が特定できない個体群も多い。この橙褐色系統をどのように位置付けるべきか。

私は比企・大里に分布する窯を分析する中で、この地域の窯は6世紀第2四半期以降においては、基本的に周辺の中小古墳へ埴輪を供給しながら、埼玉古墳群の首長墓の造営に際してのみ大型品を供給していた点を明らかにした（城倉2010b）。この成果から考えるのであれば、橙褐色系統の埴輪において生出塚窯産埴輪のような規則的な変遷を追えない点も十分に納得できる。「拠点生産地」として埼玉古墳群に大・中型品を供給し続けた生出塚窯（山崎1981・1987・1994・1999・2001・2002・2004・2005・2006）と、「衛星生産地」として比企・大里に点在しながら断続的に埼玉古墳群へ埴輪を供給した姥ヶ沢窯・権現塚窯（新井・森田1998）、桜山窯（横川1982）、和名窯（金井塚1983・弓2003）の製品の存在形態が異なっているのは至極当然である。逆に言うと、埼玉古墳群における橙褐色系統の存在形態自体が、比企・大里地

方の生産窯の歴史性を物語っているということもできる。おそらく黄白色系統の強い影響で成立した橙褐色系統の埴輪は、6世紀前半段階には「プレ桜山」を中心に盛行期を迎え、6世紀第2四半期以降は生出塚窯製品にその座を取って代わられる。その後は、基本的に地域密着型の生産を行っていた比企・大里地方の窯から断続的に埼玉古墳群へ大型品が供給されたというのが橙褐色系統の大枠だと推察される。このように、比企・大里地方の窯製品を橙褐色系統と認識するわけだが、橙褐色系統は①大型円筒の第1段が長い点、②胎土に砂粒が多い点など生出塚窯産埴輪とは明らかに異なる特徴を持っている。具体的な生産地の特定はできなくとも、現状では橙褐色系統を「比企・大里産」として一つのまとまりで認識し、その大枠での変遷を位置付けるとともに、今後、窯の調査の進展に合わせて生産地の特定を進めていくのが現実的だと思われる。

以上、埼玉古墳群の大別分類と生産地の関係を整理した。以下にまとめておく。

①黄白色系統－生産地は特定できないが5C末～6C初に集約された場所で生産された埴輪群。

②橙褐色系統－比企・大里の複数窯の生産品。6C前半の「プレ桜山」の展開が特徴。

③赤褐色系統－生出塚窯産埴輪。6C第2四半期以降、埼玉古墳群の主体を占める。

2－3　系統整理の重要性

以上のように埼玉古墳群出土埴輪を3大別する。その上で、各系統の変遷過程を位置付け、順調な型式変化が認められるかを確認する。注意すべきは、これら各系統の埴輪はそれぞれに系譜的派生関係を持ち、同時期に併存しながらも盛行時間幅が前後する事実である。大枠で言えば、①黄白色系統→②橙褐色系統→③赤褐色系統の順序で、それぞれが生産の最盛期を迎えるのだが、これら3系統の埴輪相互の関係を埴輪の形態・技術面を加味して全体の流れの中で位置付ける必要がある。この作業によって各系統のスムーズな展開過程を認識できるのであれば、当然ながら若松の「追加樹立説」は完全に否定できるはずである。

この系統整理の作業は、埼玉古墳群の首長を頂点とする地域社会の中で、各埴輪生産集団がどのように活動していたのかを明らかにする作業に他ならない。現在の埴輪研究では、系統把握に基づく特定系統の展開を追う作業が主体であるが（犬木2005など）、そこからさらに一歩踏み込んで一つの地域社会を単位とした系統間の複雑な展開過程を考究すべきである。その作業によって、地域社会の文脈の中で埴輪生産の歴史性を追求する必要がある（城倉2009）。

2－4　本稿の分析手順

最後に実際の分析手順をまとめておく。まず、埼玉古墳群の各古墳を単位として集団差を示すと考えられる分類を行う。円筒埴輪・形象埴輪の形態・技術・胎土の相関によって群別を確立する。なお、刷毛目が共通する類型に関しては、現在までの生産遺跡の分析で、限られた工人によって限られた期間に製作された点が既に判明しているので（城倉2010a・2010b）、「刷

表７　埼玉古墳群出土埴輪の分析表①

【稲荷山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
1集71-3	IN2	Hue10YR8/3	黄白	中型円筒	A
1集60-1	IN5	Hue10YR8/2	黄白	大型円筒	A
1集71-4	IN5	Hue10YR8/3	黄白	朝顔	A
新49-31	IN5'	Hue7.5YR5/4	橙	大型円筒	A
新50-33	IN5	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A
新50-35	IN5	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A
新66-106	IN5	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片	A
新66-110	IN5'	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片	A
新66-111	IN5	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片	A
新67-115	IN5'	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片	A
新54-53	IN6	Hue10YR8/2	白	大型円筒	A
新54-54	IN7	Hue7.5YR8/4	黄白	大型円筒	A
新53-51	IN10	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片	A
1集34左下	IN11	Hue10YR8/1	黄白	円筒破片(Bヨコ)	A
1集60-2	IN11	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A
1集60-6	IN11	Hue10YR8/3	黄白	朝顔	A
1集61-2	IN11	Hue10YR8/4	黄橙	大型円筒	A
1集73-1	IN11	Hue10YR8/1	黄白	円筒破片(Bヨコ)	A
1集73-3	IN11	Hue10YR8/2	黄白	円筒破片(Bヨコ)	A
新45-1	IN11'	Hue10YR8/2	黄白	大型円筒	A
新71-153	IN11	Hue10YR8/3	黄白	円筒破片(Bヨコ)	A
1集71-1	IN16	Hue10YR8/4	黄白	中型円筒	A
調研報17-8-61	IN21	Hue10YR8/4	黄白	人物	A
調研報17-8-62	IN21	Hue10YR8/4	黄白	人物	A
1集53-3	—	Hue10YR8/4	黄白	人物	A
1集53-5	—	Hue10YR8/2	黄白	人物	A
1集54-1	—	Hue10YR8/2	黄白	人物	A
1集54-2	—	Hue10YR8/2	黄白	人物	A
1集54-4	—	Hue10YR8/4	黄白	人物	A
1集56-2	—	Hue10YR8/3	黄白	人物破片	A
1集58-2	—	Hue10YR8/3	黄白	盾	A
1集59-4	—	Hue10YR8/3	黄白	形象破片	A
1集59-9	—	Hue10YR8/3	黄白	形象破片	A
1集60-3	—	Hue7.5YR8/6	黄白	中型円筒	A
1集60-8	—	Hue7.5YR8/6	橙	大型円筒	A
1集61-1	—	Hue2.5YR6/1	灰	大型円筒	A
1集71-2	—	Hue10YR8/2	黄白	中型円筒	A
1集71-5	—	Hue7.5YR8/6	黄白	大型円筒	A
新46-11	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A
新47-14	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A
新49-30	—	Hue10YR8/3	黄白	中型円筒	A
新50-36	—	Hue10YR8/2	黄白	中型円筒	A
新50-37	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A
新52-39	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A
新52-40	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A
新52-41	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A
新53-47	—	Hue10YR8/3	黄白	中型円筒	A
新53-48	—	Hue10YR8/3	黄白	大型円筒	A
新53-50	—	Hue10YR8/2	黄白	大型円筒	A
新76-1	—	Hue10YR8/2	黄白	人物	A
調研報5-1	—	Hue10YR8/2	黄白	朝顔	A
調研報17-8-63	—	Hue10YR8/4	黄白	人物	A
新49-29	IN1'	Hue5YR7/8	橙	大型円筒	B1
1集60-4	IN3	Hue5YR6/6	橙	朝顔	B1
新45-5	IN3?	Hue7.5YR7/6	明茶	中型円筒	B2
新45-7	IN3?	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B1
新46-12	IN3	Hue5YR7/6	橙	大型円筒	B1
新47-15	IN3	Hue5YR7/6	橙	中型円筒	B1
新66-14	IN3	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B1
新63-80	IN3?	Hue5YR7/6	橙	朝顔	B1
1集52-2	IN4	Hue5YR6/8	明橙	盾持人	B1
新46-13	IN9	Hue5YR7/4	橙	大型円筒	B1
新47-16	IN9	Hue5YR7/4	橙	大型円筒	B1
新48-21	IN9	Hue5YR7/8	橙	中型円筒	B1
新52-42	IN13	Hue7.5YR8/6	明橙	大型円筒	B3
新46-9	IN14	Hue5YR6/6	橙	大型円筒	B1
新51-38	IN14	Hue5YR6/8	橙	朝顔	B
新47-18	IN17	Hue5YR6/8	橙	大型円筒	B1
新48-22	IN17	Hue5YR6/8	橙	中型円筒	B1
新48-23	IN17	Hue5YR6/8	橙	大型円筒	B1
1集52-1	—	Hue5YR6/8	橙	人物	B
1集52-3	—	Hue5YR6/8	橙	人物	B
1集53-1	—	Hue5YR6/8	橙	人物	B
1集53-2	—	Hue2.5YR6/4	橙	人物	B
1集55-2	—	Hue2.5YR6/6	橙	馬破片	B
1集55-3	—	Hue2.5YR6/6	橙	馬破片	B
1集56-1	—	Hue2.5YR6/8	橙	人物破片	B
1集58-1	—	Hue5YR6/6	橙	盾	B
1集60-5	—	Hue2.5YR6/6	橙	朝顔	B
1集66-5	—	Hue2.5YR6/6	橙	雷電山復古型	B
1集66-6	—	Hue2.5YR6/6	橙	雷電山復古型	B
新45-2	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	B2
新45-3	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B2
新45-4	—	Hue5YR7/6	橙	大型円筒	B1
新45-6	—	Hue7.5YR7/3	橙	大型円筒	B1
新46-8	—	Hue10YR8/3	黄橙	中型円筒	B2
新46-10	—	Hue5YR7/6	橙	中型円筒	B1
新47-17	—	Hue5YR6/8	橙	大型円筒	B1
新47-19	—	Hue2.5YR5/8	橙	大型円筒	B1
新48-20	—	Hue5YR6/8	橙	大型円筒	B1
新48-24	—	Hue5YR6/8	橙	中型円筒	B1
新48-25	—	Hue5YR6/6	橙	朝顔	B1
新48-26	—	Hue2.5YR6/8	橙	朝顔	B1
新50-34	—	Hue5YR6/6	橙	朝顔	B1
新52-43	—	Hue2.5YR6/8	橙	大型円筒	B1
新52-44	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B1
新53-46	—	Hue5YR5/8	赤	朝顔	B1
新53-49	—	Hue5YR6/6	橙	朝顔	B1
新53-52	—	Hue5YR6/6	橙	朝顔	B1
新69-131	—	Hue7.5YR8/6	明橙	円筒破片	B1
新78-23	—	Hue5YR7/6	橙	馬破片	B
新78-27	—	Hue5YR7/6	橙	馬破片	B
調研報16-9-30	—	Hue2.5YR8/3	明茶	家破片	B
調研報16-9-31	—	Hue2.5YR8/3	明茶	家破片	B
調研報18-4-129	—	Hue2.5YR8/3	明茶	家破片	B
調研報18-5-139	—	Hue5YR6/6	橙	家破片	B
調研報18-5-140	—	Hue2.5YR8/3	明茶	家破片	B
調研報18-6-142	—	Hue2.5YR8/3	明茶	家破片	B
調研報18-10-187	—	Hue10YR8/3	明茶	鳥	B
調研報19-1・2	—	Hue5YR6/8	橙	家	B1
調研報19-3-5	—	Hue5YR6/6	橙	家	B1
1集61-3	IN1	Hue2.5YR6/8	赤	大型円筒	C
1集61-4	IN1	Hue2.5YR6/8	赤	大型円筒	C
1集61-5	IN1'	Hue2.5YR6/8	赤	大型円筒	C
1集61-6	IN1'	Hue2.5YR5/8	赤	大型円筒	C
1集62-1	IN1'	Hue2.5YR6/8	赤	大型円筒	C
1集62-4	IN1'	Hue2.5YR6/8	赤	大型円筒	C
1集62-5	IN1	Hue2.5YR5/8	明橙	大型円筒	C
1集62-6	IN1	Hue2.5YR6/8	赤	大型円筒	C
1集62-7	IN1'	Hue2.5YR5/8	赤	大型円筒	C
新49-27	IN1	Hue2.5YR5/8	赤	大型円筒	C
新49-32	IN1	Hue2.5YR5/6	赤	大型円筒	C
調研報16-6-13	IN1	Hue2.5YR5/8	赤	家破片	C
調研報16-9-28	IN1'	Hue2.5YR5/8	赤	家破片	C
1集62-2	IN15	Hue7.5YR8/6	橙	大型円筒	C
1集64-3	IN15	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
1集62-3	IN19	Hue2.5YR6/8	赤	大型円筒	C
1集76-17	IN20	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
1集54-3	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	C
1集54-5	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	C
1集58-3	—	Hue2.5YR5/8	赤	琴	C
1集58-6	—	Hue2.5YR5/8	赤	動物	C
1集58-7	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬破片	C
1集59-3	—	Hue2.5YR5/8	赤	形象破片	C
1集59-11	—	Hue2.5YR5/8	赤	形象破片	C

表７　埼玉古墳群出土埴輪の分析表②

1集60-7	—	Hue2.5YR6/8	橙	大型円筒	C
1集71-6	—	Hue2.5YR6/8	橙	中型円筒	C
新49-28	—	Hue2.5YR6/8	橙	大型円筒	C
新52-45	—	Hue2.5YR5/8	赤	大型円筒	C
調研報17-9-76	—	Hue2.5YR6/8	橙	人物	C?
調研報18-15-213	—	Hue2.5YR5/8	赤	動物	C

【丸墓山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
6集15-20	—	Hue10YR8/2	黄白	円筒破片	A
6集15-28	—	Hue10YR8/2	黄白	円筒破片	A
6集15-29	—	Hue10YR8/2	黄白	形象破片	A
6集15-34	—	Hue10YR8/2	黄白	家	A
6集16-12	MH2	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
6集18-33	MH2	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
6集19-50	MH2	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
6集17-10	MH3	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
6集18-34	MH7	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
6集15-30	—	Hue5YR7/8	橙	人物	B
6集16-1	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
6集16-11	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
6集17-13	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
6集20-64	—	Hue5YR7/8	橙	朝顔	B
6集20-65	—	Hue5YR7/8	橙	朝顔	B
6集20-66	—	Hue5YR6/8	橙	朝顔	B
6集17-25	MH1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
6集20-62	MH1	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C2
6集21-75	MH4	Hue2.5YR5/8	赤	形象破片	C
6集19-55	MH5	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
6集20-74	MH5	Hue2.5YR5/8	赤	雷電山復古型	C
6集22-10	MH5	Hue2.5YR5/8	赤	雷電山復古型	C
6集22-4	MH6	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
6集22-3	MH8	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C2
6集16-2	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C2
6集16-4	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C2
6集17-14	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
6集17-15	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C2
6集17-16	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
6集17-24	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
6集17-26	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
6集17-27	—	Hue2.5YR5/8	赤	形象器台	C
6集17-28	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
6集18-41	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
6集20-73	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
6集21-93	—	Hue2.5YR5/8	赤	形象破片	C
6集22-7	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
6集22-9	—	Hue2.5YR5/8	赤	雷電山復古型	C
6集22-10	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C2
6集22-11	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C2
6集22-12	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	C2

【天祥寺裏古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
31集5-7	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集7-20	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集8-24	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集9-27	TS1'(生出塚W4')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集9-28	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集10-32	TS1'(生出塚W4')	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	A
31集13-59	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	人物	A
31集17-78	TS1'(生出塚W4')	Hue2.5YR5/8	赤	馬破片	A
31集18-92	TS1(生出塚W4)	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A
31集4-1	TS2'(生出塚W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集4-2	TS2/TS2'(生出塚W1/W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集4-3	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集5-4	TS2'(生出塚W1')	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	A
31集5-5	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集5-6	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	A
31集5-8	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集5-9	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	A
31集6-11	TS2'(生出塚W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集6-12	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集7-16	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集7-17	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集7-22	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集8-23	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集9-29	TS2/TS2'(生出塚W1/W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集9-30	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集13-58	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	人物	A
31集14-60	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	盾持人	A
31集14-61	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	盾持人	A
31集16-73	TS2'(生出塚W1')	Hue2.5YR5/8	赤	鳥	A
31集17-81	TS2(生出塚W1)	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A
31集18-82	TS2'(生出塚W1')	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A
31集18-93	TS2/TS2'(生出塚W1/W1')	Hue2.5YR5/8	赤	形象器台	A
31集伝1	TS2'(生出塚W1')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	A
31集17-74	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A
31集17-77	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬破片	A
31集馬鈴一括	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	A
31集10-31	TS5	Hue5YR7/6	橙	円筒破片	B
31集15-67	TS3	Hue5YR8/4	明茶	盾(群馬系)	C
31集15-68	TS4	Hue5YR8/4	明茶	帽子(群馬系)	C

【二子山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
5集23-3	—	Hue10YR8/3	黄白	円筒(5条)	A
5集30-64	—	Hue10YR7/3	黄白	円筒破片	A
5集45-259	—	Hue10YR8/3	黄白	鳥	A
5集23-2	FT2	Hue5YR7/8	橙	円筒(5条)	B
5集22-1	FT4(桜山G)	Hue5YR6/6	橙	円筒(5条)	B
5集29-61	FT6	Hue7.5YR7/6	橙	円筒破片	B
5集27-27	FT9	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
5集26-25	FT12	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	B
5集26-18	—	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	B
5集26-19	—	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	B
5集30-67	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
5集33-92	—	Hue2.5YR6/8	橙	人物	B?
5集26-22	FT1(生出塚DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集46-284	FT1(生出塚DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集46-294	FT1(生出塚DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
8集18-100	FT1(生出塚DE8)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(5条)	C
5集24-4	FT3	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(5条)	C
5集43-231	FT5	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集37-146	FT7	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集26-23	FT8'(生出塚M6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集27-30	FT8(生出塚M6)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集31-79	FT8'(生出塚M6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集32-86	FT8'(生出塚M6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集36-139	FT8(生出塚M6)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(5条)	C
5集36-145	FT8(生出塚M6)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集30-66	FT10	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集26-20	FT11	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集26-21	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集26-24	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集26-26	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集26-31	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集30-68	—	Hue2.5YR5/8	赤	朝顔	C
5集31-80	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集31-81	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集32-83	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集32-87	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
5集33-89	—	Hue2.5YR4/8	赤	盾破片	C
5集33-99	—	Hue2.5YR4/8	赤	人物破片	C

【瓦塚古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
調研報5-6-7	KZ5	Hue7.5YR8/4	黄白	人物	A
調研報6-2-3	KZ5	Hue7.5YR8/4	明橙	人物	A

表7　埼玉古墳群出土埴輪の分析表③

8集41-30	KZ9	Hue5YR6/6	明橙	円筒(4条)	A
4集39-213	KZ11	Hue7.5YR8/4	黄白	人物	A
8集54-154	KZ11	Hue7.5YR8/3	黄白	鳥	A
4集19-83	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4集19-84	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4集19-85	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4集20-86	KZ20	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4集13-6	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4集13-10	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4集20-87	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
4集22-97	—	Hue7.5YR8/3	黄白	円筒破片	A
8集50-119	—	Hue7.5YR8/4	黄白	円筒(4条)	A
8集50-123	—	Hue7.5YR8/4	黄白	馬	A
8集51-126	—	Hue7.5YR8/4	黄白	馬	A
8集51-149	—	Hue7.5YR7/4	橙	人物	A?
調研報5-3-1	—	Hue10YR8/3	黄白	大刀	A
調研報5-4-2	—	Hue7.5YR7/3	黄白	人物	A
調研報5-5-5	—	Hue7.5YR8/4	明茶	人物	A
4集38-212	KZ3(毛塚28号C)	Hue5YR6/4	橙	人物	B
8集53-153	KZ3(毛塚28号C)	Hue5YR6/6	橙	猪	B
調研報5-7-8	KZ3(毛塚28号C)	Hue5YR6/4	橙	盾持人	B
4集21-90	KZ4	Hue2.5YR6/4	橙	円筒破片	B
4集21-95	KZ4	Hue2.5YR6/4	橙	円筒破片	B
4集23-116	KZ4'	Hue5YR6/6	橙	朝顔	B
4集37-211	KZ4	Hue5YR6/6	橙	人物	B
7集21-7	KZ4'	Hue2.5YR6/6	橙	円筒破片	B
7集22-17	KZ4'	Hue7.5YR7/4	明茶	円筒破片	B
8集52-152	KZ7	Hue5YR6/6	橙	鳥	B
4集23-115	KZ8	Hue2.5YR6/6	赤	朝顔	B
8集39-21	KZ8	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	B
8集37-1	KZ10	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B
7集35-169	KZ12	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	B
4集23-113	KZ13	Hue2.5YR6/8	橙	大型円筒	B
8集55-165	KZ17	Hue5YR7/6	橙	円筒破片	B
4集12-4	—	Hue2.5YR6/8	橙	円筒破片	B
4集12-5	—	Hue5YR7/6	明茶	円筒破片	B
4集39-216	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	B
7集35-168	—	Hue5YR7/6	橙	円筒(4条)	B
8集40-24	—	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	B
8集50-117	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
8集50-118	—	Hue5YR6/8	橙	円筒破片	B
8集50-121	—	Hue5YR7/6	橙	円筒(4条)	B
調研報6-1-1	—	Hue5YR7/6	橙	家	B
4集33-189	KZ1'(生出塚DE8')	Hue2.5YR5/6	赤	家	C
4集34-190	KZ1'(生出塚DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	盾	C
4集35-191	KZ1'(生出塚DE8')	Hue2.5YR5/6	赤	盾	C
4集36-208	KZ1'(生出塚DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	馬	C
8集41-31	KZ1(生出塚DE8)	Hue2.5YR4/8	赤	円筒(4条)	C
8集55-161	KZ1(生出塚DE8)	Hue2.5YR4/8	赤	円筒破片	C
4集23-114	KZ2'	Hue2.5YR5/8	赤	大型円筒	C
4集32-188	KZ2	Hue2.5YR5/6	赤	家	C
8集55-160	KZ6	Hue5YR6/8	赤	人物	C
8集40-28	KZ10'	Hue7.5YR8/4	明茶	朝顔	C
8集37-4	KZ14	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
8集40-26	KZ15	Hue10YR8/3	明茶	円筒破片	C
8集39-23	KZ16	Hue2.5YR5/8	赤	朝顔	C
4集20-89	KZ18	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
4集20-88	KZ19	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	C
4集35-192	—	Hue2.5YR5/8	赤	盾	C
8集51-150	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	C
調研報5-4-3	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	C
調研報5-5-4	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	C

【奥の山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
7集11-61	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A
7集11-69	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A
7集11-71	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A
7集11-74	OY7	Hue2.5YR7/8	橙	円筒破片	A
7集12-1	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集12-2	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集12-3	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集12-4	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集12-5	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集12-6	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集12-7	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集12-10	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集12-11	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集12-13	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集12-14	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集12-15	—	Hue2.5YR6/6	橙	人物破片	A
7集14-47	—	Hue5YR6/6	橙	家破片	A
7集14-48	—	Hue5YR6/6	橙	家破片	A
7集7-5	OY1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	B
7集7-2	OY2(生出塚DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	B
7集8-3	OY2 (生出塚DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7集10-43	OY2 (生出塚DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7集10-48	OY2 (生出塚DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7集7-1	OY3	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	B
7集8-16	OY4 (生出塚DE19)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7集8-18	OY4 (生出塚DE19)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7集8-23	OY4 (生出塚DE19)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7集8-15	OY5 (生出塚DE12)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7集8-19	OY5 (生出塚DE12)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7集8-7	OY6' (生出塚DE6')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
7集7-3	—	Hue2.5YR6/8	赤	円筒(4条)	B
7集7-4	—	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	B
7集12-9	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B
7集12-12	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B
7集12-16	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B
7集12-17	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物破片	B
7集14-41	—	Hue2.5YR5/8	赤	鞍破片	B
7集14-42	—	Hue2.5YR5/8	赤	形象破片	B
7集14-43	—	Hue2.5YR5/8	赤	形象破片	B
7集14-46	—	Hue2.5YR5/8	赤	家破片	B
7集14-49	—	Hue2.5YR5/8	赤	家破片	B

【愛宕山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
3集24-89	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(3条)	A
3集25-90	AT1	Hue5YR6/6	橙	円筒(3条)	A
3集24-91	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
3集25-92	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
3集26-94	AT1	Hue5YR7/8	橙	円筒破片	A
3集27-113	AT1	Hue5YR7/2	灰	円筒破片	A
3集27-114	AT1	Hue2.5YR6/8	赤	円筒破片	A
3集29-128	AT1	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
31集9-3	AT1	Hue10YR7/3	明茶・灰	円筒(3条)	A
31集9-4	AT1	Hue10YR7/3	明茶・灰	円筒(3条)	A
31集10-5	AT1	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A
31集14-34	AT1	Hue2.5YR6/4	橙	人物	A
31集16-66	AT1	Hue2.5YR6/8	橙	人物	A
3集16-13	AT5	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(3条)	A
3集25-93	AT5'	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	A
31集10-6	AT5	Hue7.5YR8/3	明茶	円筒(3条)	A
31集10-7	AT5	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A
31集11-10	AT5	Hue10YR7/3	明茶・灰	円筒破片	A
31集14-33	AT5	Hue2.5YR6/4	橙	人物	A
3集15-11	AT6	Hue5YR5/8	橙	円筒(3条)	A
3集17-14	AT7	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3条)	A
31集11-8	AT7	Hue10YR6/3	こげ茶	円筒(3条)	A
31集16-65	AT7'	Hue2.5YR6/8	橙	人物	A
3集16-12	AT8	Hue5YR6/1	灰	円筒(3条)	A
3集20-45	—	Hue5YR7/2	灰	円筒破片	A
3集33-188	—	Hue2.5YR6/8	橙	大刀	A
3集33-190	—	Hue2.5YR6/8	橙	蓋	A
3集33-191	—	Hue2.5YR6/8	橙	蓋	A
3集11-2	AT2 (生出塚DE9)	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3条)	B

表７　埼玉古墳群出土埴輪の分析表④

3集12-3	AT2（生出塚DE9）	Hue7.5YR8/6	明茶	円筒(3条)	B
3集13-5	AT2（生出塚DE9）	Hue10YR8/2	明茶	円筒(3条)	B
3集13-6	AT2（生出塚DE9）	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3条)	B
3集20-46	AT2（生出塚DE9）	Hue5YR5/6	赤	円筒破片	B
3集23-77	AT2（生出塚DE9）	Hue5YR7/4	橙・灰	円筒破片	B
3集23-78	AT2（生出塚DE9）	Hue5YR7/4	橙・灰	円筒破片	B
3集23-83	AT2（生出塚DE9）	Hue5YR7/4	橙・灰	円筒破片	B
3集29-132	AT2（生出塚DE9）	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
3集14-7	AT3'	Hue10YR8/3	明茶	円筒(3条)	B
3集15-9	AT3	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3条)	B
3集15-10	AT3	Hue10YR8/4	明茶	円筒(3条)	B
3集17-16	AT3'	Hue7.5YR7/4	明茶	円筒破片	B
3集20-47	AT3'	Hue5YR7/2	灰	円筒破片	B
3集22-76	AT3'	Hue2.5YR6/1	灰	円筒破片	B
3集23-85	AT3'	Hue7.5YR7/4	明茶・灰	円筒破片	B
3集23-86	AT3	Hue7.5YR7/4	明茶・灰	円筒破片	B
3集23-88	AT3	Hue7.5YR7/4	明茶・灰	円筒破片	B
31集9-2	AT3'	Hue7.5YR8/4	明茶	円筒(3条)	B
31集12-13	AT3'	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
3集11-1	AT4	Hue10YR6/1	灰	円筒(3条)	B
3集12-4	AT4	Hue10YR6/1	灰	円筒(3条)	B
3集14-8	AT4	Hue5YR7/6	橙	円筒(3条)	B
3集29-127	AT4	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B
3集29-129	AT4	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B
31集12-16	AT4	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	B
3集19-24	—	Hue5YR6/6	橙	円筒破片	B?
3集33-187	—	Hue10YR5/8	赤	大刀	B
3集33-189	—	Hue2.5YR5/8	赤	大刀	B
31集15-64	—	Hue2.5YR5/8	赤	人物	B
31集16-71	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	B
31集16-75	—	Hue2.5YR5/8	赤	馬	B

【将軍山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
確認9-r1	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3条)	A
確認9-r2	SG5	Hue10YR5/8	赤	円筒(3条)	A
確認11-r1	SG5	Hue5YR6/6	橙	円筒(3条)	A
確認11-r2	SG5	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(3条)	A
確認11-r5	SG5	Hue10YR8/3	明茶	円筒(3条)	A
確認11-r7	SG5'	Hue5YR7/8	橙	円筒(3条)	A
確認34-14	SG5	Hue5YR7/8	橙	円筒(3条)	A
確認34-15	SG5'	Hue5YR7/8	橙	円筒(3条)	A
確認35-16	SG5	Hue2.5YR7/6	橙	円筒(3条)	A
確認35-17	SG5'	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A
確認35-18	SG5'	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A
確認35-19	SG5	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A
確認36-22	SG5'	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(3条)	A
確認36-23	SG5'	Hue5YR7/8	橙	円筒(3条)	A
確認36-24	SG5	Hue2.5YR4/8	赤	円筒(3条)	A
確認37-25	SG5'	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3条)	A
確認37-26	SG5/SG5'	Hue5YR6/8	橙	円筒(3条)	A
確認37-27	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3条)	A
確認37-28	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	円筒(3条)	A
確認41-42	SG5	Hue2.5YR7/6	橙	朝顔	A
確認41-43	SG5	Hue5YR6/8	橙	朝顔	A
確認41-45	SG5	Hue2.5YR5/8	橙	朝顔	A
確認38-31	SG6	Hue2.5YR6/8	橙	円筒(4条)	A
確認41-41	—	Hue10YR8/3	明茶	朝顔	A
確認42・43-1	SG1	Hue5YR7/6	橙	靫	B
確認39-36	SG2	Hue5YR5/6	橙	円筒(4条)	B
確認44-11	SG2	Hue2.5YR6/6	橙	靫	B
確認45-31	SG2	Hue5YR6/6	橙	盾持人	B
確認39-33	SG7	Hue7.5YR8/6	明茶	円筒(4条)	B
確認39-34	SG7?	Hue5YR6/8	橙	円筒(4条)	B
確認39-35	SG7	Hue10YR8/4	明茶	円筒(4条)	B
確認40-37	SG7'	Hue5YR6/8	橙	円筒(4条)	B
確認44-10	SG9	Hue5YR7/6	橙	靫	B
確認38-32	SG10	Hue7.5YR8/4	明茶	円筒(4条)	B
確認38-30	—	Hue5YR7/8	橙	円筒(4条)	B
確認40-38	ナデ	Hue5YR7/6	明橙	円筒(4条)	B
確認38-39	ナデ	Hue5YR8/4	明茶	円筒(4条)	B
確認40-40	ナデ	Hue5YR7/6	橙	円筒(4条)	B
確認32-1	SG3(生出塚DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C
確認32-2	SG3(生出塚DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C
確認32-3	SG3(生出塚DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C
確認33-5	SG3(生出塚DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C
確認33-6	SG3(生出塚DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C
確認33-7	SG3(生出塚DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C
確認33-8	SG3(生出塚DE9)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C
確認35-20	SG3(生出塚DE9)	Hue5YR6/8	橙	円筒(4条)	C
確認33-9	SG4(生出塚DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C
確認33-10	SG4(生出塚DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C
確認33-11	SG4(生出塚DE27)	Hue2.5YR6/8	赤	円筒(4条)	C
確認34-12	SG4(生出塚DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C
確認34-13	SG4(生出塚DE27)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒(4条)	C

【鉄砲山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
2集13-50	TP1(生出塚DE16)	Hue7.5YR7/6	明茶	円筒破片	A
2集16-1	TP1(生出塚DE16)	Hue10YR6/1	灰	大型円筒	A
2集10-1	TP2	Hue2.5YR6/8	橙	大型円筒	A
2集11-17	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集11-19	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集12-24	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集12-36	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集13-53	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集14-68	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	大型円筒	A
2集14-70	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集14-75	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集15-77	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集15-81	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集19-71	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集19-73	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集20-103	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集20-109	TP3(生出塚DE5)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集11-21	TP4'(生出塚DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集15-79	TP4'(生出塚DE8')	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集12-28	TP5(生出塚DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集15-86	TP5(生出塚DE31)	Hue7.5YR7/6	明茶	円筒破片	A
2集19-58	TP5(生出塚DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集19-61	TP5(生出塚DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集21-113	TP5(生出塚DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集21-117	TP5(生出塚DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集22-127	TP5(生出塚DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集22-134	TP5(生出塚DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集22-135	TP5(生出塚DE31)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集12-25	TP6(生出塚DE13)	Hue2.5YR5/8	赤	円筒破片	A
2集22-125	TP7(生出塚DE44)	Hue7.5YR7/2	灰	円筒破片	A

【中の山古墳】

個体番号	刷毛目	土色帖	色調	器種・条数	群別
7集52-9	NK1/NK1'(末野A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7集53-10	NK1/NK1'(末野A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7集53-11	NK1/NK1'(末野A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7集54-12	NK1/NK1'(末野A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7集54-13	NK1/NK1'(末野A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7集55-14	NK1/NK1'(末野A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7集55-15	NK1/NK1'(末野A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7集56-16	NK1/NK1'(末野A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7集58-40	NK1/NK1'(末野A/A')	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7集51-3	—	Hue10BG5/1	青灰	須恵質埴輪壺	A
7集59-43	—	Hue10YR6/6	明黄	須恵質埴輪壺	B
7集59-44	—	Hue10YR6/6	明黄	須恵質埴輪壺	B
7集60-46	—	Hue10YR6/6	明黄	須恵質埴輪壺	B
7集60-47	—	Hue2.5YR7/2	明赤灰	須恵質埴輪壺	B
7集60-48	—	Hue2.5YR6/4	橙	須恵質埴輪壺	B
7集61-56	NK2	Hue5B3/1	暗青灰	須恵質埴輪壺	C

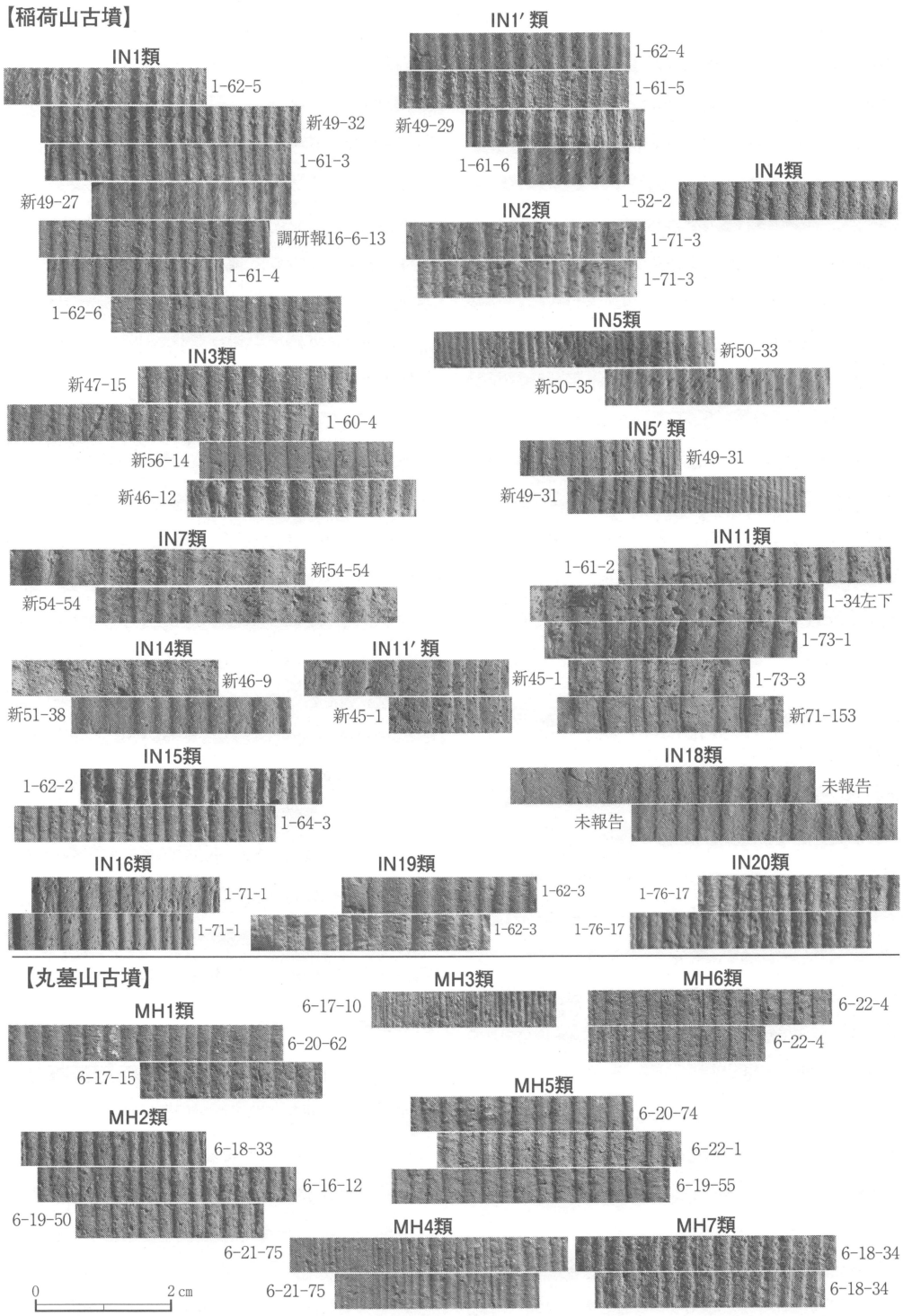


図27　埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース①

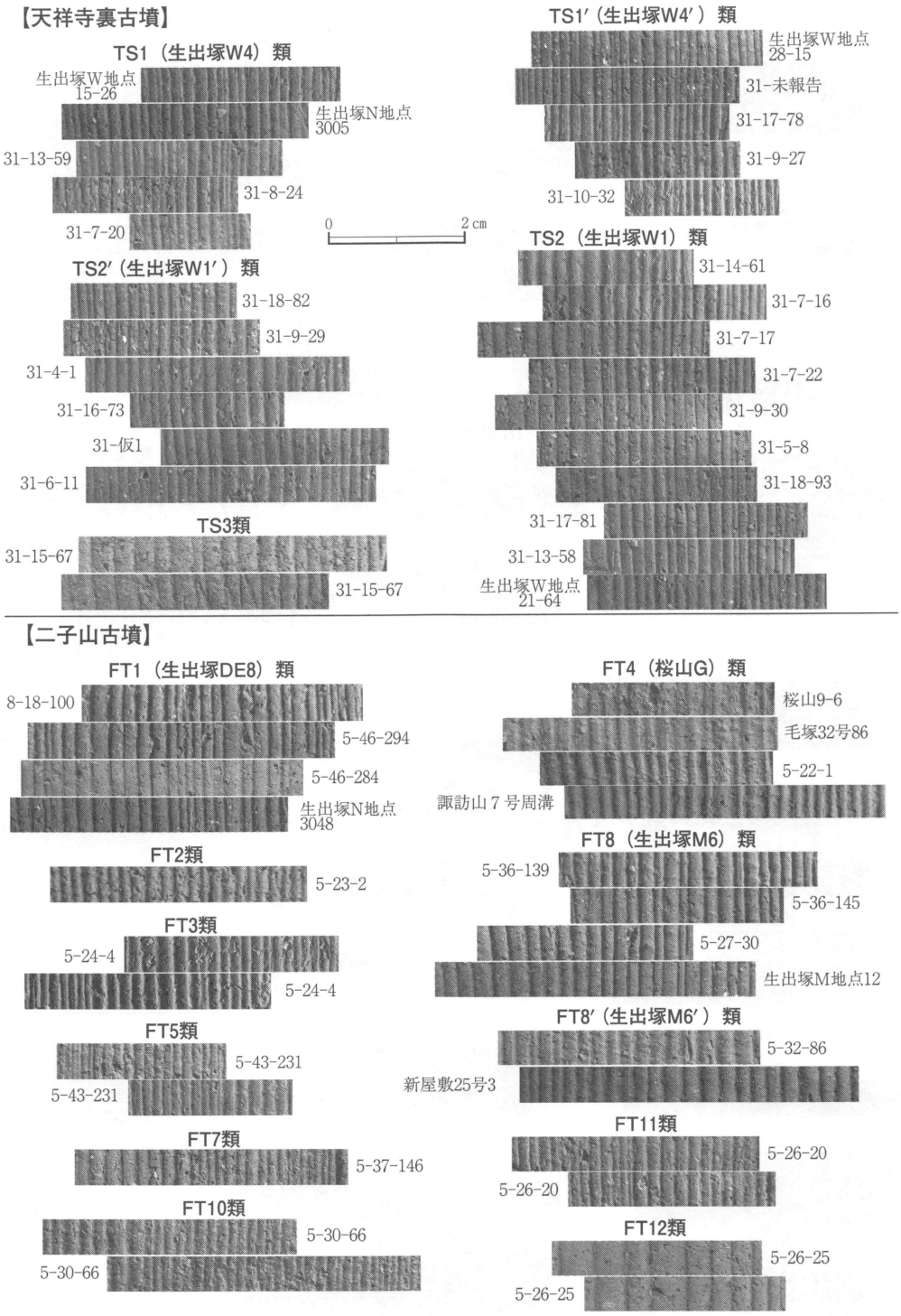


図27　埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース②

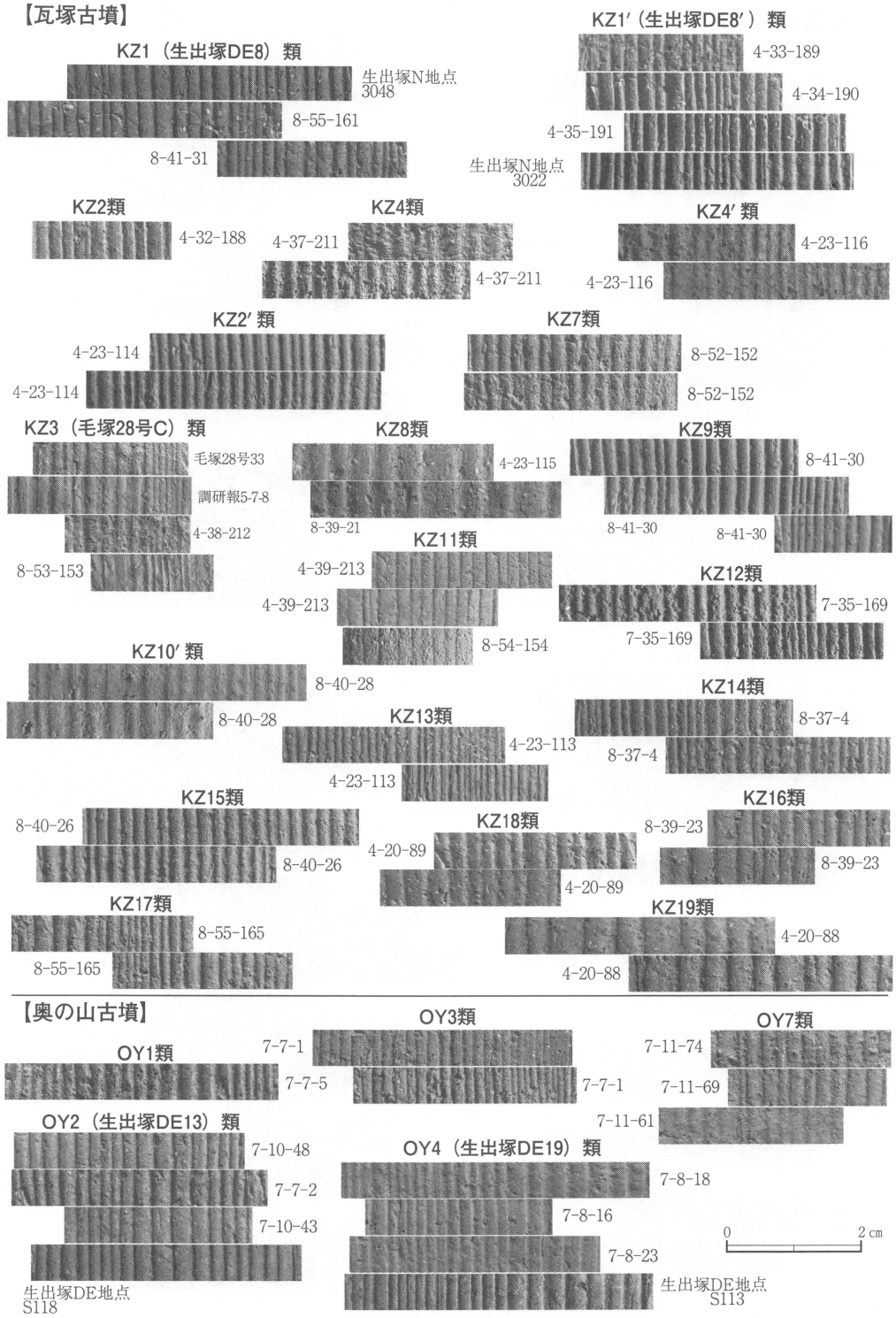


図27　埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース③

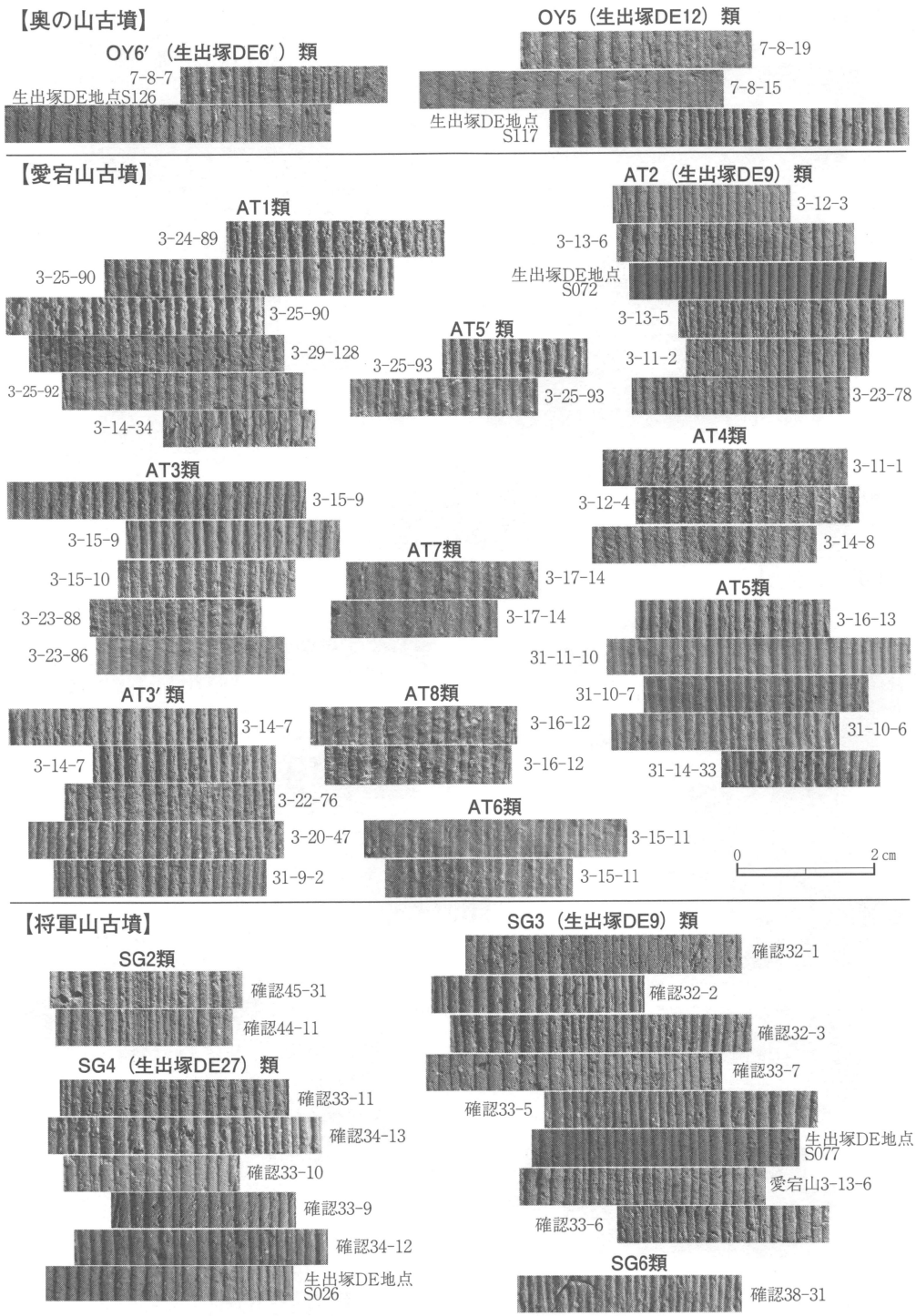


図27　埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース④

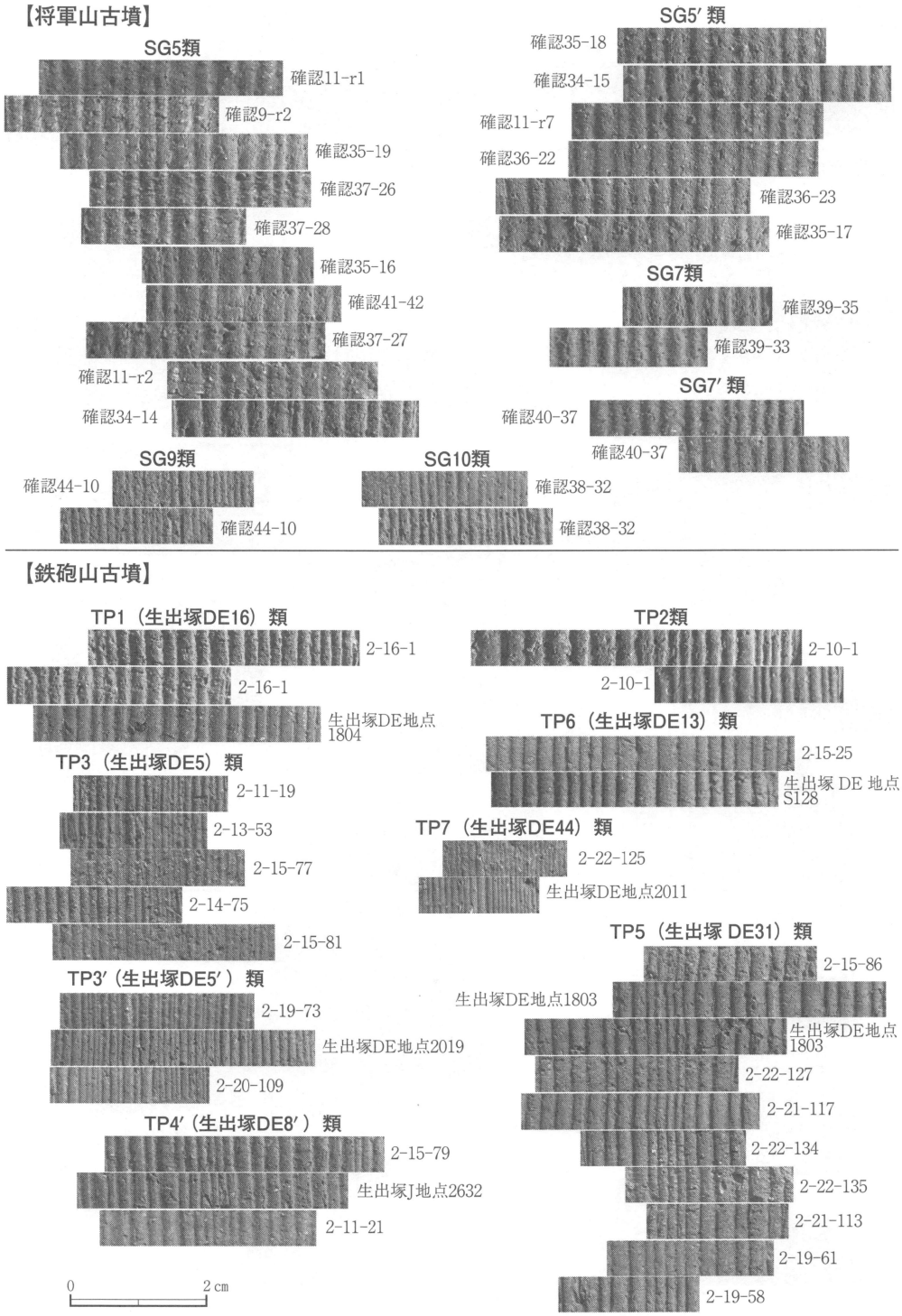


図27　埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース⑤

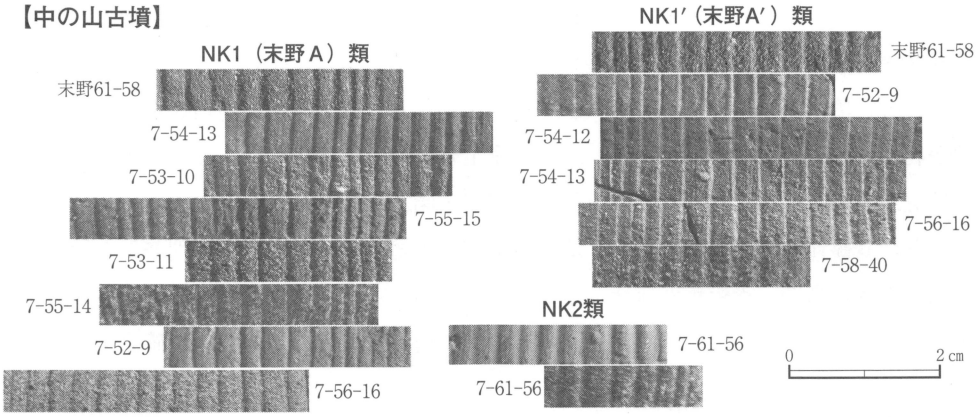


図27　埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベース⑥

表７・図27〈基礎データ集成〉凡例一覧

【表７】

※埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の特徴を整理した。

※個体番号は、各報告書を参照。〈集番号－図版番号－個体番号〉で全個体を記載した。
なお、報告書に関して省略名を使っているのは以下である。
①「調研報」→『埼玉県立さきたま資料館調査研究報告』
②稲荷山古墳「新」→『武蔵埼玉稲荷山古墳』
③将軍山古墳「確認」→『将軍山古墳　確認調査編』

※刷毛目は、古墳毎に通し番号を付けた。各古墳の略称は、稲荷山（IN）、丸墓山（MH）、天祥寺裏（TS）、二子山（FT）、瓦塚（KZ）、奥の山（OY）、愛宕山（AT）、将軍山（SG）、鉄砲山（TP）、中の山（NK）である。この略称の後に１から番号を振っている。なお、「′」は逆目を示す。

※埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目のうち、生出塚窯・桜山窯・末野窯・毛塚古墳群・新屋敷古墳群・諏訪山７号周溝など生産遺跡や古墳と合致する刷毛目は、その事実を表中に明記した。なお、生出塚遺跡における刷毛目番号に関しては、以下の論文を踏襲する。
〈城倉正祥2010「生出塚窯産円筒埴輪の編年と生産の諸段階」『考古学雑誌』第94巻第１号〉

※埴輪の色調に関しては、土色帖による客観的な数値を全個体に関して示した。さらに、資料調査の際の感覚的な要素も表現するため、色調部分には肉眼観察による色調分類を示した。

※全個体に関して、器種と円筒の場合は条数を明示した。

※群別に関しては、古墳毎の大分類をアルファベットで示した。アルファベットはあくまで各古墳における群別を示し、埼玉古墳群全体での分類単位ではない。

【図27】

※埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の刷毛目を整理した。

※刷毛目写真は、デジタルカメラで接写した画像を原寸で示している。ただし、各個体に応じて焼成時の収縮率が異なるため、できるだけ焼成良好な資料を基準として縮尺を微調整している。

※刷毛目番号、及び個体番号は表７に対応する。

※生産遺跡、あるいは他古墳と刷毛目が合致する場合、その合致状況も写真で提示している。
その場合、報告書に掲載されている番号を記載した。

※表７に刷毛目番号があって図27に写真のない刷毛目に関しては、刷毛目の分類そのものはできるが、器表面の状況などから写真による明示が難しいことを示す。

※刷毛目の詳細に関しては、以下の論文を参照。
〈城倉正祥2007「埴輪製作に使用された刷毛目工具」『埴輪研究会誌』第11号〉

毛目共通類型」と呼称し図面を重ねて提示する。ちなみに、これら刷毛目共通類型が群別を越えて存在する事例は一例も存在しないので、大別分類の妥当性が確認できる。

次に、各古墳出土埴輪の刷毛目データベースを提示し、群別認識の妥当性を示すと共に、生産地が判明している類型を明示する。なお、刷毛目の分析方法については別に詳述しているので（城倉2007c)、それに倣った整理を行う（表７・図27凡例参照)。

これらの基礎作業を踏まえた上で、埼玉古墳群出土埴輪全体の大別・細別基準を示し、黄白色系統・橙褐色系統・赤褐色系統それぞれの変遷過程を明らかにする。さらに、各系統相互の派生関係を明らかにし、その時間軸を整理した上で埼玉古墳群の埴輪編年を確立する。

３．各古墳出土埴輪の分類

では、具体的に各古墳出土埴輪の分類成果について示す。なお、各古墳出土埴輪の基礎データについては表７にまとめ、分類単位の主要な実測図を図28～37に示した。

３－１　稲荷山古墳（図28①②③）

稲荷山古墳については、若松良一の大分類を修正した分類案を示す。若松は４類に分類するが、ここではＡ・Ｂ・Ｃ群に３分類する。

【Ａ群】若松がＡ類とする一群である。黄白色のなめらかな胎土を特徴とし、軟質で断面が黒色を呈する。客体的なＢ種ヨコハケ・半円透孔・突帯下側につく板押圧技法・赤彩など共通性の高い埴輪群で識別が容易である。大型円筒はいずれも半円透孔を有する。Ｂ種ヨコハケの個体が認められるが、その多くがＩＮ11の刷毛目で調整され、特定類型に集中する点が注目される。極めて限られた工人のみがＢ種ヨコハケの技法を使用していたと推察される。大型円筒では、最下段と最上２段が非穿孔域になっているようで、５条６段の可能性が高いと考える。なお、新47-14と1-71-3のように、円形透孔の中型品の規格も存在する。形象埴輪では眉庇付冑の武人が特徴的である。

【Ｂ群】若松がＣ・Ｄ類とする一群である。若松がＣ・Ｄ類と分けながらも、その生産地をともに「和名窯かその周辺」としているように、若松のＣ・Ｄ類は明確には峻別できないため一括して類型化する。なお、若松がＣ１・Ｃ２類とする円筒については、刷毛目の一致から明らかにＣ群に分類できる埴輪が含まれているので、本稿のＢ群と若松のＣ・Ｄ類は明確な対応関係にはない。橙褐色で砂粒の多い胎土を特徴とするが、若干多様な様相を示し、複数生産地の製品を含んでいる可能性が高い。しかし、後述するＣ群とは異なり円筒の第１段が高く、段間も広めであることが特徴である。透孔はいずれも円形で、口縁部に外面ナナメハケを施す個体が多い。円筒の突帯板押圧技法、朝顔の擬口縁状の作りなど、基本的にはＡ群と共通する技法が見出せる。

なお、重要なのは1-66-5、1-66-6の個体に見られるような３本突帯の円筒が認められる点で

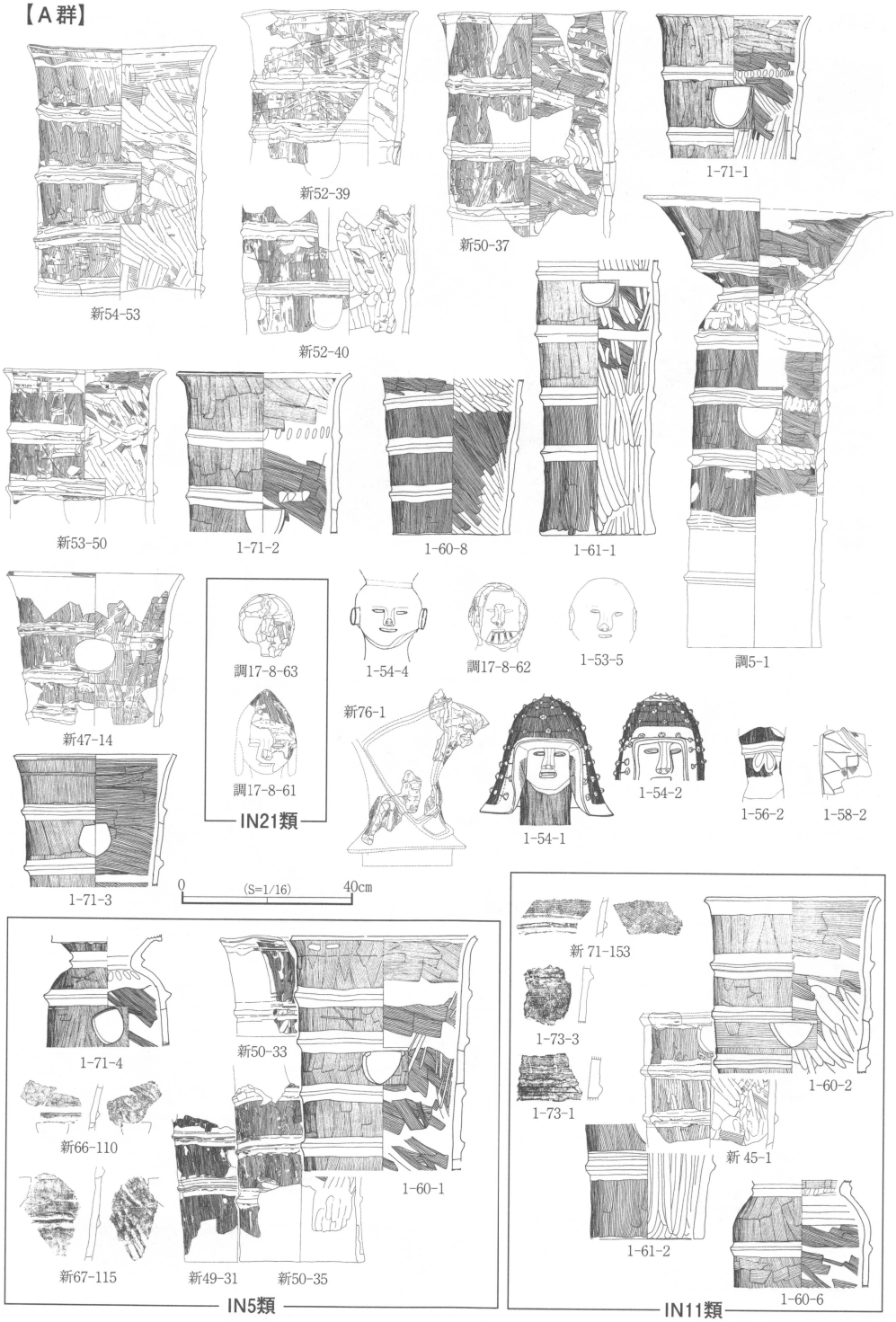


図28　稲荷山古墳出土埴輪の分類①

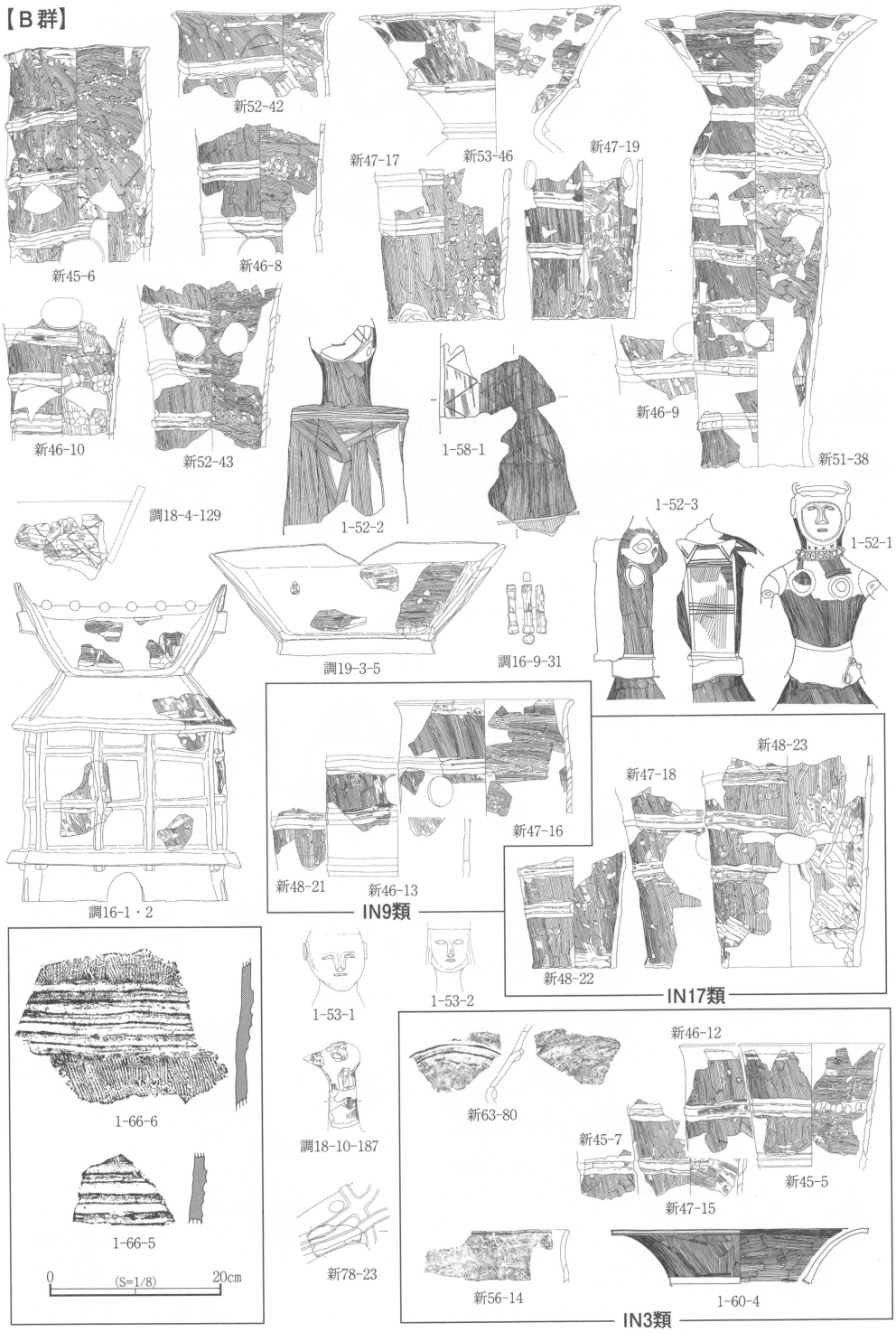


図28　稲荷山古墳出土埴輪の分類②

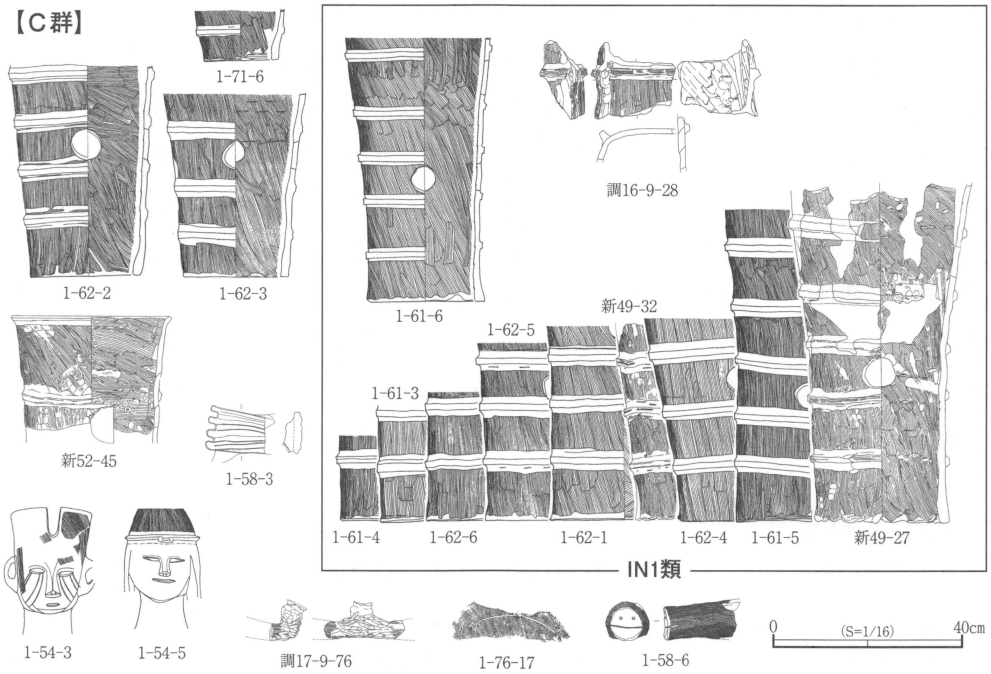


図28　稲荷山古墳出土埴輪の分類③

ある。後述するが、丸墓山C群MH５類にもこのような複数稜の突帯を持つ円筒が認められ、これらは比企の雷電山古墳（埼玉県県史編纂室1986）出土埴輪の系譜を引くものと考えている。そのため、本稿では「雷電山復古型」と仮称する。

形象埴輪は、家・馬・鳥・器財・人物が認められる。特に人物埴輪は、色調・胎土こそ違うが、A群とよく似た特徴を有する。

【C群】若松が生出塚窯産とするB類とC１・C２類の一部を含む一群である。若松がB類とC類の峻別に苦労しているように、基本的にはB群の中での特徴的な一群をC群として類型化しているのが実態に近い。赤褐色の砂粒が少ない胎土を特徴とする。円筒はいずれも細身で、最下段及び段間がかなり狭い。５段目以上に顕著なナナメハケを施す個体が多く、突帯も断続ナデ状の歪みをもつ個体が多い。特に同じ刷毛目で調整されるＩＮ１類は非常に画一的な埴輪群である。

形象埴輪は、家・動物・人物が認められるが、やはりB群と共通性が高い。

このC群については、若松が生出塚窯産である可能性を指摘し、生出塚W地点33号窯出土品との共通性を示唆するが、現状で確認されている生出塚遺跡の窯に同一刷毛目は見出せず、生出塚窯製品と判断はできない。しかし、C群（若松B類）を生出塚窯産とした若松の指摘は重要で、この稲荷山C群は、後述する二子山C群ＦＴ１類・ＦＴ８類の大型円筒（生出塚窯産）へと型式的にスムーズに繋がりうる特徴を持っている点が注目される。すなわち、ＩＮ１類は

細身の５条６段構成で、第一段が低く、段間も狭い。さらに、５段目以上にナナメハケを多用し、最上段が幅広いなど二子山ＦＴ１類・ＦＴ８類と共通した特徴を持つ。しかしながら、ＩＮ１類は二子山ＦＴ１類・ＦＴ８類に比べて器形が寸胴化しておらず突帯が高いなど前出的で、まさに系譜関係を想定させる特徴を保持する。つまり、稲荷山Ｃ群は稲荷山B群の一部から生まれた「生出塚系統の直接の祖形となりうる埴輪群」ということになる。しかし、Ｂ群の中の特徴的な一群をＣ群として認識したように、Ｂ群・Ｃ群両者の型式的距離は近い。さらに、生出塚Ｉ期に位置付けられる生出塚W地点でもＩＮ１類の刷毛目や同じ特徴をもった大型円筒を確認できないことからすれば（城倉2010a)、稲荷山古墳の段階では生出塚は開窯していない可能性が高い。Ａ群とＢ群を主体とする稲荷山古墳の埴輪生産の段階で、Ｂ群の一部に生出塚系統の直接の祖形となりうるＣ群が生まれていた状況と理解するのが妥当だろう。

３－２　丸墓山古墳（図29）

丸墓山古墳に関しては、現在までの発掘で出土した埴輪は破片資料に限られており、全形が分かる資料は存在しない。しかし、破片資料の分析でも、Ａ・Ｂ・Ｃ群の３分類が可能である。

【Ａ群】黄白色の胎土を特徴とする。確認できる個体数は限られているが、稲荷山Ａ群と酷似する特徴を有する。

【Ｂ群】橙褐色の胎土を特徴とする。稲荷山Ｂ群と酷似する。

【Ｃ群】赤褐色の砂粒が少ない胎土を特徴とする。破片資料のみだが、最下段と段間が非常に狭い一方で、最上段が長く設定されている。これらの破片資料から推定される円筒の形態上の特徴は、まさに稲荷山Ｃ群ＩＮ１類と二子山Ｃ群ＦＴ１類・ＦＴ８類の間の過渡的様相を呈している。なお、稲荷山古墳における状況と同じく丸墓山Ｃ群は丸墓山Ｂ群と特徴がよく似ている。

ところで、Ｃ群には6-20-74、6-22-9、6-22-10のように３稜の突帯を持つ「雷電山復古型」が存在している。破片資料のためあまり積極的に評価されてこなかった資料だが、6-19-55の普通円筒と同じＭＨ５の刷毛目で調整されるなど、普通円筒と一連で製作された埴輪だと考えられる。稲荷山古墳と丸墓山古墳においてのみ、この「雷電山復古型」が存在している点は重要である。橙褐色系統の埴輪が比企地方の窯で生産された事実を示すものだろう。

３－３　天祥寺裏古墳（図30）

天祥寺裏古墳出土埴輪は、Ａ・Ｂ・Ｃ群の３分類が可能である。

【Ａ群】赤褐色で砂粒の少ない胎土を特徴とする。焼成が良好で灰褐色に変色する個体も多くある。ＴＳ１類・ＴＳ２類ともに４条５段の円筒埴輪で、最下段と段間が狭く、最上段が広く設定されている。鳥・馬・人物も確認できる。Ａ群に関しては、生出塚遺跡南支台W地点32・33号窯で焼成された事実が判明している。生出塚編年のＩ期後半に位置付けられる（城倉

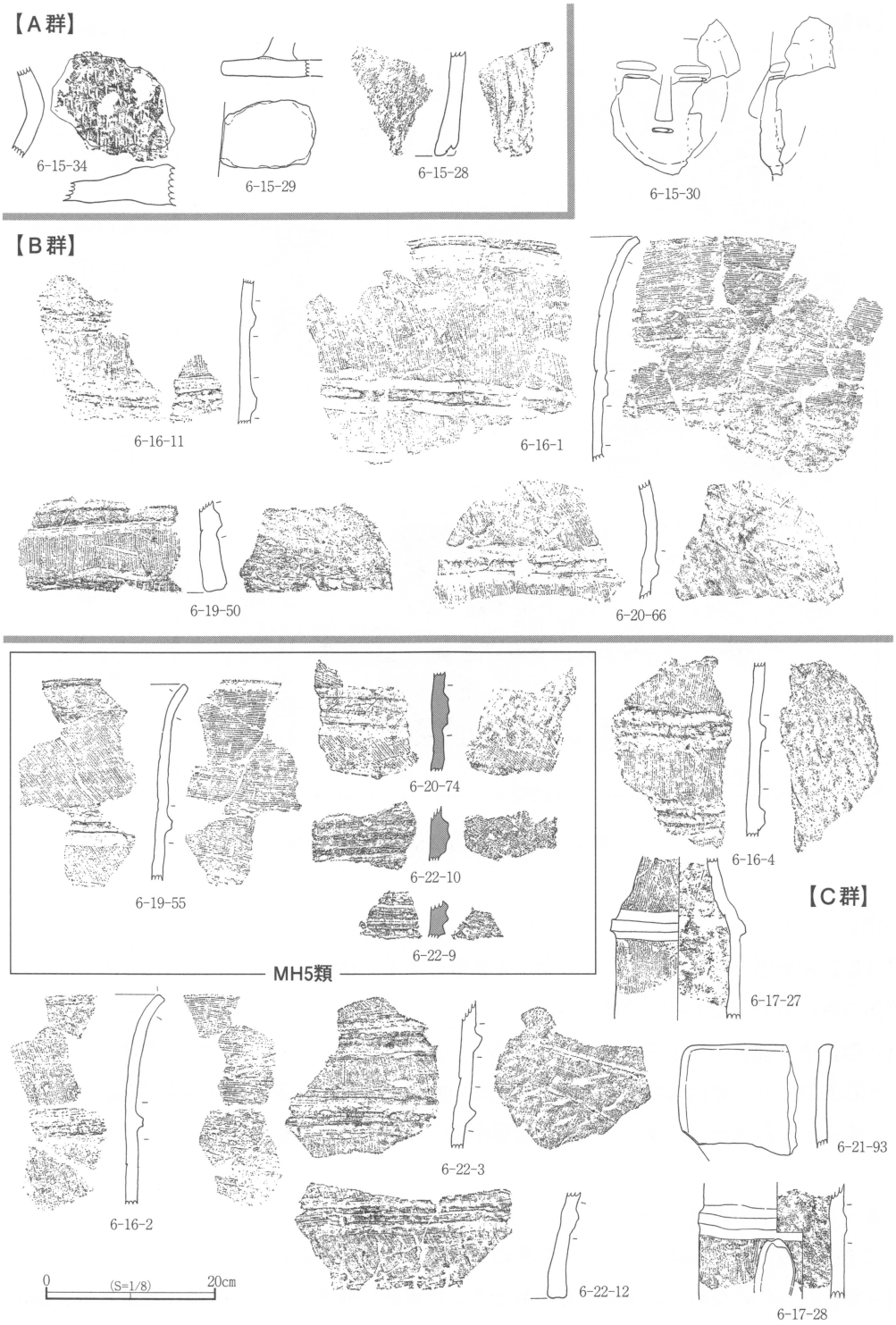


図29　丸墓山古墳出土埴輪の分類

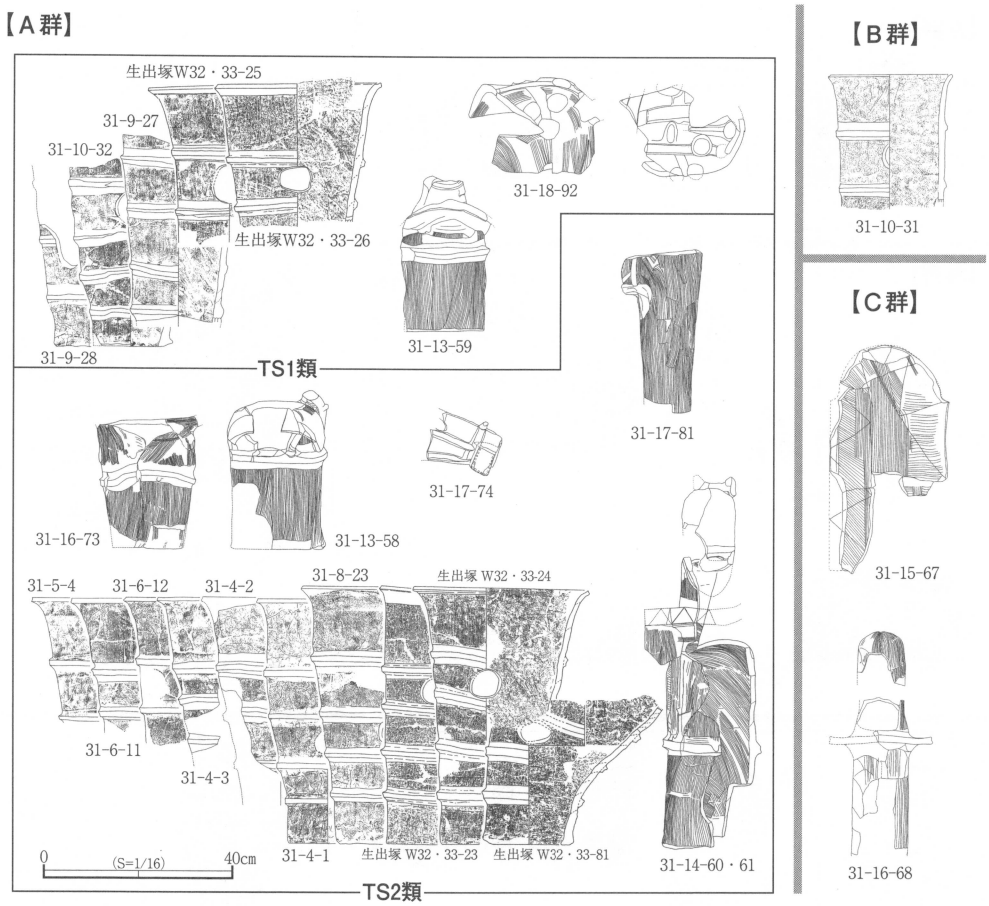


図30　天祥寺裏古墳出土埴輪の分類

2010a)。

【B群】橙褐色で砂粒が非常に多い胎土を特徴とする。現状で確認できるのは、31-10-31の1個体のみなので、混入の可能性もある。

【C群】明茶褐色を呈する特異な一群である。胎土に径3～5mmの砂粒を大量に含み、黒色の小石も混じる。北武蔵では全く認められない胎土で、帽子と盾の器財のみが確認できる。刷毛目もA・B群と一致しない。埼玉古墳群中唯一の群馬系の埴輪と考える。

3－4　二子山古墳（図31）

二子山古墳出土埴輪は、A・B・C群の3分類が可能である。

【A群】黄白色のなめらかな胎土を特徴とする。現状で確認できるのは破片数点だが、稲荷山A群・丸墓山A群と酷似する埴輪群である。

【B群】橙褐色で砂粒が比較的多い胎土を特徴とする。発色がピンク色に近い個体が多い。全

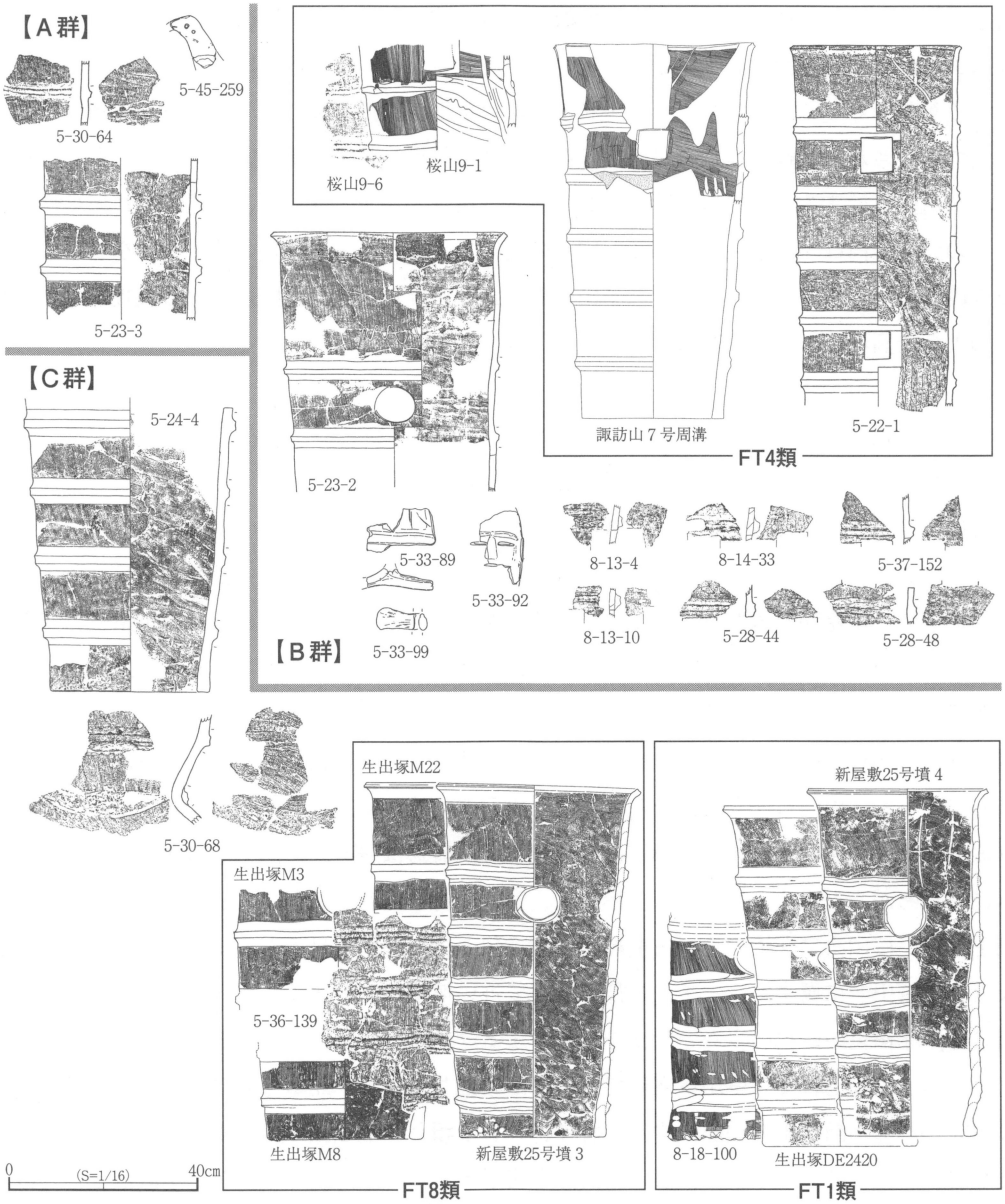


図31　二子山古墳出土埴輪の分類

形を把握できる資料としてＦＴ４類がある。ＦＴ４類は段間が均等に設定される大型円筒で、方形透孔が特徴である。ＦＴ４類の刷毛目に関しては、桜山遺跡９号窯の焼台として使用された大型円筒、さらに諏訪山７号周溝・毛塚32号墳出土円筒と一致することが判明しており、「プレ桜山」に属する（城倉2010b）。同じく、Ｂ群では5-23-2のように最上段が著しく長い大型円筒も確認できるが、最上段に「プレ桜山」の特徴である波状文も見出せる。つまり、Ｂ群はいずれも比企の桜山周辺で生産された埴輪群であることが明白である。

【C群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。前述したように稲荷山C群ＩＮ１類、及び丸墓山C群の系譜を引くＦＴ１類・ＦＴ８類が注目される。５条６段構成の寸胴な大型円筒で、第１段が著しく短い。このＦＴ１類・ＦＴ８類は生出塚遺跡Ｎ地点30号窯、及びM地点27・28号窯で焼成された埴輪で、この二子山C群の生産を契機として生出塚遺跡では北支台の大規模な生産活動が始まる。生出塚Ⅱ期の開始である（城倉2010a）。さらに、後述する瓦塚C群ＫＺ１類の大型円筒は、二子山ＦＴ１類と同一の刷毛目であり、ＦＴ１類の第１突帯を省略した４条５段の規格である。すなわち、二子山C群・瓦塚C群が生出塚遺跡における大規模生産の開始の大きな画期となるのである。

３－５　瓦塚古墳（図32①②）

瓦塚古墳出土埴輪は、Ａ・Ｂ・C群の３分類が可能である。

【A群】黄白色のなめらかな胎土を特徴とする。しかし、稲荷山A群・丸墓山A群・二子山A群とは異なり、白色が弱くクリーム色に近い色調が特徴である。円筒は段間が均等に設定される。形象は、全身像を含む人物・馬・鳥・器財が確認できる。瓦塚A群は黄白色系統に属しながらも、かなり後出的な様相を呈する。さらに、人物埴輪の特徴をみるとB群ともかなり型式的距離が近いことが伺われる。

【B群】橙褐色で砂粒の多い胎土を特徴とする。残存度の高い個体も多く、全体像を把握することができる。円筒は４条５段を基本とし、段間が均等、最上段と最下段が若干長めに設定される。３・４段目に直交する円形透孔を穿孔する。器形は緩やかに開くものから、若干寸胴気味に立ちあがるものまで存在する。形象は、家・動物・人物が確認できる。なお、ＫＺ３類の刷毛目は、桜山窯に至近の毛塚古墳群28号墳C類と同一の刷毛目であるように、B群は明らかな「プレ桜山」に属する。二子山B群と極めて近い埴輪群といえる。

【C群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。前述したようにＫＺ１類は二子山C群ＦＴ１類と同一の刷毛目で、生出塚窯産である点が確定している。瓦塚C群の円筒は、二子山C群の円筒と器形・調整手法が酷似する。特に、ＫＺ１類とＦＴ１類は同じ刷毛目で同工品の可能性が高いと考えているが、両古墳の階層差を明示するために円筒の条数を一本減らしていることが注目される。ちなみに瓦塚ＫＺ１類は、新屋敷古墳群の埴輪棺228-2にも同じ刷毛目が認められる。形象埴輪は、馬・家・器財・人物が確認できるが、いずれも円筒と同じく濃い赤色で、生出塚産埴輪の特徴が明らかである。

３－６　奥の山古墳（図33）

奥の山古墳出土埴輪で報告されている個体は、いずれも破片資料である。近年の発掘調査によって良好な資料が出土しているようだが、ここでは破片資料をもとにＡ・Ｂ群に分類する。

【A群】橙褐色の色調を特徴とする。二子山B群・瓦塚B群とよく似た胎土で、ピンク色に近

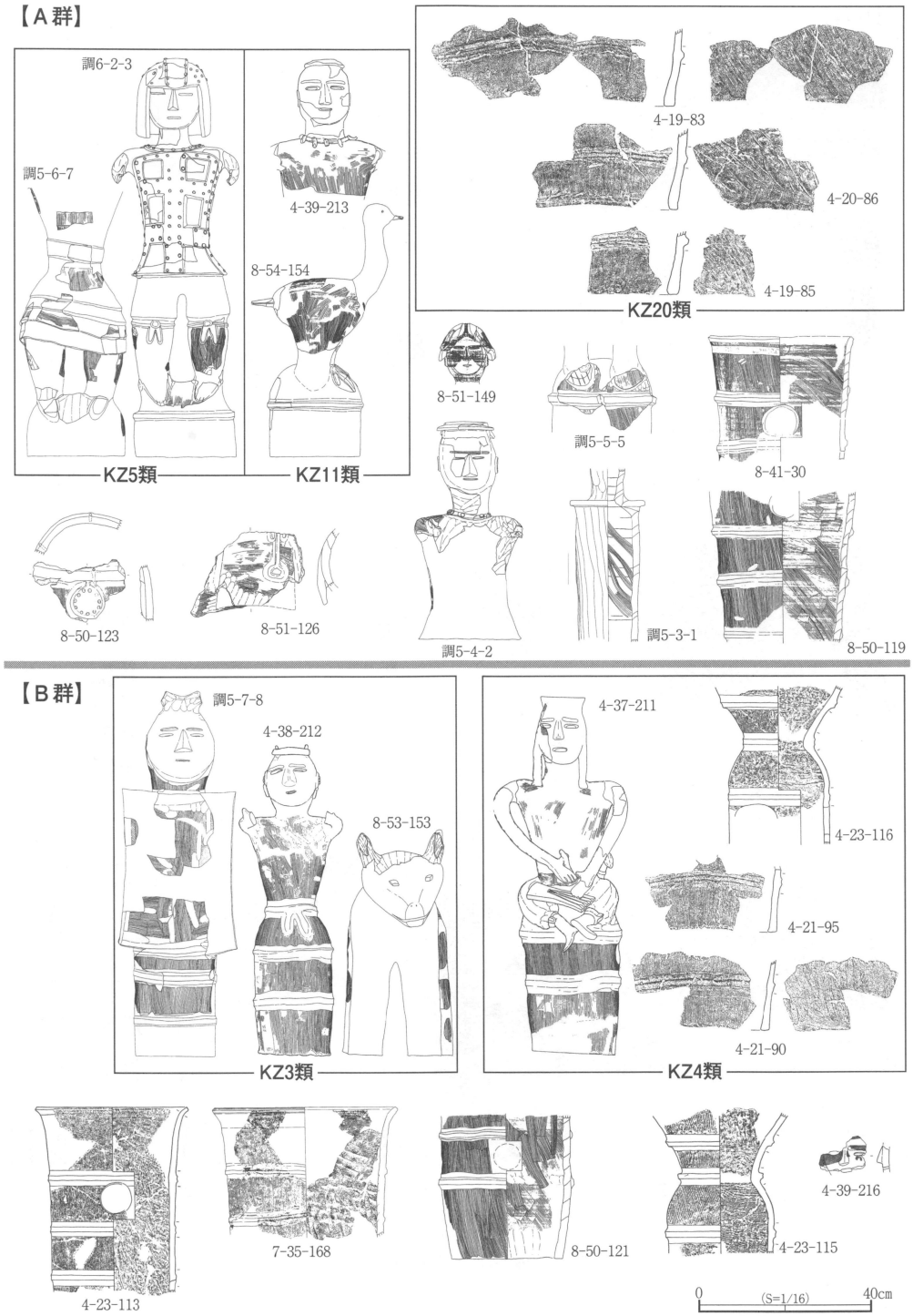


図32　瓦塚古墳出土埴輪の分類①

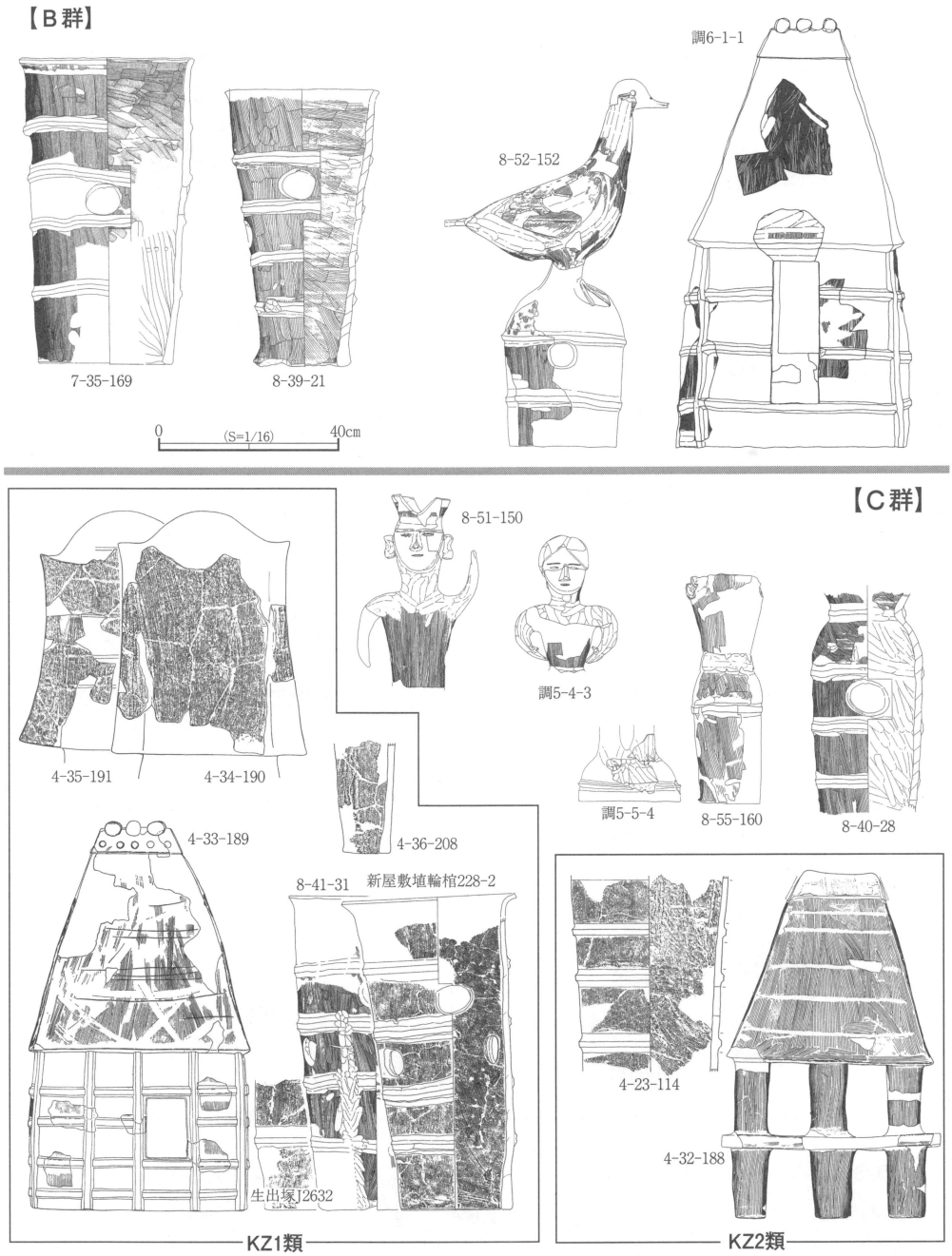


図32　瓦塚古墳出土埴輪の分類②

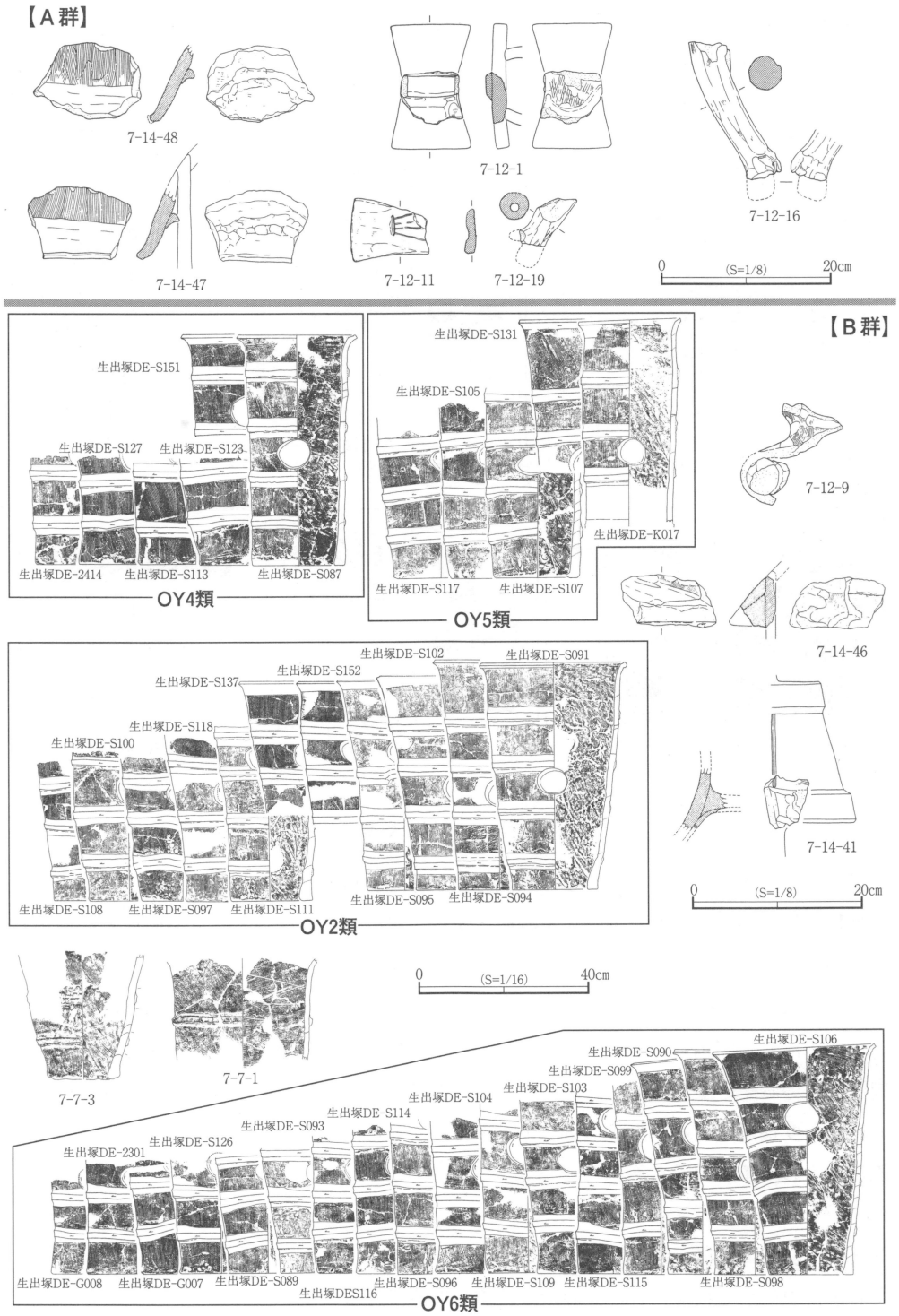


図33　奥の山古墳出土埴輪の分類

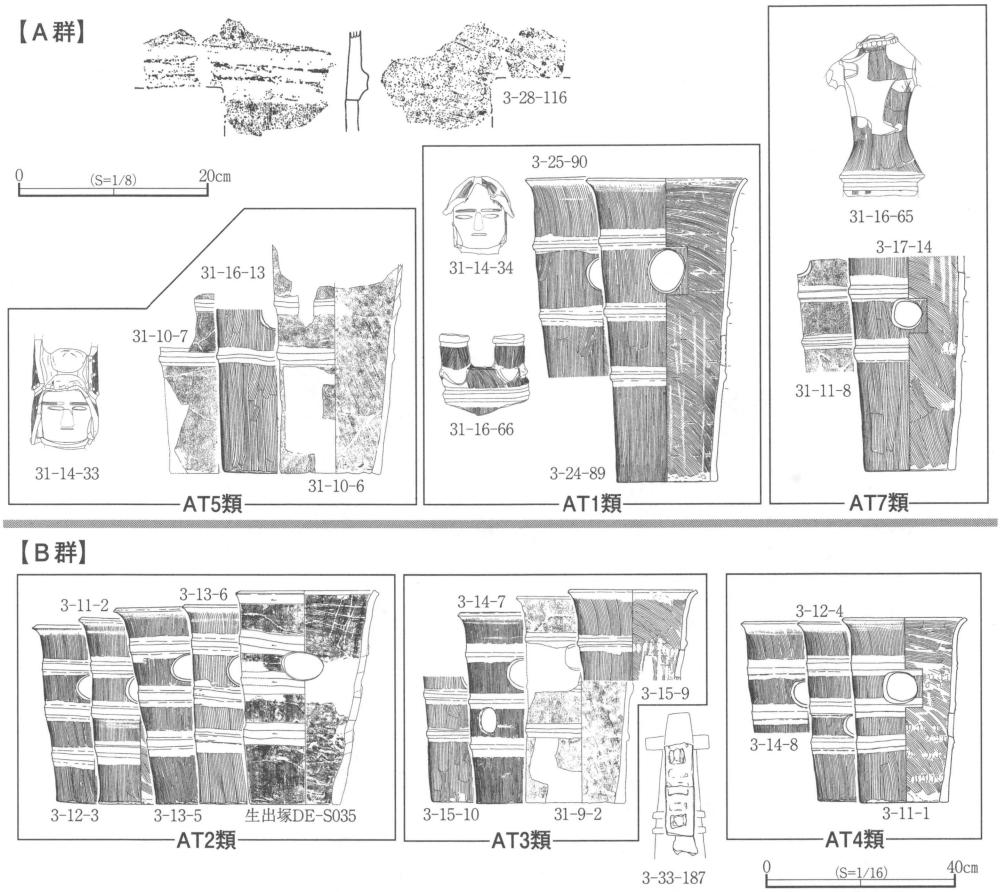


図34　愛宕山古墳出土埴輪の分類

い発色の個体が多い。家・人物など形象破片が主体を占める。

【B群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。奥の山B群はいずれも小破片で様相がわかりにくいが、生出塚DE地点出土品の刷毛目と一致するため、生出塚窯産であることが確定している。さらに、生出塚DE地点を中心に残りの良い個体が多く確認されており、全体像の把握が可能である。図示したようにOY2類・OY4類・OY5類・OY6類とほぼ円筒の様相が判明している。いずれも第1段が低い4条5段で、天祥寺裏A群TS1類・TS2類からのスムーズな変遷が追える資料である。生出塚編年のⅡ期前半、二子山古墳・瓦塚古墳の直後に位置付けられる埴輪群である。

3－7　愛宕山古墳（図34）

愛宕山古墳出土埴輪は、A・B群の2分類が可能である。

【A群】橙褐色で著しく砂粒の多い胎土を特徴とする。意図的に胎土に多量の砂粒を混入しているものと思われ、後述する将軍山A群も酷似した胎土を有する。円筒は、いずれも第1段が

著しく長い３条４段で、同じ３条４段のＢ群の円筒と比べてもかなり法量が大きい。主体を占めるＡＴ１類とＡＴ５類は同一母材の工具である可能性が高い。また、破片資料3-28-116など方形透孔も存在するが、混入資料の可能性も残る。形象は全身像を含む人物を確認している。

【Ｂ群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とし、明茶～灰褐色を呈する焼成良好品が多い。ＡＴ２類は、生出塚遺跡ＤＥ地点21・22号窯で一括焼成された埴輪で、生出塚編年Ⅱ期後半に位置付けられる。中型の３条４段、突帯が低平でナデ幅が広いのが特徴である。後述する将軍山Ｃ群ＳＧ３類と同じ刷毛目で、同時期の製作品である。なお、形象では大刀を確認している。

３－８　将軍山古墳（図35）

将軍山古墳出土埴輪については、岡本健一の的確な分類（岡本1997）をそのまま踏襲する。ここでは分類名称を変更し、Ａ・Ｂ・Ｃ群に３分類する。

【Ａ群】岡本分類Ｂ類が該当する。橙褐色で著しく砂粒の多い胎土を特徴とする。器高半分に達するほど第１段が長い３条４段で、前述した愛宕山Ａ群に酷似する。しかし、突帯が愛宕山Ａ群よりも扁平化し、第１段が高くなっている点などより後出的な特徴を有する。大半がＳＧ５類の刷毛目で調整される同工品である。

【Ｂ群】岡本Ｃ１・Ｃ２類が該当する。橙褐色を基本とし、焼成の硬質な個体が多い。後円部北側周辺から集中的に出土した埴輪群である。岡本が細分しているように、若干距離のある埴輪群を含む。岡本がＣ２類とした板ナデ調整による個体群（40-38・40-39・40-40）とＳＧ７類の個体群は、寸胴な４条５段の形態がよく似ている。一方で、岡本がＣ１類とする38-29や38-30などの個体は、形態的に見れば生出塚窯産のＣ群と類似する。なお、形象では盾持人・靫が確認できる。

【Ｃ群】岡本Ａ類が該当する。赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴する。岡本が生出塚窯産であることを想定した通り、ＳＧ３類・ＳＧ４類は生出塚遺跡ＤＥ地点出土品と刷毛目が一致する。４条５段の中型品で、特にＳＧ３類は愛宕山Ｂ群ＡＴ２類と同じ刷毛目の別規格品である。同じく生出塚編年Ⅱ期後半に位置付けられる。なお、Ｃ群は将軍山古墳出土埴輪で主体を占める。

３－９　鉄砲山古墳（図36）

鉄砲山古墳出土埴輪はすべて赤褐色系統で、生出塚窯産であることが確定している。現状では報告品の破片資料にも橙褐色系統を確認していないが、近年、発掘調査も進んでおり、新しい分類群が確認される可能性もあるので、ここではＡ群と呼称する。

【Ａ群】赤褐色の砂粒の少ない胎土を特徴とする。図示したＴＰ１類・ＴＰ３類・ＴＰ５類は、生出塚遺跡ＤＥ地点18・16・20号窯で焼成されている。寸胴で裾広がりの個体も多い大型多条の円筒である。前述した愛宕山Ｂ群ＡＴ２類・将軍山Ｃ群ＳＧ３類が焼成された21・22号窯を切る窯で焼成されており、愛宕山古墳・将軍山古墳に続く生出塚編年Ⅲ期前半に位置付けられ

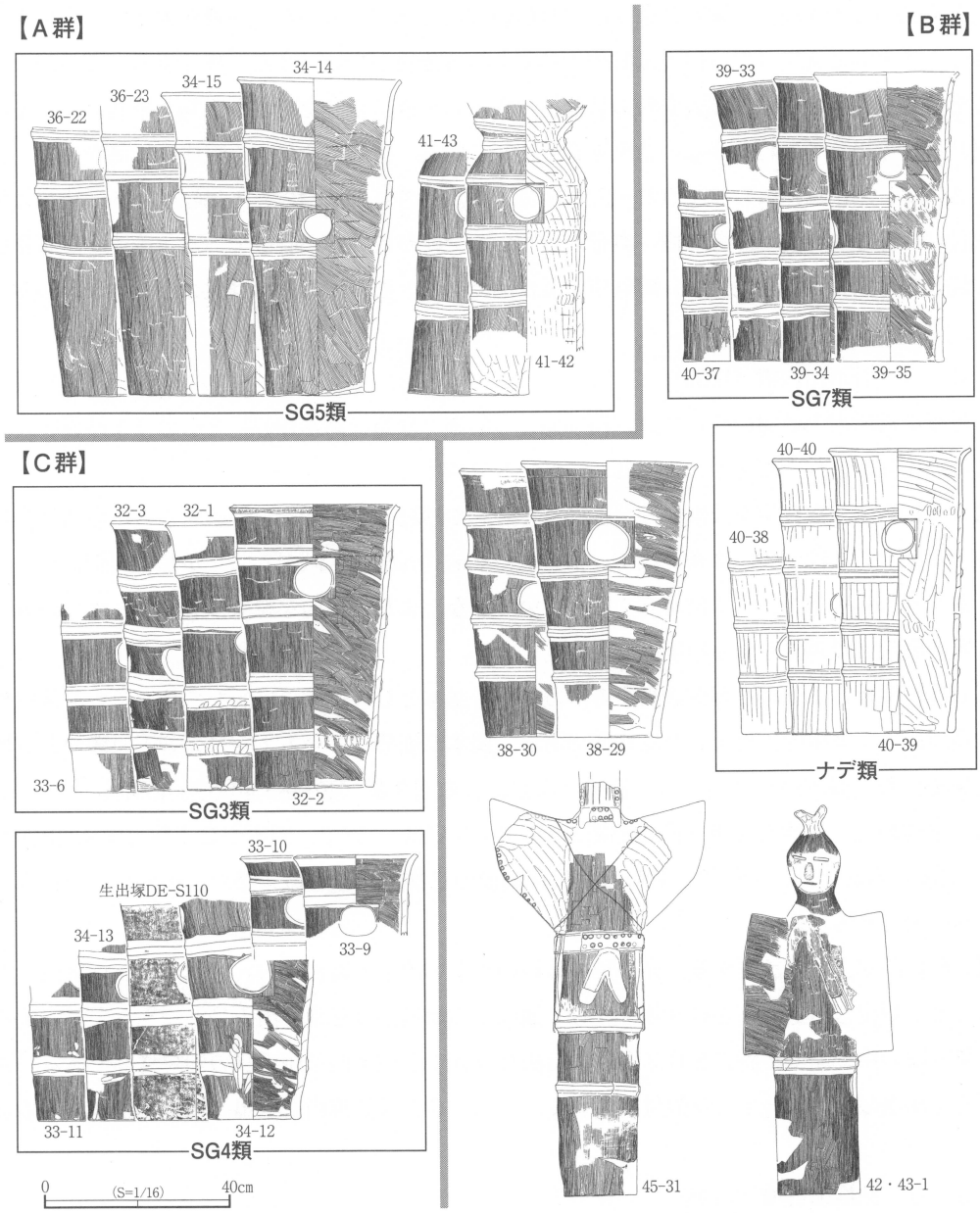


図35　将軍山古墳出土埴輪の分類

る。

3－10　中の山古墳（図37）

中の山古墳からは「須恵質埴輪壺」が出土している（註1）。近年、太田博之が分類とその位置付けを行っている。その分類を基本とし、A・B・C群に3分類する。

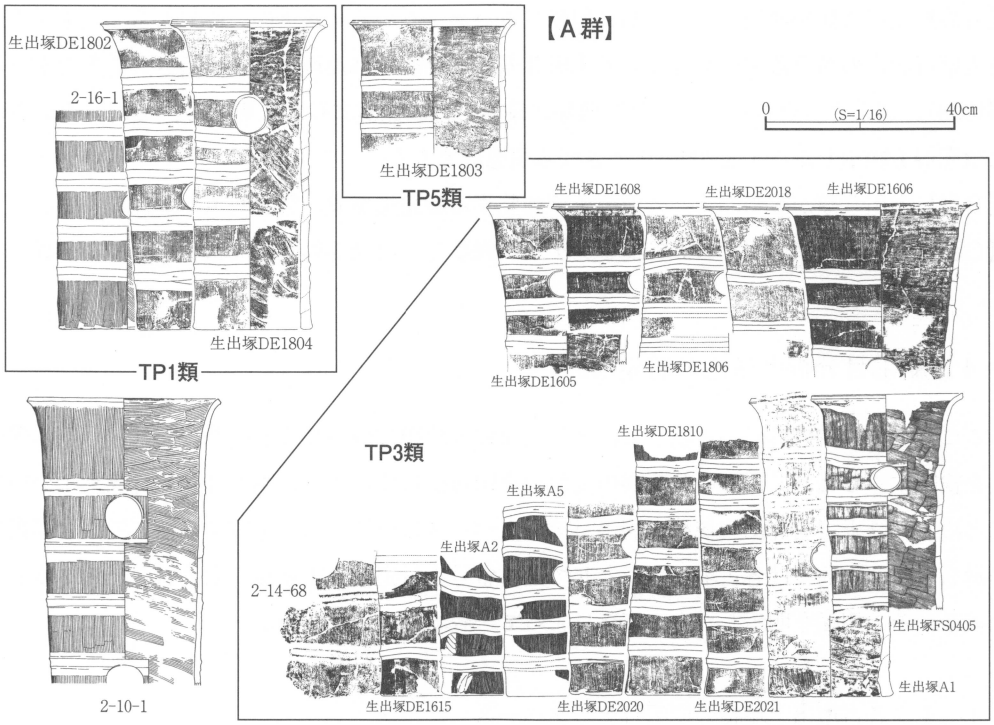


図36　鉄砲山古墳出土埴輪の分類

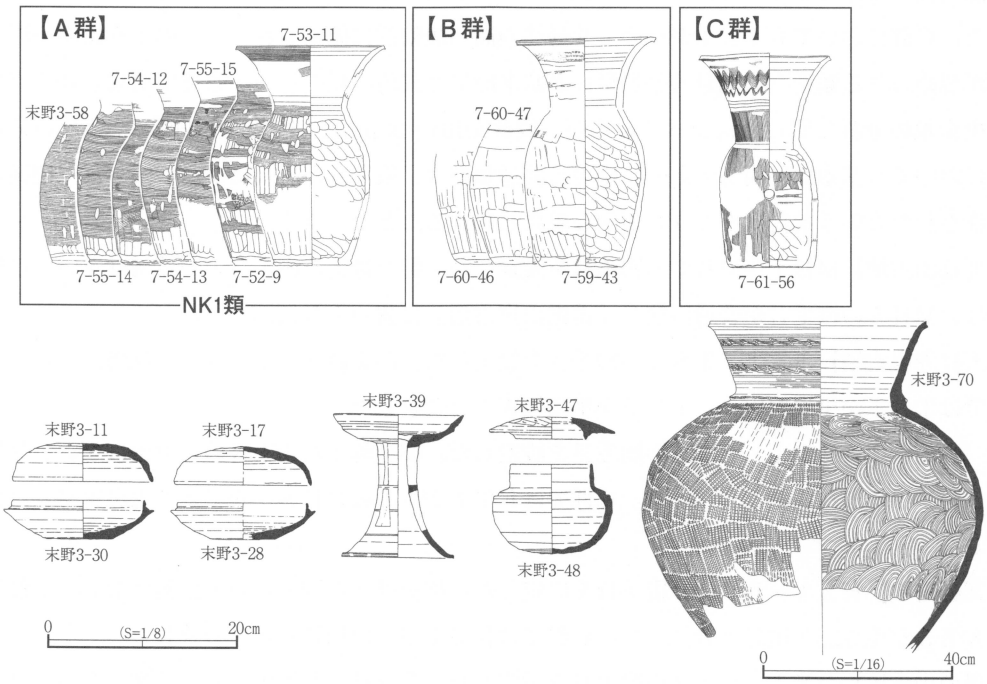


図37　中の山古墳出土埴輪の分類と末野３号窯出土須恵器

【A群】太田A類が該当する。外面に回転ヨコハケを有する青灰色の一群である。従来から、埼玉県寄居町の須恵器生産遺跡である末野３号窯で焼成された可能性が指摘されてきたが（福田1998）、刷毛目の合致によって供給関係が確定した。図37には、末野３号窯で同時焼成された須恵器も図示した。ＴＫ209型式とされる須恵器である。

【B群】太田B類が該当する。外面をナデ調整する酸化焔焼成の明黄褐色の一群である。

【C群】太田C類が該当する。外面をタテハケ調整し、口縁部外面に波状文を有する一群である。

４．刷毛目分析と産地の特定

ここまで埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の分類についてまとめた。これら分類の妥当性を検証するとともに、その分類群の生産地を明らかにするため、刷毛目の分析成果についてまとめる。埼玉古墳群出土埴輪の刷毛目データベースについては、図27に一括して原寸写真を提示した。基本的には各古墳を単位として通し番号を設定し、生産地の刷毛目と一致するものは表７にその関係を明示した上で写真によって一致状況を示している。

４－１　各古墳出土埴輪の刷毛目データベース

【稲荷山古墳】ＩＮ１～ＩＮ21の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はなく、分類の妥当性を確認できる。A群では、B種ヨコハケが全てＩＮ11で調整される点が注目される。また、C群においてもＩＮ１が極めて共通性の高い埴輪群に確認された。このように同一刷毛目が認められる類型（刷毛目共通類型）が基本的に型式的距離の近い埴輪群で構成される点は、各生産地の分析で明らかになっているが（城倉2010a・2010b）、生産地の判明していない分類群においても基本的に同じである。刷毛目共通類型は、限られた工人によって限られた期間に製作されたという前提はかなり普遍的な現象と考えることができる。

【丸墓山古墳】ＭＨ１～ＭＨ８の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。C群では、ＭＨ５の刷毛目が普通円筒と「雷電山復古型」に認められた。

【天祥寺裏古墳】ＴＳ１～ＴＳ５の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。A群ではＴＳ１が生出塚Ｗ４、ＴＳ２が生出塚Ｗ１と合致した。

【二子山古墳】ＦＴ１～ＦＴ12の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。B群では、ＦＴ４が桜山Ｇと合致した。C群ではＦＴ１が生出塚ＤＥ８、ＦＴ８が生出塚Ｍ６と合致した。

【瓦塚古墳】ＫＺ１～ＫＺ20の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。B群ではＫＺ３が毛塚28号墳Ｃと合致した。C群ではＫＺ１が生出塚ＤＥ８と合致した。

【奥の山古墳】ＯＹ１～ＯＹ７の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。B群ではＯＹ２が生出塚ＤＥ13、ＯＹ４が生出塚ＤＥ19、ＯＹ５が生出塚ＤＥ12、ＯＹ６が生出塚

ＤＥ６に合致した。

【愛宕山古墳】ＡＴ１～ＡＴ８の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。Ｂ群ではＡＴ２が生出塚ＤＥ９と合致した。

【将軍山古墳】ＳＧ１～ＳＧ10の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。Ｃ群ではＳＧ３が生出塚ＤＥ９、ＳＧ４が生出塚ＤＥ27に合致した。

【鉄砲山古墳】ＴＰ１～ＴＰ７の刷毛目を設定した。ＴＰ１が生出塚ＤＥ16、ＴＰ３が生出塚ＤＥ５、ＴＰ４が生出塚ＤＥ８、ＴＰ５が生出塚ＤＥ31、ＴＰ６が生出塚ＤＥ13、ＴＰ７が生出塚ＤＥ44と合致した。そのうち、ＴＰ４とＴＰ６の刷毛目を持つ個体は、それぞれ瓦塚古墳・奥の山古墳からの流れ込み資料の可能性が高い。

【中の山古墳】ＮＫ１・ＮＫ２の刷毛目を設定した。群を越えた刷毛目の一致例はない。Ａ群ではＮＫ１が末野Ａと合致した。

４－２　生産地の特定

埼玉古墳群における刷毛目データベースの構築によって、各古墳の分類の妥当性が証明された。また、刷毛目共通類型が極めて限られた工人によって限られた期間に製作された点も推定できた。最後に、刷毛目の同定から生産地が特定できている例について、対応関係をまとめておく。

【生出塚窯】（ＴＳ１＝Ｗ４）（ＴＳ２＝Ｗ１）（ＦＴ１＝ＫＺ１＝ＴＰ４＝ＤＥ８）（ＦＴ８＝Ｍ６）（ＯＹ２＝ＴＰ６＝ＤＥ13）（ＯＹ４＝ＤＥ19）（ＯＹ５＝ＤＥ12）（ＯＹ６＝ＤＥ６）（ＡＴ２＝ＳＧ３＝ＤＥ９）（ＳＧ４＝ＤＥ27）（ＴＰ１＝ＤＥ16）（ＴＰ３＝ＤＥ５）（ＴＰ５＝ＤＥ31）（ＴＰ７＝ＤＥ44）

【桜山窯周辺】（ＦＴ４＝桜山Ｇ＝毛塚32Ｂ＝諏訪山７号周溝）（ＫＺ３＝毛塚28Ｃ）

【末野窯】（ＮＫ１＝末野Ａ）

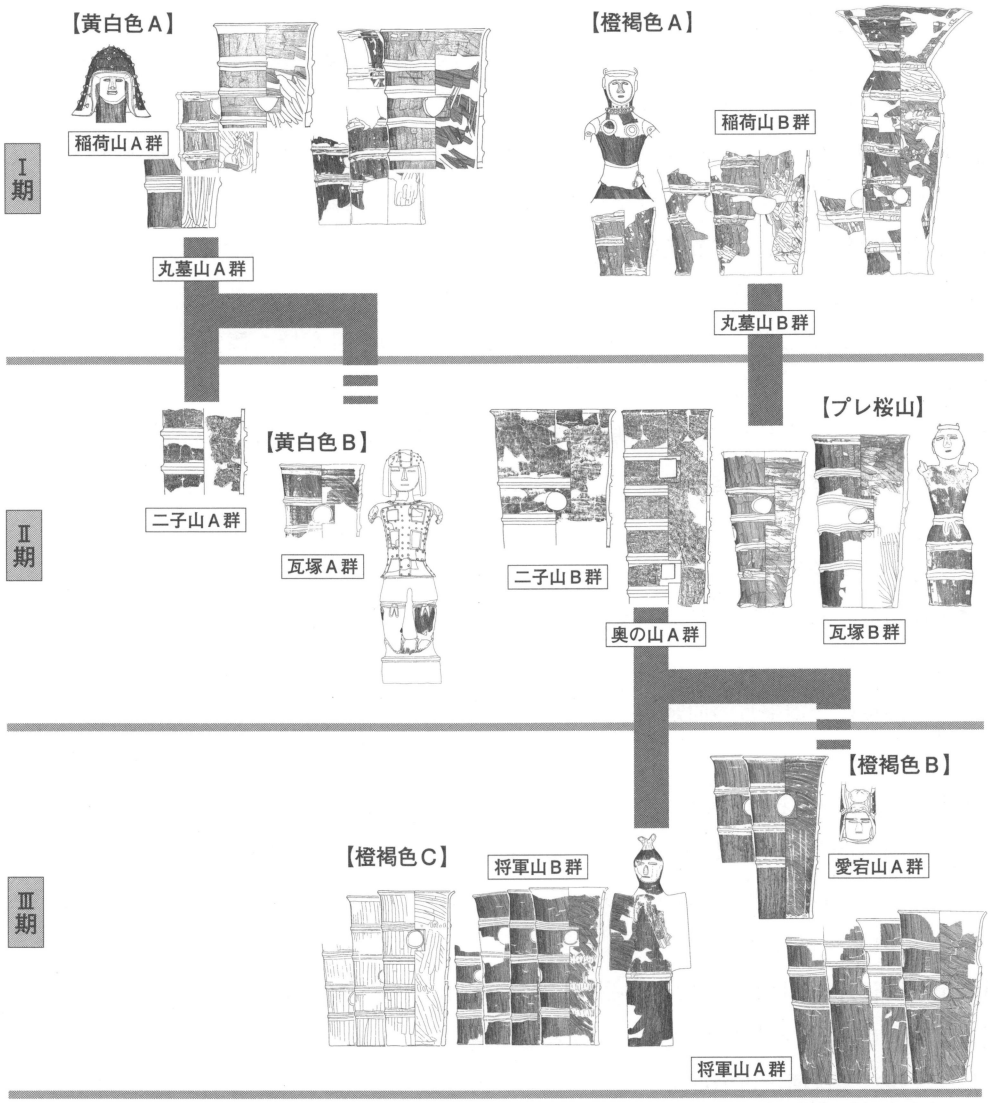
以上、現状では埼玉古墳群出土埴輪のうち、21種類の刷毛目共通類型の生産地が特定できていることになる。特に、生出塚窯産埴輪の刷毛目一致率は非常に高く、その生産窯までほぼ特定できている。今後の研究で、他の窯との刷毛目一致率も上がっていくことが予想される。

５．埼玉古墳群出土埴輪の系統と編年

５－１　大別と細別

前節まで埼玉古墳群の各古墳から出土した埴輪の分類を行った。ここでは、各古墳での分類成果をもとにして、古墳群全体の中で系統関係を整理し、編年を確立する。

まず、埼玉古墳群出土埴輪全体が大きく①黄白色系統、②橙褐色系統、③赤褐色系統に大別できる点は既に指摘した。しかし、各古墳での分類成果を踏まえれば、更なる細別が可能である。以下、系統の細別基準を明記すると共に、各古墳の分類単位との対応関係を示す。



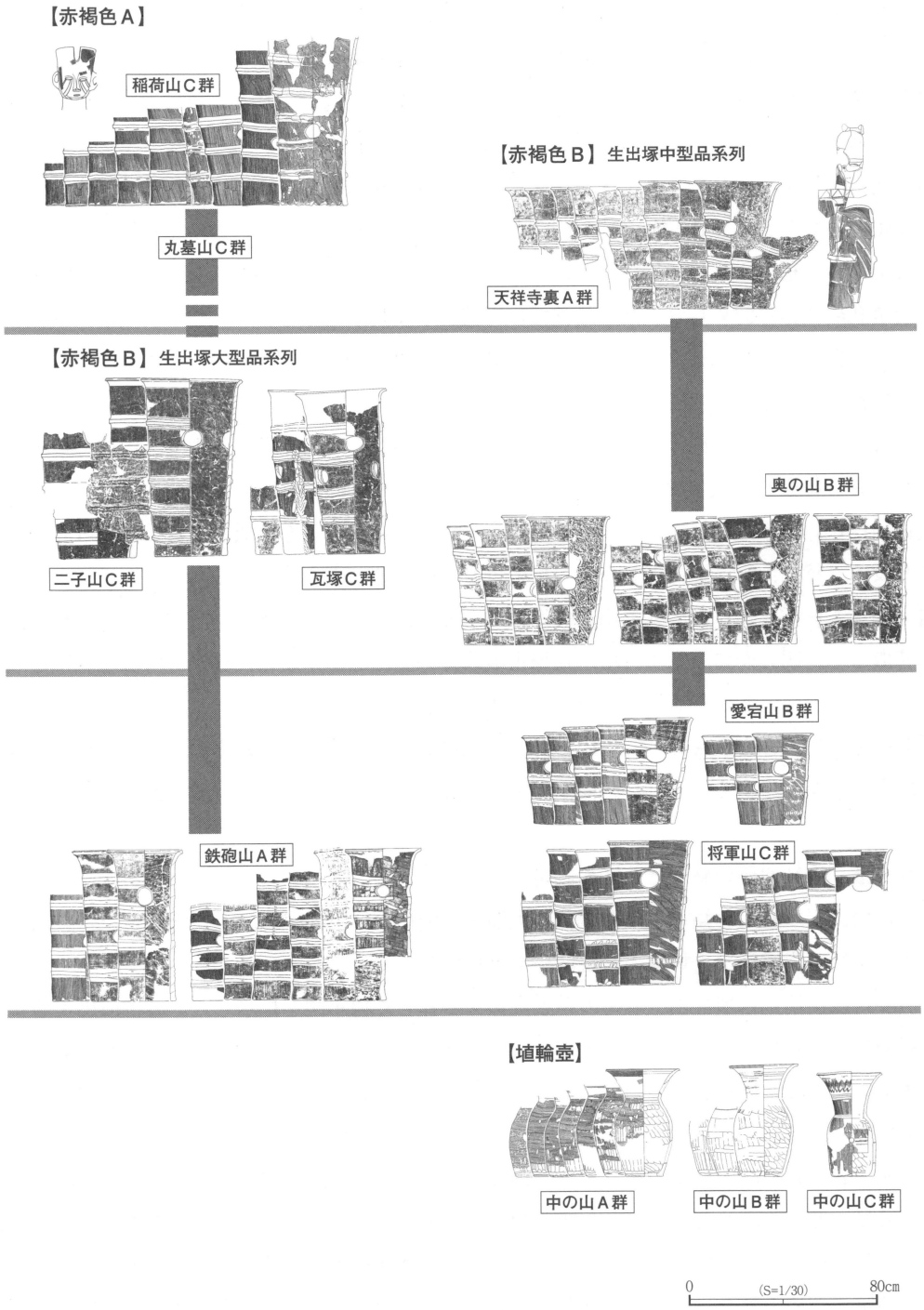
※実線は系譜関係が明瞭、破線は系譜関係が想定される

Ⅳ期

		黄白色A	黄白色B	橙褐色A	橙褐色B	橙褐色C	赤褐色A	赤褐色B	埴輪壺
Ⅰ	稲荷山	A群		B群			C群		
	丸墓山	A群		B群			C群		
	天祥寺裏							A群	
Ⅱ	二子山	A群		B群				C群	
	瓦塚		A群	B群				C群	
	奥の山			A群				B群	
Ⅲ	愛宕山				A群			B群	
	将軍山				A群	B群		C群	
	鉄砲山							A群	
Ⅳ	中の山								A～C群

※各古墳出土埴輪の分類群と系統の対応関係を示す

図38　埼玉古墳群出土


【赤褐色Ａ】
稲荷山Ｃ群
丸墓山Ｃ群
【赤褐色Ｂ】生出塚中型品系列
天祥寺裏Ａ群
【赤褐色Ｂ】生出塚大型品系列
二子山Ｃ群
瓦塚Ｃ群
奥の山Ｂ群
愛宕山Ｂ群
鉄砲山Ａ群
将軍山Ｃ群
【埴輪壺】
中の山Ａ群
中の山Ｂ群
中の山Ｃ群
0
(S=1/30)
80cm

埴輪の系統と編年

【黄白色A】稲荷山A群・丸墓山A群・二子山A群が該当する。黄白色の特徴的な胎土の一群で、円筒の客体的なB種ヨコハケ・半円透孔・赤彩を特徴とする。

【黄白色B】瓦塚A群が該当する。黄白色Aに比べて、色調がクリーム色に近い。円筒は円形透孔を基本とし、赤彩は認められない。黄白色Aより新相を示す。

【橙褐色A】稲荷山B群・丸墓山B群・二子山B群・瓦塚B群・奥の山A群が該当する。にぶい橙褐色～ピンク色を特徴とする。円筒の特徴は多様だが一連の流れの中で位置付けられる埴輪群である。稲荷山B群では最下段が長い円筒が、徐々に最下段が短くなる。二子山B群では方形透孔の個体が認められ、瓦塚B群では円筒の小型化が認められる。なお、二子山B群・瓦塚B群に関しては、前述したように桜山窯周辺での生産を確認しており、「プレ桜山」の特徴的な埴輪群である。

【橙褐色B】愛宕山A群・将軍山A群が該当する。砂粒の著しく多い胎土で、円筒の最下段が著しく長い特徴的な埴輪群である。

【橙褐色C】将軍山B群が該当する。焦げ茶褐色に近い橙褐色を特徴とする。円筒は寸胴な4条5段で、将軍山古墳で共伴しながら橙褐色Bとは形態が大きく異なる。

【赤褐色A】稲荷山C群・丸墓山C群が該当する。最下段と段間が短く設定される細身の円筒を特徴とし、明らかに二子山古墳・瓦塚古墳以降の生出塚窯産埴輪に繋がる特徴を有する埴輪群である。橙褐色Aから派生した系統である。

【赤褐色B】天祥寺裏A群・二子山C群・瓦塚C群・奥の山B群・愛宕山B群・将軍山C群・鉄砲山A群が該当する。刷毛目の同定から生出塚窯産と判明している（城倉2010a）。

5－2　系統関係の整理と画期の設定

各古墳出土埴輪の分類と古墳群全体の大別・細別について述べてきた。それらを総合的にまとめて、埼玉古墳群出土埴輪の系統関係を整理する。

図38には、埼玉古墳群出土埴輪の系統関係を整理した編年図を提示した。各古墳出土埴輪の分析で分解した分類群を、系統の大別と細別に基づいて組み直せば、極めて整合的な編年が確立する。そして、埴輪生産の画期に基づいて埼玉古墳群を編年するならば、Ⅰ～Ⅳ期の編年が可能である。

まず、各系統の時間軸を整理しよう。再三述べてきたように、赤褐色Bの生出塚窯産埴輪に関しては、窯の物理的前後関係から既に動かない編年が確立している。天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥の山→愛宕山→将軍山→鉄砲山である。問題は稲荷山・丸墓山だが、両古墳には赤褐色Aの埴輪が認められた。その中で稲荷山C群ＩＮ１類の円筒が、二子山C群ＦＴ１類・ＦＴ８類に直接繋がり得る特徴を持つ点は前述した通りである。一方、丸墓山C群はその間を埋める資料なので、赤褐色系統の一連の変遷からみて、稲荷山→丸墓山→天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥の山→愛宕山→将軍山→鉄砲山の順序が確定する。すなわち、生出塚の埴輪は、稲荷山B群

から生まれた稲荷山Ｃ群のＩＮ１類を直接の祖形として発展したのである。さらに、生出塚窯産円筒埴輪には大型品と中型品２系列の存在を確認できるが（城倉2007b）、両系列ともに①器形の寸胴化、②突帯の扁平化が進む順調な変遷を読み取ることができる。

次に、黄白色Ａは稲荷山において主体をなすが、丸墓山・二子山ではわずかな破片資料しか存在しない。客体的なＢ種ヨコハケ・半円透孔・突帯板押圧技法・赤彩などの特徴は、確かに埼玉古墳群中最も古い要素を持っている。この黄白色系統が他系統と稲荷山などで共伴する事実をもって、若松は追加樹立の可能性を指摘するわけだが、実は古手の埴輪の特徴とされる板押圧技法や朝顔の擬口縁などは稲荷山Ｂ群にも認められる。また、稲荷山Ａ群・Ｂ群・Ｃ群の各群に認められる人物埴輪の特徴を見ても、いずれも古い様相を示しており、稲荷山における各群の並存は、同時期に活動した異なる集団の生産品が供給された事実を示すと考えるほうが自然である。実際に、新屋敷古墳群・月輪古墳群・鎧塚古墳など黄白色系統が出土する古墳では、必ず橙褐色系統が共伴している。すなわち、この時期の黄白色系統と橙褐色系統の共伴は、むしろ普遍的な現象なのである。やはり、黄白色Ａと橙褐色Ａは同時期に存在した別集団とすべきである。さらに、量は少ないながらも黄白色Ｂとした瓦塚Ａ群が、黄白色Ａの系譜を引く埴輪である事実も上記の年代観を裏付ける。

最後に、橙褐色系統の変遷をまとめる。橙褐色Ａについては、稲荷山において黄白色Ａと同時期に存在した点が推定された。稲荷山Ｂ群には、突帯下側につく板押圧技法・朝顔擬口縁など、二子山以降の埴輪には認められない特徴があり、やはり古く位置付けるのが自然である。さらに、稲荷山Ｂ群は、桜山窯周辺での生産が判明している二子山Ｂ群・瓦塚Ｂ群（プレ桜山）にスムーズに繋がる特徴を備えている点が注目される。すなわち、最下段と最上段が長めで、段間が短く設定されるのが橙褐色Ａの円筒全体に通じる特徴である。この橙褐色Ａの円筒の系譜を引くのが、橙褐色Ｃとした将軍山Ｂ群である。将軍山Ｂ群の均等な段間の４条５段は、瓦塚Ｂ群円筒の器形を寸胴化させたものである。また、将軍山Ｂ群の盾持人も、瓦塚Ｂ群の盾持人とよく似ていることが知られ、その系譜関係を確認できる。一方、砂粒が著しく多い胎土を特徴とする橙褐色Ｂはその位置付けが難しいものの、桜山窯製品に最下段の長い類型が存在するので（城倉2010b）、やはり橙褐色Ａの系譜を引くものと考えることができる。

このように各系統の埴輪は比較的スムーズな変遷を辿ることが明らかになり、分類作業によって埼玉古墳群の各古墳の前後関係が確定した。次には埴輪生産の画期に基づき、その段階を設定する。まず、稲荷山古墳から始まる埼玉古墳群造営の中で大きな画期となるのは、生出塚窯における大規模生産開始の契機となった二子山古墳の出現である。この画期をもってⅡ期を設定する。これ以後、鉄砲山古墳に至るまで、生出塚窯は埼玉古墳群へ大型品・中型品を専属的に供給するようになる。次なる画期は、橙褐色系統の橙褐色Ａが大きく変質し、橙褐色Ｂ・Ｃが登場する愛宕山古墳・将軍山古墳の出現である。この画期をもってⅢ期を設定する。その後、埼玉古墳群への埴輪供給は鉄砲山古墳を最後に終焉し、中の山古墳に須恵質埴輪壺が供給

される。この画期をもってⅣ期を設定する。以上、埼玉古墳群における埴輪生産の画期を踏まえれば、埼玉古墳群Ⅰ～Ⅳ期（段階）の設定が可能である。

以上、埼玉古墳群出土埴輪の系統整理によって、各古墳の埴輪を整合的に位置付けることができた。各系統の展開を追うことで、全ての分類群がほぼスムーズに縦軸と横軸で結ばれたことになる。ここまで状況証拠を積み上げれば、改めて議論をする必要はないだろう。若松の想定する「追加樹立」は存在しない。故に、若松の「追加樹立編年案」は完全な虚構である（註2）。

5－3　埴輪からみた埼玉古墳群の階層構造

埼玉古墳群のⅠ～Ⅳ期編年を提示した。最後に、埴輪からみた埼玉古墳群の階層構造についてまとめる（図39）。埼玉古墳群を中心とした北武蔵地域に関しては、増田逸朗が墳丘規模と円筒の条数に基づく階層構造を指摘している（増田1987）。ここでは、増田の視点に時間軸と埴輪の系統差・系列差を加えて、埼玉古墳群の階層構造を復原する。

まず、本稿で確立した埼玉古墳群Ⅰ～Ⅳ期編年によれば、Ⅰ～Ⅲ期にそれぞれ稲荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳という５条以上の大型円筒を樹立する大規模墳系列がスムーズに展開する。私は以前、生出塚窯産埴輪の分析で大型品と中型品の２系列の差異を抽出したが（城倉2007b）、まさにその大型品が供給される古墳系列である。これを「主系列墓」と呼称する。なお、稲荷山古墳に続いて大型品が供給された丸墓山古墳と、二子山古墳と同時期で条数を意図的に下げた大型品が供給される瓦塚古墳もこの系列に含めておく。一方、天祥寺裏古墳・奥の山古墳・愛宕山古墳は、生出塚窯産の３条もしくは４条の中型品を樹立する規模の小さい古墳系列である。これを「副系列墓」と呼称する。なお、愛宕山古墳と同工品が存在する将軍山古墳、須恵質埴輪壺を樹立する中の山古墳もこの系列に含めておく。

このように、埼玉古墳群において、おそらく被葬者の階層差を反映するであろう２系列を見出すことができた。主系列墓が「国造墓」と想定されるのは言うまでもないが、Ⅲ期に主系列墓が衰退する一方で、副系列墓の規模が大きくなるのは偶然であろうか。いずれにしても、この２系列の階層構造の存在が、埼玉古墳群の歴史性の一端を示しているのは間違いない。

おわりに

埼玉古墳群の埴輪編年がようやく確立した。北武蔵の各地に展開する埴輪窯跡群－生出塚窯・馬室窯・姥ヶ沢窯・権現坂窯・桜山窯・和名窯から出土し報告された全ての埴輪を分析し（城倉2010a・2010b）、各生産地における様相を把握した上で、北武蔵地域の頂点に位置する埼玉古墳群出土埴輪の系統整理と編年を行った。その結果、埼玉古墳群には、①黄白色系統（５Ｃ末～６Ｃ初に北武蔵の集中した場所で生産された製品）、②橙褐色系統（比企・大里方面の生産窯の製品）、③赤褐色系統（生出塚窯産製品）の３系統が供給されている事実を確認し、

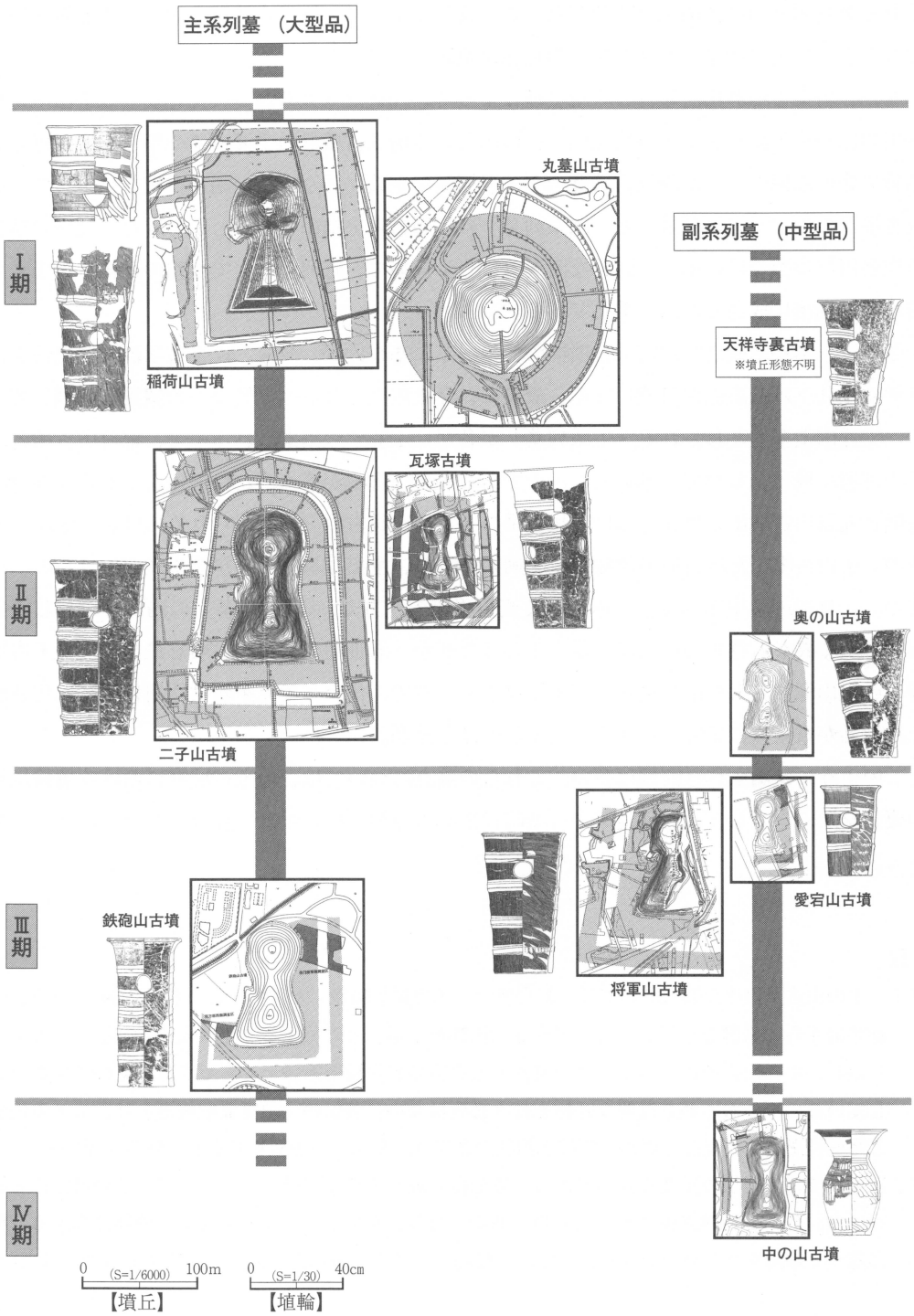


図39　埴輪からみた埼玉古墳群の階層構造

それら系統相互の系譜関係を整理した。この成果によって、埼玉古墳群を頂点とする階層秩序のもとで、各地に活動した生産集団の様相が垣間見えてきた。

また、埼玉古墳群出土埴輪の系統整理によって、稲荷山→丸墓山→天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥の山→愛宕山→将軍山→鉄砲山→中の山という埼玉古墳群の主要古墳の築造順序が確定し、埴輪生産の画期からみた埼玉古墳群のⅠ～Ⅳ期編年が確立した。この編年の確立によって、埼玉古墳群の中で「主系列墓」と「副系列墓」の階層構造を抽出することができた。従来の墳丘規模と円筒条数だけに基づく素朴な階層論を一歩進めて、時間軸の中で埴輪の系統も踏まえた階層差の抽出に成功した点は重要である。

さらに、本稿で確立した埼玉古墳群の埴輪編年に基づけば、今後、埼玉古墳群の歴史性をより深く掘り下げる議論が可能になる。最後に、今後焦点となるべき幾つかの議論を整理しておく。①「国造墓」と目される「主系列墓」が各期に１基ずつ築造される中で、稲荷山古墳と二子山古墳に挟まれる形で日本最大の円墳である丸墓山古墳が築造されたのはなぜか。②稲荷山古墳と丸墓山古墳出土埴輪のみに、比企系の「雷電山復古型」が認められるのはなぜか。③Ⅱ期の二子山古墳・瓦塚古墳の埴輪生産を画期として、生出塚遺跡で大規模生産が始まるのはなぜか。④Ⅲ期の「主系列墓」にみられる衰退現象の一方で、「副系列墓」に内容が卓越し墳丘形態も全く異なる将軍山古墳が出現するのはなぜか。⑤Ⅲ期の鉄砲山古墳を最後に、埼玉古墳群への生出塚窯産大型品の供給がストップする一方で、代わって遠距離供給用にスリム化された小型品が東京湾にまで供給域を拡大するのはなぜか。

このように議論すべき問題は多い。これらの論点については、埼玉古墳群における埴輪以外の要素を深く分析し、北武蔵地域の古墳時代後期の様相を広い視野で整理した上で、改めて論じたい。

註

（１）中の山古墳出土土器については、報告者が「須恵質埴輪壺」と呼称する（若松1989）。一方、朝鮮半島からの系譜を重視し「有孔平底壺系円筒形土器」と呼称する立場（太田2006など）もある。しかし、中の山古墳の土器が在地の埴輪・須恵器の製作技術系譜上にある点は多くの意見が一致しているので、わざわざ難解な呼称を使う必要はない。若松の「須恵質埴輪壺」は、モノの性質と歴史性をよく表現した極めて的確な用語だと思う。私は「須恵質埴輪壺」の呼称を用いる。

（２）本稿では、若松の重要な指摘である「追加樹立説」を真摯に受け止めた上で、その可能性を詳細に検討し、批判的立場に至ったものである。なお、本稿はあくまでも埼玉古墳群に関する分析に基づく結論をまとめただけであって、一般論としての「追加樹立説」を否定するものではない。

V 結　　論

1．本研究の方法論的意義

本書では、科学研究費補助金を受けて実施した研究のうち、特に関東の北武蔵地域を中心とした埴輪の分析成果を示した。最後に本書の成果をまとめる。

まず、本研究の方法論的意義について言及する。埴輪は刷毛目の同定によって、その生産窯が特定できる稀有な考古遺物である。特に、古墳時代後期の関東地方は埴輪の物量が豊富で、生産遺跡の発掘事例が蓄積されているなど、この種類の分析に適している。中でも、北武蔵地域は全国で最も生産地の発掘調査が進んでいる地域で、それぞれの産地から圧倒的優位を誇る地域首長墓群：埼玉古墳群への供給が推定されるなど、分析対象のフィールドとして好条件を備えている。

しかし、従来の研究では、刷毛目の同定がほとんどなされておらず、窯と古墳を直接結び付ける手段が確立していなかった。また、窯の分析でも、複数規格の製品が同時進行で生産されているため、その複雑な生産体制を解きほぐすことができなかった。本研究ではその課題を克服するため、各生産地を単位とした刷毛目データベースを構築した。その作業によって、同じ刷毛目で調整される個体群（刷毛目共通類型）の型式的距離が極めて近い事実を確認し、この刷毛目共通類型を基軸とした編年の確立に成功した。特に、北武蔵地域の生産窯の多くは相互に物理的切り合いをもつ八手構造のため、生産窯の物理的前後関係という従来にない決定的な方法で、窯・古墳出土の埴輪編年を確立できた。また、各窯で生産された製品の供給関係を実証したことで、地域における埴輪生産の動態を明らかにした。

本研究で示した生産地を単位とした研究方法は、今後の埴輪生産研究に大きな影響を与える点は間違いない。古墳出土資料を中心に行われてきた埴輪の系統分析が、初めて生産地と体系的に結びついたのである。刷毛目の同定という「基礎的事実関係」を整理した上での型式学的研究、これこそが埴輪生産研究が進むべき王道だと考える。

2．生出塚窯産円筒埴輪の編年

Ⅱ章では、生出塚窯産円筒埴輪の編年について論じた。

古墳時代後期関東における最大規模の生産遺跡として知られる生出塚窯は、40基の窯が発掘調査され、その報告書がすべて刊行されている。そして、発掘成果に基づく埴輪の特徴把握から、山崎武によってその製品の流通範囲までほぼ特定されている。

私はその成果を踏まえた上で、生出塚遺跡における刷毛目データベースを作成し、刷毛目共通類型を設定した。また、刷毛目共通類型の型式的特徴と窯の物理的前後関係から、生出塚窯

においてⅠ～Ⅲ期（各期に前・後を設定）、合計６段階の編年を確立した。その作業によって、生出塚に活動した集団は同時期には集中した場所で生産を行いながら、南支台→北支台→南支台と生産拠点を移していたことが判明し、生出塚における生産の諸段階を把握した。さらに、埼玉古墳群の７基を含む合計29古墳への供給を実証し、その年代をほぼ特定した。

生出塚窯における生産体制の変容過程は、地域社会の動向を反映していると考えられる。これほどの拠点生産地の様相が明らかになった意義は大きい。

３．生産地分析から見た北武蔵の埴輪生産

Ⅲ章では、生出塚窯以外の生産窯に焦点をあて、北武蔵地域における埴輪生産を巨視的に位置付けた。

分析対象としたのは姥ヶ沢窯・桜山窯である。やはり、生出塚遺跡における分析と同じく、刷毛目データベースを作成し、刷毛目共通類型を設定した。そして、窯の物理的前後関係から編年を確立し、刷毛目の同定によって供給古墳も実証した。

以上の作業によって、各窯の生産集団は地域を単位として活動しながら、基本的には地域に密着した生産を展開していた点が明らかになった。その際にも、各窯の地域社会内における位置が異なっていた点が重要である。すなわち、①荒川の東側に位置し、至近の埼玉古墳群へ専属的に中・大型品を供給すると同時に、荒川・元荒川の水運を利用して南へと供給圏を拡大した生出塚埴輪窯（拠点生産地）、②荒川西側の比企・大里の丘陵地帯に位置し、恒常的には周辺の中小規模墳へ埴輪を供給しながら、埼玉古墳群の首長墓の造営に際してのみ大型品を生産して供給した姥ヶ沢・権現坂・和名・桜山窯（衛星生産地）、の２者である。６世紀後半の北武蔵地域においては、「拠点・衛星二重構造型」の生産体制が確立していたのである。

しかし、このような体制が成立する以前の６世紀前半においては、「プレ桜山」と呼ぶ比企産の埴輪が東京湾まで影響力を持つ時代があった。両者の交代劇は埼玉古墳群の二子山古墳段階に達成されることが分かっている。

４．埼玉古墳群の埴輪編年

Ⅳ章では、埴輪窯の分析を踏まえて、埼玉古墳群出土埴輪の系統分析と編年を行った。

埼玉古墳群は、「辛亥銘鉄剣」や「武蔵国造争乱の伝承」など考古学と文献史学を結ぶ稀有な古墳群として注目されてきたが、体系的な編年はまだ確立していなかった。そのため、北武蔵各地における生産窯の分析を踏まえた上で、埼玉古墳群における各古墳から出土した埴輪の系統を識別し、時間軸を整理した。

具体的には、埼玉古墳群の10基の古墳から出土した埴輪の刷毛目データベースと刷毛目共通類型の設定を行いながら、各古墳における群別を行った。その作業によって、生産地をおよそ特定するに到り、Ⅰ～Ⅳ期の編年が確立した。特に、生出塚窯産製品の識別は容易でほぼ生産

窯まで特定できていることから、動くことのない編年を組むことができた。すなわち、稲荷山古墳→丸墓山古墳→天祥寺裏古墳→二子山古墳→瓦塚古墳→奥の山古墳→愛宕山古墳→将軍山古墳→鉄砲山古墳→中の山古墳の順序で埼玉古墳群は築造された。

これによって、従来の「墳丘規模と円筒条数の相関」という素朴な階層論を一歩進めて、時間軸の中で埼玉古墳群の階層構造を明らかにすることができた。つまり、稲荷山古墳→二子山古墳→鉄砲山古墳という首長墓系列（国造墓）が各期に１基ずつ展開する一方で、天祥寺裏古墳→奥の山古墳→愛宕山古墳→中の山古墳という副系列墓が存在し、後者が次第に卓越していく。このような埼玉古墳群における階層構造や埴輪生産の画期は、地域社会の動態を如実に示していると考える。

５．今後の課題

本研究の分析によって、北武蔵における埴輪生産の実像がかなり明確になってきた。各古墳の編年的位置付けは今までにない精度で確立しつつあるし、地域再編を示す生産体制の画期も把握することができている。しかし、地域社会を考える上で、埴輪は一つの要素にすぎない。全ての要素を同一レベルで議論することは不可能だが、この埴輪研究での成果を踏まえた上で、集落遺跡と古墳諸要素の検討、さらには東国と畿内の関係を含むネットワークの検討、文献史料の検討、など幅広い視野で地域社会の歴史性を多角的に考究しなければならない。特に「武蔵国造争乱」を考古学的に追及することが、古墳時代の関東における地域社会の新しい歴史像を導き出す研究に繋がると考えている。機が熟すのを待ちたい。

引用文献

犬木　努　1995「下総型埴輪基礎考」『埴輪研究会誌』第１号

犬木　努　2005「下総型埴輪再論」『埴輪研究会誌』第９号

江原昌俊　2004「東松山市桜山埴輪窯と製品の供給先」『埴輪研究会誌』第８号

太田博之　2006「埼玉県中の山古墳出土の有孔平底壺系円筒形土器」『考古学雑誌』第90巻第２号

岡本健一　1997「確認調査のまとめ」『将軍山古墳』埼玉県教育委員会

川西宏幸　1973「埴輪研究の課題」『史林』第56巻第４号

小橋健司　2004「山倉１号墳出土の埴輪について」『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター

小橋健司　2005「山倉１号墳出土埴輪から見た生出塚遺跡」『埴輪研究会誌』第９号

城倉正祥　2004「製作組織からみた埴輪の形態変化」『溯航』第22号

城倉正祥　2007a「生出塚埴輪窯の基礎的研究」『埴輪研究会誌』第11号

城倉正祥　2007b「北武蔵の埴輪生産と地域社会」『史観』第157冊

城倉正祥　2007c「埴輪製作に使用された刷毛目工具」『埴輪研究会誌』第11号

城倉正祥　2008「北武蔵における埴輪生産の定着と展開」『古代文化』第60巻第１号

城倉正祥　2009『埴輪生産と地域社会』学生社

城倉正祥　2010a「生出塚窯産円筒埴輪の編年と生産の諸段階」『考古学雑誌』第94巻第１号

城倉正祥　2010b「生産地分析からみた北武蔵の埴輪生産」『考古学研究』第57巻第２号

田中智子　2005「総持寺古墳群をめぐる埴輪生産と供給」『総持寺遺跡』大阪府教育委員会

轟　俊二郎　1973『埴輪研究』第１冊

廣瀬　覚　2003「柳井茶臼山古墳の埴輪とその生産組織」『立命館大学考古学論集』Ⅲ　立命館大学

廣瀬　覚　2006「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」『史跡五色塚古墳　小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会

古谷　毅　2003『埴輪工人の移動から見た古墳時代前半期における技術交流の政治史的研究』科学研究費補助金基盤研究（Ｃ）研究成果報告書　東京国立博物館

増田逸朗　1987「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社

山崎　武　2000「埼玉県の円筒埴輪の編年について」『埴輪研究会誌』第４号

山崎　武　2004a「生出塚埴輪窯の生産と供給について」『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター

山崎　武　2004b「生産と流通」『考古資料大観４』小学館

横山浩一　1978「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第23号
吉田恵二　1973「埴輪生産の復原」『考古学研究』第19巻第３号
若松良一　1982「同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析」『法政考古学』第７集
若松良一　2007「稲荷山古墳の埴輪と提起される諸問題」『武蔵埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
早稲田大学会津八一記念博物館　2002『埴輪を造る－実験考古学の挑戦－』

報告書

【赤羽台４号墳】大谷猛・中島広顕2003「北区赤羽台古墳群」『後期古墳の諸段階』東北・関東前方後円墳研究会
【井刈古墳】笹森紀巳子1984「井刈古墳出土の馬形埴輪・人物埴輪」『わたしたちの博物館』第６号　大宮市立博物館
【稲荷塚古墳】浜田晋介1992「川崎の埴輪」『川崎市市民ミュージアム紀要』第４集　川崎市市民ミュージアム
【岩鼻古墳群】宮島秀夫1989『岩鼻遺跡』東松山市教育委員会／江原昌俊1993『岩鼻遺跡（第２次）』東松山市教育委員会
【姥ヶ沢遺跡・権現坂遺跡】新井端・森田安彦1998『千代遺跡群－弥生・古墳時代編－』江南町教育委員会
【生出塚遺跡】山崎武1981『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会／山崎武1987『鴻巣市遺跡群Ⅱ（Ａ地点）』鴻巣市教育委員会／山崎武1987・1994『鴻巣市遺跡群Ⅲ（Ｄ・Ｅ地点）』鴻巣市教育委員会／山崎武1999『生出塚遺跡（Ｐ地点）』鴻巣市遺跡調査会／山崎武2001『鴻巣市遺跡群Ⅸ（Ｊ地点）』鴻巣市教育委員会／山崎武2002『鴻巣市遺跡群Ｘ（Ｍ地点）』鴻巣市教育委員会／山崎武2004『鴻巣市遺跡群11（Ｎ・Ｘ・30・33・37・41地点）』鴻巣市教育委員会／山崎武2005『生出塚遺跡（35・39・45・46地点）』鴻巣市遺跡調査会／山崎武2006『鴻巣市遺跡群12（Ｗ地点）』鴻巣市教育委員会
【亀塚古墳】狛江市史編纂委員会1985『狛江市史　原始古代』
【川田谷ひさご塚古墳】塩野博1968『桶川町文化財調査報告Ⅱ－川田谷ひさご塚古墳－』桶川町教育委員会
【毛塚古墳群】宮島秀夫2003『杉の木遺跡（第３次）』東松山市教育委員会／大谷徹2006『杉の木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
【小沼耕地１号墳】田中正夫1991『小沼耕地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
【埼玉愛宕山古墳】杉崎茂樹1985『愛宕山古墳』埼玉県教育委員会／斎藤国夫1994「愛宕山古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市教育委員会

【埼玉稲荷山古墳】斉藤忠・柳田敏司・栗原文蔵1980『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会／若松良一1992「埼玉稲荷山古墳中堤発見の朝顔形円筒埴輪」『調査研究報告』第５号　埼玉県立さきたま資料館／若松良一2003「資料報告　武蔵埼玉稲荷山古墳出土の埴輪Ⅰ」『調査研究報告』第16号　埼玉県立さきたま資料館／若松良一2004「資料報告　武蔵埼玉稲荷山古墳出土の埴輪Ⅱ」『調査研究報告』第17号　埼玉県立さきたま資料館／若松良一2005「資料報告　武蔵埼玉稲荷山古墳出土の埴輪Ⅲ」『調査研究報告』第18号　埼玉県立さきたま資料館／若松良一2006「資料報告　埼玉稲荷山古墳出土家形埴輪の復原について」『調査研究報告』第19号　埼玉県立さきたま資料館／柳田敏司ほか2007『武蔵埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会

【埼玉奥の山古墳】若松良一1989『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県教育委員会

【埼玉瓦塚古墳】杉崎茂樹ほか1986『瓦塚古墳』埼玉県教育委員会／塚田良道1988『瓦塚古墳・下埼玉通遺跡』行田市教育委員会／若松良一ほか1989「瓦塚古墳の調査」『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県教育委員会／若松良一1992「瓦塚古墳の調査」『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉県教育委員会／若松良一・日高慎1992「形象埴輪の配置と復原される葬送儀礼（上）」『調査研究報告』第５号　埼玉県立さきたま資料館／若松良一・日高慎1993「形象埴輪の配置と復元される葬送儀礼（中）」『調査研究報告』第６号　埼玉県立さきたま資料館

【埼玉将軍山古墳】杉崎茂樹1988「将軍山古墳」『丸墓山古墳・埼玉１～７号墳・将軍山古墳』埼玉県教育委員会／岡本健一1997『将軍山古墳』埼玉県教育委員会

【埼玉鉄砲山古墳】杉崎茂樹・小久保徹1985『鉄砲山古墳』埼玉県教育委員会

【埼玉天祥寺裏古墳】斉藤国夫1994「天祥寺裏古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市教育委員会

【埼玉中の山古墳】若松良一ほか1989「中の山古墳の調査」『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県教育委員会／斉藤国夫1994「中の山古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市教育委員会

【埼玉二子山古墳】杉崎茂樹ほか1987『二子山古墳』埼玉県教育委員会／若松良一ほか1992「二子山古墳の調査」『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉県教育委員会／斉藤国夫1994「二子山古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市教育委員会

【埼玉丸墓山古墳】杉崎茂樹1988「丸墓山古墳の調査」『丸墓山古墳・埼玉１～７号墳・将軍山古墳』埼玉県教育委員会

【桜山遺跡】水村孝行・横川好富1982『日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ－桜山窯跡群－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

【下松古墳群】江原昌俊・長井正欣2004『上松本遺跡（第２次）』東松山市遺跡調査会

【下道添遺跡】渡辺久生1981『野本東部遺跡群発掘調査報告書－下道添・東町・古吉海道遺跡』東松山市教育委員会／坂野和信1987『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

【白幡本宿２号墳】横川好富1980『白幡本宿遺跡』埼玉県教育委員会
【新池遺跡】森田克行1993『新池』高槻市教育委員会
【新屋敷古墳群】高崎光司1992『新屋敷遺跡B区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団／田中正夫1994『新屋敷遺跡A区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団／金子直行・大谷徹1996『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団／昼間孝志・大谷徹1998『新屋敷遺跡D区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
【末野窯】福田聖1998『末野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
【千光寺古墳群】増田逸朗1975『千光寺』埼玉県遺跡調査会
【側ヶ谷戸11号墳】山形洋一ほか2002『側ヶ谷戸貝塚－第４次調査－』埼玉県さいたま市遺跡調査会
【多摩川台１号墳】河合英夫1993『多摩川台古墳群発掘調査報告書Ⅱ』大田区教育委員会
【月輪古墳群】関口正幸・市川康弘2008『月輪遺跡群』滑川町月輪遺跡群発掘調査会
【登山１号墳】今津節生1992『登山１号墳出土遺物調査報告書』厚木市教育委員会／稲村繁1997『厚木市登山１号墳出土埴輪修理報告書』厚木市教育委員会
【とやま古墳】塩野博1967『とやま古墳』埼玉県教育委員会
【西原古墳】川越市史編纂室1972「西原古墳」『川越市史』第１巻原始古代編
【白山２号墳】中島洋一・門脇伸一1994『酒巻21号墳（２次）・白山愛宕山古墳（１・２次）・白山２号墳』行田市教育委員会
【柊塚古墳】野沢均1992『柊塚古墳範囲確認調査報告書』朝霞市教育委員会／照林敏郎2001『宮台遺跡第５・６地点発掘調査報告書』朝霞市教育委員会
【東宮下】笹森紀巳子1988『中里遺跡・篠山遺跡』大宮市教育委員会
【久本山古墳】浜田晋介・長谷川祐紀1995『川崎市市民ミュージアム収蔵品目録－考古資料第１集』川崎市市民ミュージアム
【日向古墳】浜田晋介1996「川崎の埴輪Ⅱ」『川崎市市民ミュージアム紀要』第９集　川崎市市民ミュージアム
【昼飯大塚古墳】中井正幸ほか2003『昼飯大塚古墳』大垣市教育委員会
【袋台１号墳】田部井功ほか1982『袋・台遺跡』吹上町教育委員会
【古凍古墳群】横川好富1984『一般国道254号線川島バイパス東松山地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－古凍根岸裏－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
【弁天塚古墳】金井塚良一編1976『北武蔵考古学資料図鑑』校倉書房
【法皇塚古墳】山路直充2002『市川市出土の埴輪』市立市川考古博物館
【北門１号墳】滝澤友子2007『北門古墳群Ⅰ』株式会社盤古堂
【真名板高山古墳】塚田良道・中島洋一1997「真名板高山古墳の再検討」『行田市郷土資料館研究報告』第４集

【円山３号墳】群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究会1985『埴輪の変遷－普遍性と地域性－』第６回三県シンポジウム予稿集
【馬渡遺跡】大塚初重・小林三郎　1976『茨城県馬渡における埴輪製作址』明治大学文学部研究報告第６冊
【南大塚４号墳】小泉功・田中信1988『南大塚古墳群発掘調査報告書』川越市遺跡調査会
【南原１号墳】塩野博1969『南原遺跡第１次発掘調査概要』戸田市教育委員会
【武良内古墳群】塩野博ほか1977『国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告－鴻池・武良内・高畑』埼玉県教育委員会
【屋田古墳群】横川好富1984『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XVIII－屋田・寺ノ台－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
【山倉１号墳】小橋健司ほか2004『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター
【鎧塚古墳】寺社下博1981『鎧塚古墳』熊谷市教育委員会
【雷電山古墳】埼玉県県史編纂室1986「雷電山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』
【和名埴輪窯】金井塚良一1983「比企地方の古代窯業生産の研究（１）和名埴輪窯址群の発掘調査」『東洋研究』第66号　大東文化大学／弓明義2003「新たな埴輪焼成窯を発見」『彩の国埼玉発掘調査速報展2003』
【割山遺跡】今泉泰之1981『割山遺跡』深谷市割山遺跡調査会

図表出典

図１　（城倉2009）p.78を改変して作成。
図２　（山崎2006）p.8-9を改変して作成。
図３　各古墳の報告書データより作成。
図４　各古墳および生出塚遺跡の各報告書より作成。
図５　生出塚遺跡の各報告書より作成。
図６　生出塚遺跡の各報告書より作成。
図７　（山崎2002）の研究成果より作成。
図８　（山崎2006）の研究成果より作成。
図９　生出塚遺跡の各報告書および遺構分析の成果より作成。
図10　各古墳および生出塚遺跡の各報告書より作成。
図11　分析成果より作成。
図12　城倉撮影画像をもとに作成。
図13　城倉撮影画像をもとに作成。
図14　（城倉2009）p.78を改変して作成。

図15　城倉撮影画像をもとに作成。
図16　城倉撮影画像をもとに作成。
図17　（新井・森田1998）（増田1975）より作成。
図18　（新井・森田1998）p.121を改変して作成。
図19　城倉撮影画像をもとに作成。
図20　（横川1982）より作成
図21　（横川1982）p.12を改変して作成。
図22　（大谷2006）p.10を改変して作成。
図23　城倉撮影画像および資料調査の成果より作成。
図24　（宮島2003）（大谷2006）（杉崎1985）より作成。
図25　（城倉2009）（横川1982）（大谷2006）（杉崎1987）より作成。
図26　城倉作成。
図27　城倉撮影画像をもとに作成。
図28　（斎藤ほか1980）（柳田ほか2007）より作成。
図29　（杉崎1988）より作成。
図30　（斎藤1994）より作成。
図31　（杉崎1987）（若松1992）より作成。
図32　（杉崎ほか1986）（若松ほか1989）より作成。
図33　（若松1989）より作成。
図34　（杉崎1985）より作成。
図35　（岡本1997）より作成。
図36　（杉崎ほか1985）より作成。
図37　（若松ほか1989）（福田1998）より作成。
図38　埼玉古墳群の各報告書より作成。
図39　埼玉古墳群の各報告書より作成。

表１～７　資料調査の成果より作成。

北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群

2008(平成20)年度～2010(平成22)年度科学研究費補助金
若手研究（B）研究成果報告書（課題番号20720217）

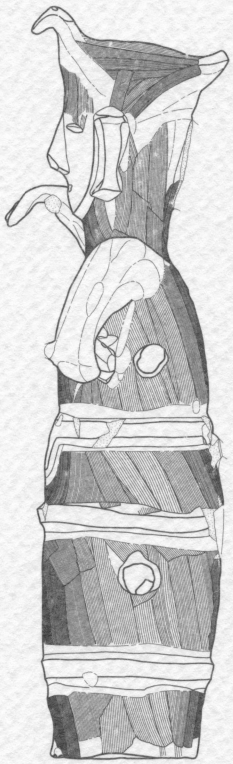
発行年月　2011年３月

編集執筆　城倉正祥

発　　行　独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
〒630－8577　奈良市二条町２－９－１
TEL　0742－34－3931

印　　刷　真陽社
〒600－8475　京都市下京区油小路仏光寺上ル

Haniwa Production in Northern Musashi District and the Sakitama Tomb Group



March 2011

Edited by JOKURA Masayoshi

Independent Administrative Institution
National Research Institute for Cultural Properties, Nara